The Twelve Men of Lette

Ota
1

豪文貳拾

第六巻

エマルソン

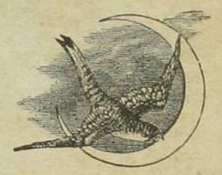
北村門太郎著

東京 民友社出版

長谷川

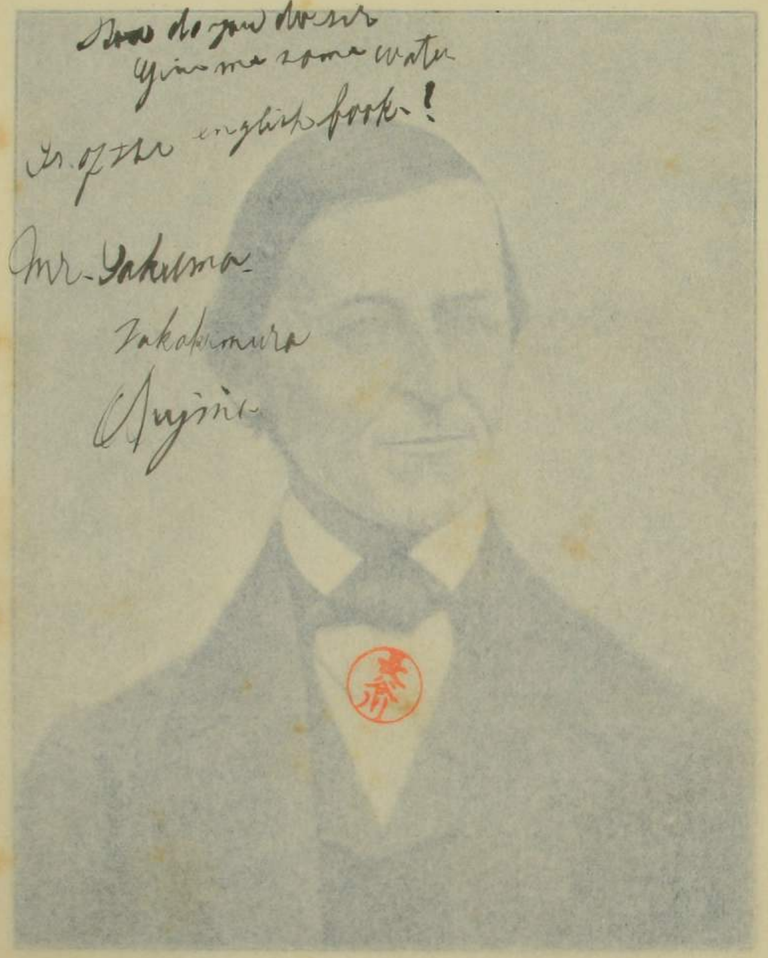
十二文豪　第六卷　エマルソン

東京　民友社發兌

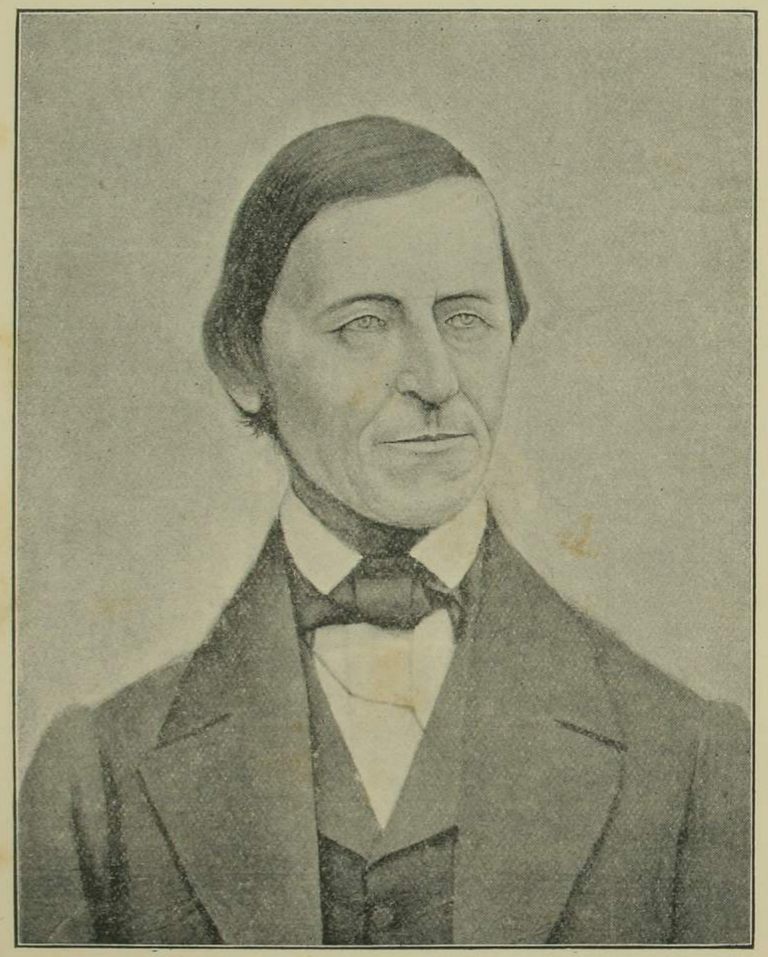


倉田水村
陶鳩

長谷川



Robert Emerson



R. Waldo Emerson

年表

西暦千八百〇八年エマルソンマサチューセット州のボストン市に生る。

同　千八百十一年エマルソンの父死去。

同　千八百十七年「ハーバート」大學に入る。

同　千八百二十一年大學を出づ。

同　千八百二十九年ボストン第二教會の牧師となる。

同　千八百三十年ボストン市の良家の女エレン、ルイサ、タッカーを娶りしが一年を出でずしてタッカー死去。

同　千八百三十二年教會の牧師を辭す。

同　千八百三十三年歐洲に遊ぶ。

同　千八百三十四年故山に歸る。

プリマウスのリデアン、ジャクソンを娶りて第二の家を成す。……

コンコルドに移る。

同　千八百三十六年處女篇自然論成る。

同　千八百四十年「ダイアル」を發行す。

同　千八百五十年英雄論上梓。

同　千八百八十二年コンコルドの哲人鬼籍に遷る。

目錄

小序

第一章　エマルソン小傳……一

其一　少壯の時代……一

父の家。母の家。家風。兄弟。父を喪ふ。「ハーバード」大學に入る。當時の素養。ボストン第二教會の新牧師。エレン、ルイサ、タッカーを娶る。

其二　彼の教職……八

彼の位置。彼の疑は主として聖晩餐の上に前せり。告別の辭として爲したる最後の說教。聖餐に關する意見。辭職。

其三　歐洲行……一七

以太利行。英國行。コレリッヂを見る。湖畔詩人ウオルヅウオースを訪ふ。エマルソンとカーライルとの會合。

其四　講話者としてのエマルソン……二九
講壇。
其五　コンコルドに於る彼……三〇
第二の妻リディアン、ジャクソンを娶る。コンコルドの新家。隱逸。處女篇。「ダイアル」の發行。エマルソンの易簀。
第一章　エマルソンの處女篇自然論……四三
新人の新聲。自然の意義。天生と術生。自然の悅樂。自然と人間との調和。自然の便用。自然の美。自然に對する愛慕。美術。言語。自然の教義。自然の純一。唯心說。詩人と哲學者。宗教及び倫理の唯心說。精神。期望。
第三章　報酬論……八七
報酬論の成りし所以。報酬の說。「心靈は一切の物を我が有とするを得

るなり」。
第四章　自信論……九九
自然論及報酬論の著者と自信論の著者。「汝自身を信ぜよ」。習慣の死骨に默從するの弊。整合を求むるの弊。人は須らく徑立して行くべし。心靈と聖大なる精神との關係。平和の秘訣。
第五章　英雄論……一一五
其一　序論……一一六
其二　プラトー、哲學者……一一七
プラトーのプラトーたる所以。プラトーの原造。英雄とは何ぞや。「大才は短かき傳記を有す」。哲學管見。東洋と西洋の思想の相異。
第六章　エマルソン小論……一二五
其一　彼の祖先、周圍、及び生活……一二五

彼の生涯の異色。彼は幸福なる者の中の幸福なるものなり。波瀾なき波瀾。

其二　彼は詩人なりや。……一二九

彼は詩人なりや、然り彼は詩人の一人なり。彼は詩人なりや、曰く然らず。彼の詩題。

其三　彼は哲學者なりや。……一三七

彼は哲學者なりや、曰く然らず。彼は本來のエマルソンなり。哲學に對する彼の意見。

其四　エマルソンの地位……一四一

偉人は自らの身邊に其時代を吸收す。彼は偉人の世に處する道を知れり。米國に於ける新人。

其五　エマルソンの自然教……一五二

彼は雜彪の犧牲なり。エマルソンの自然。彼は新しき民として生れたり。エマルソンが米國の民に施したる新福音。遙東の寂靜なる自然思想を消息したる一紳士。彼の神。

其六　彼の樂天主義……一六六

智識は悲の本源なり。偉大なる厭世家と偉大なる樂天家。彼が樂天の行路。彼は微細に自然を察したり。彼は世の規律的の善惡を卑めり。唯心的樂天說。

其七　彼の實際教……一八一

エマルソンの眞本領。エマルソンとカーライル。實際教の實際教たる所以。

小序

「大なる神才(ジニヤス)は短かき傳記を有す」

プラトー論の一節

エマルソンは凡て彼を崇拜する者のエマルソンなり。余は其中の一人なるのみ。凡ての偉人は泓澄なる淵泉の如し、余は多數の讀者と同じく聊かこの神淵より靈泉を掬し來りて之を余が讀者の前に置かんとするのみ。

紀元千八百五十二年を以てコンコルドを過ぎし一旅客記して曰く、コンコルドは素朴なる一閑村なり。住屋は概ね木造にして白堊を塗りたるもの多く、少しく目立ちたるは木造の教會二個所あるのみ。全村到るところに鬱蒼たる松林を見るべく、其間無花果樹と樫樹と

を交へ、滾々たる清流はこゝを過ぎりてコンコルド河に趣く。此の清流を隔つること遠からずして哲人エマルソンの棲家あり。一目簡古質樸、悠々怡熙の色あるを認むべく、其の内部の結構に至りては古色蒼然として人を動かすこと多し。壁間古畫を掲げ、卓上雅致ある陶器を備へ、裝飾の器物多くは舊態を存し、そゞろに哲人の祖先を懷はしむ。右に一室あり、これ哲人の書齋にして粗末なる書架は壁に沿ふて据へられ、古今の典籍を堆積す。是等の藏書多くは麤野なる製秩にして、しかも其の手ずれたる以て主人の讀書家なるを證するに足れりと。

これエマルソンが生活せし故家の一小畫なり。此の閑村は歲月の變遷に逢ひて其の景狀を改むべし、此の隱宅は風雨に襲はれて頽廢するところあるべし。此の書齋は時勢の推移によりて散逸することあ

るべし。然れども此の吾人が哲人に傳へたる文章、エマルソン全集一卷は今吾人と與にあり。後には吾人の子孫と與にあるべし。世記は世記を葬り、時代は時代を趁ひて逝けども、全世界の爲に成りたるこの新福音は何の時か將た衰滅すべけんや。高山と共に高く、長江と共に長く、遠く隔りたる人性を修養し、深く隱れたる人心の靈機を闡くべし。吾人エマルソンに於て波瀾ある歷史を見ず、大濤の巖を打つが如ぎ快觀を見ずと雖も、讀み去り讀み來つてその生涯の著述に對する時は、恰も幽澗に入りて神泉の混々涌出するを見るが如く、愈掬して愈清く、掬し盡して而して更に掬すべきものあり、遂に又た際涯あるを見ざるが如きに至る。

然り神泉なり。米國はエマルソンにおいて一の靈妙なる神泉をもてり。物質的進歩の大潮滔々として全米州を襲へるの時、その一小村

なるコンコルドは造化の最愛兒なるエマルソンを生めり。歴史なく、制度なく、故實なく、信條なき民、はじめより自由に生れ、はじめより平等に生れたる亞米利加の新民をして、金是權の俗生活より、宇宙の理法、天然の宗教に耳を傾けしめ、新しき經驗と新しき歴史を作らしめ、世界に比類なき新民主制を興さしめ、自然と人間とを調和せしめたるもの、其の功豈に偉ならずとせんや。嗚呼茫々漠々たる大米洲、たゞコンコルドと稱する一幽勝地の神泉によりて新らしき生命を有する豈に亦奇ならずや。

エマルソン

北村透谷著

第一章　エマルソン小傳

其一　少壯の時代

ラルフ、ワルド、エマルソンは紀元千八百〇三年を以てマサチユーセツト州ボストン市に生る。今を距ること百八十年チエシヤイアとベドフホードシヤイアの二地方より相結びたる英國の一家族の移住し來れる者是れ彼が父の家なり。同じ頃ダルハムとヨークの二地方より出たる一家、同じく來りてニユー、イングランドの新民となりしもの、是れ彼が母の家なり、凡そ七八世の間彼の祖先は兩族の一方に於て

聖職を曠ふしたることなく、聯綿たる清教の民、その目的を以て來り、その目的を以て立ち、その目的を以て養はれ、漸く蘊蓄して之をエマルソンに垂れたり。百五十年前、ジョセフ、エマルソンはコルドンに於て牧師たり。彼の兒ウィルヤムは革命軍に法教師たりし。その兒ウィルヤムも亦たハーバートの得業生としてボストンのユニテリヤン第一教會に群羊を牧したることあり。彼は講壇の辨士として世に名あり、その説教の梓に上れるもの稍や傳はれり。詩篇及び聖歌の抄萃を著はせり。ボストン第一教會史も亦た彼の遺稿として梓に上れり。彼は千八百十一年、四十有二歳を以て鬼籍に遷り、四男一女は悲悼に沈める寡婦を繞りて遺れり。後のコンコルドの哲人ラルフ、エマルソンは即ち其の第二子なり。

吾人をして、この四子の性行の一般を擧げて、以て其の遠祖より

承傳せし家風を睹るの便を得せしめよ。

長子はハーバードに業を卒へて後直ちにボストンに於て一女校を開きしが、昌盛の運に運ひて能く薫陶の實を擧げたり。彼は三弟の天才を欠きしと雖も亦た是れ生得の一惟心家、用ゆる所異なりしのみ。第三子なるエドワルドは幼にして俊儁の聞あり、千八百三十二年ポルトリコに航せしが該地に於て間もなく黄泉の客となれり。彼がボストン港を發するに當りて吟咏せし「別離行」は後に「ダイアル」（エマルソン等の發行せし雜誌）に現はれ、更に又エマルソンの追憶辭を添へて、哲人最後の全集に載せられぬ。第四子なるチャールスも亦た不幸にして早世す。彼に就きては、亡兄の天才と哲人の神聖とを相半ばして頗ち得たりと言ふものあり。彼の文章も亦た後に至りてダイアル紙上に現はれしが、その「人性の一致」と題する一篇の

如き優に哲人の幽趣を奪ふに足る。

斯の如き者、血に於ての彼の兄弟なり、一代の惟心的思想家、彼の日と、彼の時代の爲め、來らんとする日と、來らんとする時代の爲め、畢生の心血を費やしたる偉人、而して當代の政治的問題の如きには恬として顧みる所なく、高遠にして實際的なる哲學を新世界の上に創建したる哲人エマルソンの出る豈遇然なりと言はんや。

彼は八歳にして父を喪へり。然れども幸にして賢母と良姉との在るあり、以て滑らかに德性を暢達するの道をもてり。彼はボストンの市校に於て普通教育を享け、好成蹟を以て業を卒へ、更に千八百十七年、十有四歳を以てハーバード大學に進みしか、彼處に於ける彼の成蹟はさして異凡なりとすべきところなかりしと傳ふ。希臘及び羅典の古文學に於ては、彼の學究遠く同生の列を超へ、文法章句

の末節に於ては常に儕輩の下に落ち、哲學には彼の修養酷だ貧しく、數學には彼の成功皆無なりきと傳ふ。職員間には彼の聲聞甚だ高からずと雖、諸生の間に於ては優に一頭地を出して崇威する所となれりとぞ。

斯く彼は課程に於て饒くの成功あらざりし間に、大學の書籍室は、彼に向つて最好の便宜を與へたり。當時の書籍室僅に二萬五千卷の典籍を備へしに過ぎざりしと雖も亦た以て全米國に冠たりしもの、爰に出入して鋭意窮攻せしところ如何なる書ぞ。傳者の云ふ所に從へば、彼は書籍室に於て、初代英國の戯曲を熱心に精讀せり、繰返へし、繰返して猶ほ厭く所を知らざりしと言へり。シェーキスピーアの如きに至りては尤も彼が熟讀玩味せしところにして、殆ど其緊要なる章句を暗誦する程なりしとぞ。作文及び朗讀に於て彼は其の

大才を現はせり。第二級にありし時、「ソクラテスの性質」といふ一懸賞文を以て、彼は優等の賞典を博し、第一級に於て、同じく倫理哲學の現狀と題する一篇を以て二等の賞典を獲たり。之を以て、彼が曾つて劣りし所のものは、彼の潛心する所、他の高尚なる哲學にありしに因れるものにして、彼が他日の偉功も亦た從つて當時の素養に原つく所多きを見るべし。

千八百二十一年彼は十七歳を以てハーバードを出でたり。此時偶ま其長兄ウイリヤムのボストン市に女黌を設くるに會ひて、直に身を委ねて之を助けたり。彼は父祖の後を承けて聖職を以て身を興さんと志し、神學の講究に着手せり。當時ユニテリアン教會の教職に就かんとする者の履踐すべき學課は、カンブリッヂ神學校之を具へたれば、爰に入らずして教職に上らんと彼に取りて甚だ容易の業と

は見えざりき。然れども越へて千八百二十六年に至り、圖らずミッドレフス會の招聘する所となり、始めて講壇に上ることゝなれり。その後幾ならずして、彼の蒲柳の質は、遂に其職に堪ゆること能はざるに至りしかば、辭して南に遊び、一冬を過ぎて歸れり。彼が再びニユー、イングランドに歸るに及びては、其の聲譽一段の高きを進めて、ボストンの第二ユニテリアン教會は、その牧師なるヘンリー、ウエーア氏に副として、要用なる地位を以て彼を招きぬ。居ること一年、ウエーア氏が職を轉じて、ハーバード大學の講壇雄辨學の教授及び大學附牧師となるに及び、委せられてボストン第二教會の牧師となれり。

千八百三十年彼はボストン市の良家の女、エレン、ルイサ、タッカーを納れて婦となせり。琴瑟の交り僅に一歳ならずして、この妙齡の

新婦は病を以て沒し、哲人に與ふるに人生の悲痛なる一經驗を以てせり。

其二　彼の敎職

エマルソンの敎職に從事せしは僅かに四年に過ぎざりき。この四年の間、彼は忠實と誠意とを以て其職を全ふせし事實は、彼が辭任の際受けたる厚遇を以て之を證するを得べし。彼は其の一代の事業として滿足と希望を以て身を献じたる宗敎上の聖職に於て、自己の德性上の信念と背馳するものあるを見出せり。比較的に、彼が籍を置きしユニテリアン敎會にては、宗敎上の形式の過甚ならざりしにてさへ、彼は最早堪ゆることと能はざるものと認めたり。

彼の疑は主として、聖晩餐の上に萠生せり。彼は之を以て重要な

る宗敎上の禮法とするの非なるを悟りしのみならず、其の基督敎に於て何の用を爲すべきかを疑へり。彼は聖餐を以て、其の起原と目的に於て、純然たる精神的のものと認めたり。彼は曰く、全世界は、偶像と、禮法と、形式とに充溢せるの時に當つて、萬能の神は、獨りの人を遣はして、人類をして心を以て事ふるを敎へしめたり。宗敎的の生活とは、まことに善良なる生活を指して言ふなり。犧牲は烟の如く、形式は影に過ぎず。ナザレのイエスは斯く敎へて、斯く生きたり、斯く生きて斯く死したりと。

彼は聖餐を以て、萬世動かすべからざる形式として、イエスによりて定められたるものと認めず。當時にありては如何なる必要ありて、以て此形式を定むるに至らしめしも、其必要は何れの時代にも亘りて不易のものと信ずる能はず。彼には、この神聖なる儀式も、

一の外被の如く見られて、時と共に廢る可きものと認られたり。是を以て、彼は、麵包と葡萄酒の聖式に與りて自から之を守るを屑しとする能はず。言を爲して曰く、吾人はイエスの道と、生命とを至大の恩賜とするが故に、彼の死を紀念するは正當に吾人の爲すべき所なり。左れば、斯の如く嚴そかなる儀式に代ゆるに、或る他の方法を以てせば、余は良心を以て之を奉ずるを得べしと。

會衆は彼の意見に同ずる能はず。爰に於て、聖餐の問題は、エマルソンをして甘んじて聖職を退くの止むべからざるを致せり。當時彼が會衆に向つて告別の辭として爲せし最後の說敎は、フローシンガム氏の新英州に於ける超然派と題する一卷に載せられて今日に傳はれり。

此の說敎に於て、彼は先づ題を羅馬書第十四章十七節に取り、(そは神の國は飲食に非ず惟義と和と聖靈に由る歡樂にあり)徐ろに聖餐に對する前人の所見を排刊し、以て聖餐が萬世不易の傳說たるに遠きを明らかにし、而して後歩を進めて、自から保持する意見を吐露し、偷越の節を弟子と共にせしイエスは、永代に向つて守らるべき心を以て此の制度を建てしものにらざることを論じ、一轉して聖餐の權威に論及し、馬太、馬可、路加、約翰の四福音書に錄するところを解拆し、果して凡ての人類が、凡ての時代を通じて守るべき儀式として傳せられしか否やを、其の精神に問ひ、更にイエスが此の節を擧げし時の意匠を說きて曰く、イエスは猶太人なり、彼は今まで同じ國の民と與に座せり、之を以て其の國民的の節會を執るに至りしは必然の勢なり、彼は死の旦夕に迫るを豫知せり、弟子達をして、此の異變に處するの用意をなさしむるの必要なるを前見せり、之を

以て彼は從來の歴史的の契約を轉じて、己れの血を以て封印したる新らしき契約の意味を悟らしめんと圖れり。と說き、斯く說き了りて、再び保羅に歸り、其の羅馬書に錄るせし所の主旨を窺ひ、初代基督敎信者の、基督の再來に關する惑ひを證明し、保羅の如き精神家すら尙ほ儀式を保守するの止む可からざるものありしを辨じ、遂に結論して、四福音書の記錄も、使徒保羅の見解も、以て聖餐の本據を牢固するに足るなしと斷ぜり。

ユマルソンの聖餐に對する意見を概括すれば、之を左の三項に分つを得べし。

第一　歴史は聖餐の制度を承認す、然れども聖餐の權威に就きては之を疑はざるを得ず。耶蘇之を命ぜりとは人々の口にする所なれども、彼等にして、予が爲せる如く、新約を講究せば、耶蘇の之を命ぜし事に就きて、予と同じ不信に陷らざらんと欲するも得可からず。

第二　此の儀式を執行する事は、神と靈魂との關係に對する吾人の意見を糾錯するの恐れあり。聖餐は人々の適意に守るものにあらずして、權威の强制なり。基督によりて命ぜられたる、基督に對する感謝の徵なり。斯の如くんば祈禱は靈魂を以て、直ちに神に接せしめながら、却つて其間に於て心の裡に基督を挿ましむるものにして、之を基督の精神に尋ぬるに、その自から要めざりし權威を被らせられ、却つて信仰者の心神を搖動するの恐れあり。人は一の神に事ふるの外又た何をか求めむ、一の神の外の神に事ふるは、凡ての善良なる意象を擺脫するの最始なり。

第三　東方の民と、東方の思想に適せし物質の應用は吾人に適せ

ず。表象的の事物を以て、思想と感情とを現はすは吾人の能くする所にあらず。パンを割きて喫ふと、基督に順ふとは、自から別物なり。

彼は斯の如く、聖餐の權威を卻けしと雖も、彼は適當なる方法を以て、イエスを紀念し、イエスに對する景仰の念を表はす事に就きては、却つて衆人の儀式的に守る聖餐よりも誠實なる意見を持し、終始之を更むることなかりしと云ふ。

彼は會衆の意見が、彼の所説と相背くこと遠きを見て、最後の決意を陳じて曰く。

予は牧會の聖職を輕んずる者にあらず、然れども若し此の聖職に在るの間に一事一物の全心全力を以て從事することを得ざるものあらば、予は甘んじて此職に留ることを屑とせず。予は聖餐に對して敢て抗辨するの意ある者にあらず。唯だ、予が之に向つて同情の念を持續することを能はざるを悲しむのみ。予自ら聖職に呼ばれて、予自から之を司る事なかりせば、予は何人にも予が異説を告ぐるの要は無かりしならむ。世人之を是認し、天も亦た之を歡ばゝ、世界の終局まで此の儀式の繼續せらるゝことあるも、予に於ては何の憾みあるなし。今日の宗教的衆會は、聖餐を守るを以て、牧師たる者の必らず爲さゝる可からざる職分の一と認む。然るに予は既に良心を以て此式を司ることを能はず、是に於て予が進退は決せり。予は爰に謹んで諸君が予に厚囑せられたる聖職を再び諸君の手に返納するの止むべからざるを告ぐ。予は斯の如く袂を諸君に分つと雖も、予が不能、幸にして上帝の許すところとならば、爾今予が生活は革まるとも、從來の目的は一毫も是を損することを無かるべし。

斯く辨じ了りて、彼は悠然として壇を下れり。彼は斯くの如く良心の故を以て、過ぬる四載の短日月に於て克ち得たる成功と希望とを拂ひて立てり。此事ありしは、千八百三十二年の九月、エマルソンは此時僅かに二十有九歳なりき。

彼の辭職は聽かれたり。然れども教會の財務者は、彼の俸給を繼續すべき旨を申出たり、蓋し彼が幸にして、其の難問を經過して再び聖職に復する事あるべきかの細き希望を蓄へるなり。此の厚意あるにも拘らず、エマルソンは斷然之を辭し、同年の臘月を以て、匆々笈を負ひ、遠く歐洲に客遊せり。是より先き、彼は其の最愛の新婦を失ひてより、健康と精神兩つながら毀損するところ多かりしを以て、此の行は彼に於て止む可からざりしものなりと雖も、一方より之を覗へば、彼が歐洲に遊ぶの意蓋し偶然にあらざるなり。吾人をして、去つて彼の足跡を檢せしめよ。

其三　歐洲行

彼は尋常の旅行家が、山水の勝を探り、都城の華を眺めて、富みたる者の尙ほ多くを求むるが如く、病みたる者の身境を轉ぜんことを欲ずるが如く、只管地球の表面を貪ぼり行くを事とする者と同じからず。彼は自ら言へり、我れ家に在りて、居常書窓の下には斷金の交りをなせし、現存の大思想家等を歴訪して、まのあたり其風采に接し、其の功績を賞し、且つ思想を交換するを得ば我れ又た何をか望まんやと。巨人は高山の如し、遙かに之を望むも尙ほ精神を煥發すべし、近いて之に接する時快趣如何、宜なるかな、ポルテーアが曾つて羅馬に遊ばんことを勸められし時、我は彼邦の凡ての華麗

と壯嚴とを觀んよりも、寧ろ靜かに書齋に屏居して、新刊の英書二三卷に接するの快なるに加かずと言ひて斥けしや。

ユマルソンは此の第一歐洲行に就きては、多く吾人をして知らしめず。歷遊せし地名と、旅中の出來事等は悉く埋沒して、吾人に傳はらず。後年に迨びて、其の手帳より摘採して上梓せしものにより て、吾人は聊か彼の遍遊と、會見とを想察するの便を有つのみ。

彼は先づ以太利に行けり。彼處にて、彼は米人にして彫刻の名家なるホラシオ、グリーナッホと交遊せり。グリーナッホは容貌端正なる紳士、識見卓儁、思想高遠、深く古代の美術に心醉せしの人なり。グリーナッホの紹介にて、彼はウオルター、サベーヂ、ランドルをフロレンスに訪へり。その後招かれて再びグリーナッホと共に行きて饗應を受けぬ。ユマルソンは此の美術國に滯留する事數月、辭し去

つて佛蘭西に趣き、直ちに英國を指して行けり。

英國は彼の思想の故鄕の一なり。當時にあつて英國の思想を代表したるものエデンバロー評論に加くは無かりき。此の評論の寄書家は即ち英國思想界の背隨なりき。指を屈め來れば、セフレーあり、マンキントッシあり、ハラムあり。其他スコットあり、ブレーフエーアあり、デソナンシーあり。然れどもユマルソンが尤も多く仰望せしはコレリッヂ、ウオーヅウオルス、デ、クインシー及びカアライルにして、就中當時壯年の評論家として英名炳然として文壇に輝き出でしカアライルに會せんことは此の行に於て彼が尤も多く矚望せし所なるべし。彼は言へり、ギヨーテ若し猶ほ在らば、我は獨逸にも行くべかりきと。ウオルター、スコットも亦た既に沒して在らず。是等の諸家の外、我は如何なる人物をも見んことを要せずと彼は言

へり。

彼は旅行せり。彼の旅行は此時に於て始まりしにあらず。彼は旅行家として生れたるなり。ホーマー、プレトー、シェークスピーア以下の古今遠近の大思想家は彼の地圖の上にありて、常に彼の思想を逍遙せしめし名跡なり。新らしき陸に生れ、新らしき民となり、新らしき制度を建てんとする彼は、古るき、遠き地方に彼の思想を運びて、謂ふ所の愈故くして愈新らしき眞理を捉へ來るが爲に、彼は書史の上に於て足らざるところを現實の名勝に向つて求めたり。著茫たる夜天、群星光りを爭ひて、或は遠く或は近く、或は大に、或は小に、或は明らかに、或は暗く、或は慧星の如く天系を擾して渡るあり、或は晨星の如く暫らく赫灼として而して去るあり、或は又た忽ち飛びて忽ち消ゆる流星の如きあり。斯の如きは思想界の天

なり、エマルソンは爰に旅行せり、現存の名家に接見するは、猶ほ既往の巨人に會するが故に、必らずしも懶惰なる崇拜者が、交遊間に倨らんが爲に名流を訪問するものと日を同ふして語る可からず。

彼は自ら錄るして言へる如く、千八百三十三年八月五日を以て、倫敦よりハイゲートに趣き、書を裁して文壇の老將なるコレリッヂに送り招見を得んことを請へり。同日午後一時彼は引かれて、老餘の文豪に接するを得たり。

コレリッヂとの對話は彼を歡ばせしものにあらざりき。その談話の問題となりしものは、神學上の雜俎、若しくは時事片々の類にして、エマルソンが聞かんと要めたるところの者にあらず。惜しい哉、老衰の文將、この亞米利加の新天才を看破することカァライルの如くなる能はして、空しく壯年旅行家をして、彼は老ひたり、新客を

迎へて相共に考ふるの餘裕を存せずと言はしめしや。コレリッヂとの對話は載せてエマルソンの英國小記にあり。コレリッヂがユニテリアンを攻擊し、博士チヤンニングを排斥せしなど、徒らにエマルソンの微笑を買ひしに過ぎざりしを想はしむ。是より後一歲を過ぎずして、コレリッヂは他界の人となれりと言へば、曉星の既に光芒を收めて、靜かに天日の上るを俟てるの時にして、對話の無味澹白なりしも之を以てなるべしと知らる。

コレリッヂに會見せし後十餘日を經て彼は湖畔詩人ウオーヅウオルスを訪んとてライダル山に趣けり。湖畔詩人此時既に六十三の高齡に達せりと雖、未だコレリッヂの如く衰廢するところなく、一見して詩界の大革命家なる狀貌を認ぬ、エマルソンは記して曰へり、彼は偏執に捉はれず、眼鏡に損ねられぬ粗樸なる容貌をもてりと。

此の未來の哲人と盛名の詩人との會話は錄してエマルソンの英國小記にあり。詩人は多く亞米利加に就きて語れり。中に就きて、彼は眞贊に亞米利加の時弊を此の遠客の面前に開陳せしなど、尤も多くエマルソンを滿足せしめしなるべし。彼は曰へり、余は恐る、彼等(米人)が餘りに拜金に流るゝを。余は恐る、彼等が餘りに政治を尊びて之を手段とはせず却つて目的とするが如き觀あるを。余は恐る、彼等は餘裕の人を容るゝ能はざるをと。

話頭は一轉して古今の著書に移れり。更に又た現代の文學に進めり、カアライルの評論及び飜譯は如何と米客は問へり。主人は答へて曰ふ、予は少時の間カアライルが狂漢ならざるやを疑へりと、主人は更に語を進めてギヨオラを罵れり。彼のウイルヘルム、マイステルを以て罪惡に充てる書と呼べり。老詩人は遠客を引いて小園に行

けり。その逍遙默思の詩境を示せり。その近作の詩を咏出せり。斯の如くして洋外の思想家は辭し去れり。

是より後拾五年を經て、エマルソンは再び歐洲に遊びてウォーヅウオルスを見舞へり。此時に至りては、彼は既に曩日の無名旅客にあらず。特別の招待を以て、到る所に講話をなしつゝ英土及び蘇國を過れり。ハレット、マルチノーと與に湖畔詩人を訪へば、八十歳に垂んとする鶴齡の詩人依然として舊時の如く、懇ろに千里の客を迎へ、清談時を移せりとぞ。

エマルソンは既に意中の二將星を訪へり。最後に訪ふ可きはトマス、カアライルなり。カアライルはエマルソンに長ずること八歳、此時クライゲンプットの瘠地に幽居して、怪巖を攀ぢ、深澤に下り、己れの力に於て己れの文學を樹て、己れの途に由つて己れの業を成さんとする思想界の妖星なり、エマルソンを英國に引付けしは、コレリッヂにあらず、ウオーヅウオルスにあらず、却つて此の妖星こそ尤も多くの引力を彼の上に持ちしなれ。

彼はグラスゴーよりダムフライに來れり。其處より拾六哩又た客車を通ぜず、驛亭に就きて村車を僦ひ、僅にクライゲンプットに達するを得たり。落莫たる寒村、雲低く巖高し、見上ぐれば磽确たる丘上に寂寥として一屋立てり、此裡に棲めるもの誰ぞ、問はずして知る、後年一世を震駭せし散文詩人トマス、カーライルが其の雄大なる心を爰に荒漠たる「自然」に養ひつゝあるを。

客は畏愛を以て來れり。主人も亦た慧眼を以て此の非凡なる遠客を迎へたり。一見舊の如く、又た前の二者に似る可くもあらず。主人は例の自家製造的の妙語を以て、能く語り能く罵れり、客は沈靜

なる思想家として、能く聽き、能く注意し、又た能く語れり。

始め數刻の間、彼等の談話は時事と著書と世評に充たされたり。然れども相携へて家を出で、山高く岩秀づるところに來れば、彼等の談話も亦た自から其の趣を變へざる能はず。遙望すればクリッフエル山は帽を戴かずして高く聳へたり。遠くライダルの彼方を眺むれば、ウオーヅオルスの山鄉烟霞の裡にあり。爰に彼等は膝を並べて座せり。カアライルは既に皮肉冷嘲の人にあらず、純乎たる眞人、雄大なる靈人としてエマルソンの眼中に映じ來りしなり。彼等は與に靈魂の不朽を論ぜり。エマルソンの英國小記に錄して曰く、彼は時代と時代との關聯を洞觀し、各般の出來事が未來に繫接するの理を究察せりと。吾人はエマルソンが當時カアライルに向つて如何なる哲學を語りしかを知らず、然れども此記事を以て推すれば、吾人は如何に後年の酬報論自然論等の記者が、十九世紀思想界の雙兒とも言はれし長兄に向つて其の靜和なる舌を以て、圓滑なる哲理を談ぜしかを察するに餘りあり。

此の會合は極めて短期なりしと雖、兩家の交情は斷金も啻ならず、是より後四十四年カアライルが冷々たる墳墓に入りしまで、太西洋の波濤は彼等を隔てども、其の友誼を妨ぐるものなかりき。英國に於る或書肆に、此書の著者は稍や才能ある人なりと見ゆ、然れども之を公衆に示さば果して如何と言はれ、後又たフレザー雜誌に登載して、幾多の小記者小評論家の爲に、酷くも亂擊の下に倒れんとしたるサルタ、レザルタスを緝綴して太西洋の此方に多數の讀者を作りしは、此の會合によりて百年の友となりしエマルソンなり。

彼等は別れたり。之より相見ざる事十五年、星霜は兩家を變ゆる

こと多く、此の人生の正午期を過ぐる間に、與に赫灼たる功業を奏し、與に廣大なる領地を拓き、與に榮譽ある勝利者となれり。エマルソンは其の自然論を始めとして幾多の論文と講話とによりて、彼の本國に於ける思想界の巨物となれり。彼の名聲は遂に其の親友の邦民をして、懇ろなる聘禮を以て歡迎せしめ、普ねく英土及び蘇國の要地に其の得意の講話を開くに至れり。カアライルは此間に於て、佛國革命史を始めとして、幾多の名什を公けにし、英國文學の舞臺の上に、巨大なる人物となれり。エマルソンの英國小記は彼等の再會を敘する事頗る詳しと雖、余は此著に於て、之を細說するの暇なし。此後再び二十年の歲月を經て、彼土に渡り行き、與に共に人生の難戰を過ぎ、靜かに既往を語りし事あれど、記錄の以て徵す可きなければ之を報ずるに由なし。

其四　講話者としてのエマルソン

エマルソン第一回の歐洲行に於て故國を離るゝ事一年に垂んとして、健康と精神兩つながら本の如きを得て米國に歸れり。

彼は已に敎職を棄てたり。その幽靜圓美なる哲學は、何れの舞臺に於て演ぜられんかは第一の疑問なりき。恰も好し、此頃新らたに萠芽し來りたる平俗講話の組織は、追々に其の地歩を進めて、聖なる講壇の外に於ける衆民の講壇とはなりける。此の講壇にては、如何なる問題にても、如何なる思想にても、撿束せらるゝことなく發露するを得るを以て、エマルソンは直ちに取つて以て我が事業の器となせり。

彼の最初の講話は、ボストン工藝會に於てせし「水」と題する一說

なり。之に次ぎて、彼は以太利に於ての見聞を講ぜり。「人間と地球の關係」も、此の時代の講話なり。其後彼はミカエル、アンゼロ、ミルトン、ルーサー、ジョーチ、フオックス、エドモンド、バルク、等の五講話をなせり。右の五者の中前二者は、彼の講話の最初の上梓として、北米評論紙上に出でたり。

其五　コンコルドに於ける彼

天才を狂に近しと言ひそめしは何時よりの事とは知らず、例しなき才力を與へられし者に、無垢無瑕なるものゝ稀なるは、われ人共に嘆惜するところなり。吾人のエマルソンを傳するに當りて、私かに以て異數とし、特に大筆せんとするは、彼の生涯の和平にして波瀾なく、曾つて一度の汚點を印せし事なき是なり。彼は實に清敎徒の清敎徒たるの實を其生活に於て擧げたり。彼は血に於て新英國の完全なる縉紳、心に於て純理の健全なる洞見者なり。吾人は彼を傳するに當りて、其の靜平無事にして讀者の心を鼓舞するが如き奇趣あるを見ざるを憾むなき能はず。人は傳記を好む者なり、詳しく言へば、自から經驗し、自から履踐すること能はざる出來事を愛する者なり。カアライルに於て吾人之を見る、ギヨオテに於て吾人之を見る、然れども來りてエマルソンを見れば水平らかに浪動かず、將た又た何の奇趣あるを認むるなし。エマルソンの生活は平凡の生活なり、然れども此の平凡なる生活に大なる生命あり、この生命は即ち彼の傳記なり。吾人をして直ちに進んで、如何に此の靜穩なる生活が、コンコルドの僻邑に過ごされしかを見せしめよ。

千八百三十四年を以て、彼はプリーマウスのリデアン、ジヤクソン

を娶りて第二の家を成せり。彼等の撰んで以て久捜の地と定めしは、ボストンを離るゝこと遠からざるコンコルドなり。

彼の家は如何に、財政は如何に、彼は甚だ幸運なる者にあらざりき。彼は其の第一の婦を失へり。彼は其の第一の兒を失へり。然れども是等の災厄は適ま以て彼を開悟せしむるに足るものにして、彼を驅つて悒鬱に投ぐることはなかりし。彼は樂天家として生れたり。天を知れり、人を知れり。クライゲンプットックに於けるカアライルの隱栖を羨望して、之を以て隱哲の理想となさんとせし彼は、遙かにカアライルよりも賢こく且つ樂しき生活を撰めり。忙劇も彼を圍まず、將た又た全く靜閑に苦しむこともなく、悠々自適して、自からの野を思想界に耕やし、且つ考へ且つ說き、以て一生を終りしなり。

彼がカアライルに與へし一書の中に言へる事あり。

余が持てる財産とては二萬二千弗計にして、其の收獲は凡そ六分程に當れり。其外には、余の冬期講話によりて得るところのもの、凡そ八百弗程あるのみ。余は此の歲入を以て、家にありては一個の富民たるを得るなり。余は家に滯まらんことも、外に旅せんことも、此の歲入を以て思ふ儘になるなり。然れども外に出づる時は、余は富みたる旅客となると能はず。余は自から虛飾と思へる者の爲に一金をも費やすことをせずと雖、不取締によつて圖らざる費消をなすことあり。余が妻は基督敎の化現とも云ふべきもの、余が母は溫柔にして極めて保守的の人なり。余が一子は愛すべき事日暉の如く、日夜翫賞に厭かざらしむ。此外余が家には三名の婢あり、厨房に從事するもの、裁縫に從事する者なり、其他

日常の細事に管りて充足せざるものなし、斯かる者余が家なり、余は此に起臥して、或は讀み、或は書くこと凡て縱心を以て本とす。余が筆硯の業に至りても亦た然り。

夏間には隣人の助けを得て小園を理する事余の尤も樂しとするところなり。一週間程前の事なりき、余は我が家の西宅地の西側に柏樹四十株を植へたり、是は嚴冬に到りて逆風の凜烈なるを禁がんが爲なり」。……

その後、彼は自から新らしき遊具（彼の自ら言へる）を購ふ事を得たり。そは他ならず、凡そ四十エークル計の叢林にしてウワルデン池と稱する半俚の廣袤をもてる小池の水頭にあり。彼がカアライルに與へたる書中に記して曰く。

頃日の春風駘蕩の中に於て、余は我が新領地に行き、楓、楊、樫、

松の類の新綠柔芽の間を進みて、余が手斧を以て藪を斫り徑を通じ、池水に沿ふて新らしき趣致を開くなりと。

彼は清き朝を以て著作に從ふを喜べり。彼の日常のつとめは靜かに祈禱を以て始むることあり、プレトー其他の古人の書を讀みて始むることあり。彼の生涯は靜かなる沙の上を滑らかに轉ぶ輪の如し、常に同じく常に異なれり。然れども彼は亦た隱栖の人に常なる囁語を洩さゞること能はざりし。彼はカアライルの熱意熱中を羨やめり。園藝は時として彼の數日數週を費さしむることあり。彼は自からの斯かる事に酖醉するを悔やみて、學者須らく博奕を避くるが如く斯の如き有害の娛樂を避くべしと言ふに至れり。

隱栖は即ち隱栖なり。然れども彼の隱栖は、その學理が表はす如く、東洋流の隱栖とは相隔つる事甚だ遠しと謂つべし。彼はその邑

里に於て、些々たる事件にも、自から避くることをせざりし。彼は十數人の親友が時に此の幽棲を訪づれ來るのみとカアライルに告げしにも拘らず、彼の門は常に窮乏せる漂流者の爲に開かれてあり。迷へる者、苦しめるもの、人世の悲觀に疲れ果てしものゝ爲に、彼は巖上の巨燭の如く、一點の道火を彼等の心頭に送り遣りき。暫らく彼の隣人たりしホーソーンの彼に就きて書きし言葉に曰く、「時としては林間に、時としては途上に、彼に出會ふことある毎に余は自づから清涼なる心地す。彼の周邊には恰も團々たる清光の如き、純良なる光り充てり」と。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

彼は斯の如き尤も自然に近き生涯を送り、尤も幸福なる世路を渡り、亂れざる思想と撓まざる德性とを積みもて行きし間に、各地よりの招聘に應じて、メーン州よりカリホルニヤ州までの要地に於て其の莊重謹嚴なる講話をなせり。彼は其の生涯に於て、寂寞と雜鬧との中間を歩みし間に、其の思想に於ては、能く純理と實行との和合を擧げたり。

マサチユーセツト州のサレムにありし講壇は彼が四十餘年間引續いて講話をなせし所にして、其處にて演ぜられし重なるものは。英國史十回（千八百三十五年）歷史哲學十二回（千八百三十六年）人間の敎養十回（千八百三十七年）現今の時代十回（千八百二十九年）時七回（千八百四十一年）等其他なり。此等の講話は屢〻再演せられし事あり。彼の著述として殘れる者も殆んど總て此類の講話の醇粹を緝めたる者なりき。

「自然」と題する名篇は千八百三十六年に於て、彼の手に成れるものなり。之れ即ち彼の著述の第一にして、而して彼の思想の金鑰たるもの、吾人は後に於て之を讀者に紹介せんとす。

千八百四十三年、ダイアルと題する年四回の雜誌現はれたり。此の雜誌に關する重なる人々を擧ぐれば、マーガレット、フラア、ウイリヤム、チヤンニング、セオドール、パーアー、ヘンリー、トリユー、ヂヨルヂ、リプレー、チヤールス、ダナ及びワルド、エマルソンなりき。

「今の米國の空氣は餘りに停滯勝ちになれり」とは彼等がダイアル紙上に於て宣言する所にして、彼等は當時の時勢に外れて神學上の問題を自由に談論するを以て此の雜誌の一の目的となせり。彼等は超然派の名稱を以て普ねく知られたり。而してダイアルは實に此の派の唯一の機關雜誌たりしなり。ダイアル世上に生存すること四年、始めの二年はフラー孃其の編輯に從事し、後の二年はエマルソン之を擔當せしといふ。吾人は此雜誌の果して當世に喝采を博せしか否やを知らん爲め、左にエマルソンのカアライルに與へし書中の言葉を引用せんと欲す。

予がダイアルの編輯を擔當するは必要上止むるを得ざるものあれば なり。ダイアルは收支相償はざる程の僅かなる講讀者を有せり。其の編輯者も其の寄書家も之によりて一錢をも受くると能はず。適ま受くる者は、俗界の新聞紙の上に出る罵詈なり、之すら甚だ多からず、世人は概して之に對して無言なる者なり。……

ダイアルの發行に先つこと二年彼はハーバート大學神學部の聘に應じて一場の演說をなせし事あり。此演說は端なく世衆の反擊を挑發して、論難攻戰の聲甚だ高く、異端の唱道者として彼の名此の一

演説に高まりき。或は無神論者と呼び、凡有教徒と罵り、ひたすら此演説を攻撃したりと雖、エマルソンは平然として關する所なし。是より先き、カアライルは彼に告ぐるに、世上の褒貶に關することなく直ちに我が言はんと欲するところを言ふ可きを以てせし事ありしが、エマルソンには斯かる忠言の一の用をも爲すこと能はざるは事實に於て證せられたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼の小歴史はかくの如く平々坦々たり。一の奇とすべきなく、一の動搖とすべきなく、悠々として千八百八十二年四月二十七日遂に黄泉の客となれり。たゞそれ平々坦々たり、其の一の奇とすべく波瀾とすべきものなきが如きは、則ち彼が大にバイロン、カーライルの徒と異なれるところなりとす。更に吾人をして少しく内部のエマルソンを窺はしめよ。

第二章　エマルソンの處女篇

自然論

余は之れより以下、コンコルドの哲人が吾人に殘せし著作に就きて、吾人の讀去讀來して嚼み得たる妙趣を摘萃して之を諸君に頒たんとす。先にも言へりし如く、エマルソンの一生は極めて無事穩靜なる生涯にして、普通の傳記隨喜者の爲には懶眠を催ふすに足るべきに過ぎざるが故に、その著述も亦た靜平なる眼光を以て讀むにあらざれば殆ど何の意義あるかを解するに途なきなり。何の主義と戰へり、何の艱難に打勝てり、何の事業を成し遂げたり、等の記事は以て讀者の睡眠を破るに好けれど、吾人は不幸にして、エマルソンの傳に於て、是等の壯快なる文字を用ふる能はず。讀者請ふ、吾人

が讀者を攪醒することの少なきを咎めずして、吾人と與に此の幽寂たる樂天家の處女篇「自然論」を研究せしめよ。

「自然論」は彼の處女篇なりし事前にも之を言ひぬ。第一歐洲旅行果てゝ新らしき勇氣と健康とを以て故郷に歸り、やがて婦を迎へて、家をコンコルドに結ぶなど、凡べて多祥多福の周圍の中に生れたるもの、此の自然論なり。彼は今ま生涯の變化多き時を過ぎて、自からの一生に於ても、過去と將來の中間に立ち、新しき希望と、新らしき生命を以て稜々たる靈骨をさへ備へて、深く「我」と「我が外」とを究察せり。寂々たるコンコルドの寒村、山の斷々たるなく、崖の峭々たるなく、風高からず、流れ急ならずと雖、天麗らゝかに氣清き時、一塊の土も、一片の花も、此の讀心詩人の眼に入りて、何れか天地の靈韻とならざるべき。クライゲンブットの犖确たる岩上に、猛風を叱咤せし人の記憶は明らかに彼の眼中に存すれど、敢て彼に傚はんともせず、又た傚はんとて傚ふべくもあらざれば、靜かに物を觀じて、その如何に深遠なる意義を含めるかを窺ひ、漸く悟り漸く知るところは遂にカアライルが猛進せし方向とは全く軌を異にして、その本國の共和制と尤も適應したる十九世紀の福音を宣布するに至れり。

彼はウオーヅオルスの如く、又た凡ての他の偉大なる思想家の如く、自からの領地を自らの鋤犁にて開拓せざる可からざるは勿論の事なり。加之或る意味に於ては、戰の字をもて言はざる可からざる程の難局にも當らざる可からざりしなり。ハーバートの大學にて爲せし彼の講話の如きは實に其の一に數へても不可なかるべし、獨りハーバート大學の講話のみにあらず、彼の一生は亞米利加の沈澱せ

る炭素多き空氣に向つて、永久に酸素を吐き出すべき叢林の如く、常に此の炭素的の思想に對しては無意識の敵となれるなり。彼のダイアルに就きては前に言へるが如く、彼の自然論も亦た同樣なる運命に陷りたるなり。彼は僅に五百部を刊行せり、而して之を賣盡すまでには十二年を費やしぬと聞けば、如何に彼の靜寂なる哲理が炭素的亞米利加に不恰好なりしを想像するに餘りあり。

劈頭第一、彼は其の序論を起して曰く。

我儕の時代は(Retrospective)なり。祖先の墳墓を築き、傳記を、歷史を、評論を書けり。過ぎ去りし昔時の時代を懷へば、彼等は面々相對して神と自然とを視たり。然るに我儕は彼等の眼を通じて、僅かに之を視るのみ。何が故に我儕も亦た彼等と同じく、宇宙と純眞なる關係を有つこと能はざるか。何が故に我儕も亦た、傳說

にあらずして、內觀の詩と哲學を有つこと能はざるか。彼等の歷史ならずして、啓示の宗敎を有つこと能はざるか。我儕の周圍に、我儕の中に通じて流るゝ生命の漫々たる大江の、由つて來る所なる自然の裡に、暫らく身を投げて、その我儕に給する權(ちから)に因つて我儕をして自然と比例的なる活動に趣かしむるを知らば、吾人何すれぞ過去の枯骨の中に徘徊し、此の生きたる時代を擧げて、舊衣の假裝に委せしむることをせんや。大陽は今日も亦た輝けり。野に行けば尙ほ多くの靑草野花あるなり。新らしき陸あり、新らしき人あり、新らしき思想あるなり。我儕をして我儕自らの業と法と道とを要求せしめよ。

新らしき陸、新らしき人、新らしき思想、是れ即ち彼が新らしからざる哲學、新らしからざる人類、新らしからざる地球より、常に

新らしき理と法と業とを提げ來りて、之を世に傳へんとしたるものにして、むかしは預言者詩人、直接に神を自然より直覺的の啓示を得たりしなるを、今の時代何ぞ徒らに形式と理論とに拘束せらるゝの甚しき、太陽は昔時の如く今日も亦た輝けるならずやと。斯くの如く說き出でゝ而して後彼は曰く、吾人は答ふべからざるものを問はんとするにあらず。……各人の事情は、その人の自ら置ける疑問に對するハイグラヒック（埃及の古語にして了解すべからざる者と知られたる者）中の會得なり。彼は眞理として之を解する前に生命として之を行はざるべからず。之と同じく自然も、其の形と傾とによつて、其の企意を表はせり。吾人をして、和らかに吾人の周邊に輝きわたれる此の大虛物を窺はしめよ。自然の目的果して如何。と斯く言ひて、而して後、彼は曰く。

凡ての理學は一の的をもてるのみ、即ち自然の理を曉らんとする事是なり。吾人は人種の說、機能の說等を持てり、然れども創造の致（アイデア）に遠きこと果して幾何ぞ。宗敎家は相戰ひ相惡くめり、哲學者は不健全と不眞摯とを以て世人の敬して且つ遠くるところとなる。然れども、正しき判斷力を以て之を見れば、尤も抽象なる眞理は尤も實際に近きものならずや。

彼は斯の如く、世人が唯心と實際との距離甚だ遠しとのみ思ひ居る陋見を破りて、尤も抽象なる眞理は尤も實際に近きものなりと言へり。眞との理の現はるゝ所には、必ず其れ自身の證明を與ふるなりと言へり。而して後彼は一歩を進めて、自然といふ文字を確かめんとす。蓋し自然なる文字は多くの哲學者によりて、多くの異りたる意義に用ひられしものにして、ユマルマン自らも、或る場合には

之を凡ての物が由來する崇き心（スープリム、マインド）の意義に用ひ、或時は又た之を世界の外象の意義に用ひ、或は又た之を是等の外象を個人に表現するを得せしむる法の意義を用ひしなり。然れども「自然論」に於ては、彼れ自ら之に定義を與へて、各個人の內部の意識と崇高なる物との外の萬ろづの物を含ましめたり。其の語に曰く。

哲學的に考へ來れば、宇宙は自然と靈心（ソール）との二者より成立り。詳言すれば、吾等より離るゝところの凡ての物、哲學が非我（Not I）として區別する所のもの、即ち天生（ヂチユーア）と術生（アイト）と、すべての他の人間と、我が躰と、是等のもの悉く我が謂ふ所の「自然」を成立するものなり。

彼は更は天生と術生とを區別して曰く

天生とは人間によつて變化せられざる要素（エッセンセス）を謂ひ、術生とは之に

交ふるに人間の意志を以てしたるものを謂ふ。家、樂、畵、像の如きは即ち是なりと。

斯くの如くして彼の序論は局を結び、第一章に入りて、彼は先づ天躰の莊嚴を說き、人間は眞の寂寥を知らんとには、市場の繁熱を避くるが如く一室の中より出でざるべからざるを說き、諸天の世界より降り來る光は彼と彼が日常觸るゝ所の色界の諸物とを分つ旨を說き若し天涯に羅列せる金色銀色の諸星が千歲にして一度び其面てを見はすことなりせば、人間は如何に神の市の記臆として之を代々に語り傳ふるならんと說きし。然れども彼等は夜毎に天の美を露はすを吝まず、誠しむるかの如き微笑を以て宇宙を照らすにあらずやと說けり。之より一轉して「自然」の人間に對する心を述べて曰く。もろ〳〵の星宿は斯の如く常久に吾人の面前に現存すと雖、吾人の到達

することを容るさゞるが故に、自から一種の崇畏を起さしむ。然れども吾人の心にして縱に開かれてあらば、凡ての自然界の物は、吾人に向つて優渥なる感觸を與ふることを吝まざるなり。「自然」は卑野なる狀貌を裝ふことあるなし。如何に賢哲なる人と雖、「自然」の秘奥を探り盡して、最早探究の價なしと云ふに至ることある能はず。如何なる聖賢の人にも、自然は決して戲具の如くなること無きなり。花も、獸も、山も、人が幼兒の丹眞を失はざる限りは、その圓成せる智德を反映するに餘あり。斯く說き去りて、而して後、天地の間に一大花園あるを說き、ミラーもロツクもマンニングも皆な此の花園の一部分を領有するものにして、而して彼等は眞に之を領有するにあらずして、別に凡てのものゝ主人あるを說き、更に又た地平線上一大領地あるを說き、此の領地を所有するものは、全部分に圓通するもの即ち詩人に屬するものなることを說けり。

ユマルソンは斯の如く天躰の美を捉へ來りて、「自然」と人間との間に親密なる關係あるを示せり。蓋し世の所謂現實家、宗敎家等が唯心者流の所說を攻擊するは、「自然」と人間との間に成立てる濃厚なる相關を是認すること能はざればなるべし。カアライルが當初狂暴の一字を以つて排斥せられたるも要するに偉大なる思想家の常なる他界の壯美を虛想して現實の卑穢を怒る事の多ければなり。獨逸の神秘派が積極派(ポヂチビスム)によりて攻擊せらるゝも亦た同じ。然れども吾人がユマルソンに於て見るところは多くの他の虛想家に異なれり。彼は彼の淺近なる現實派の如く一にも事實、二にも事實と唱道する陋見に陷ることなく、他方に於ても亦た、虛想虛思に陷沒して、一切の事實を思辨に依つて決せんとするの毒弊にも感染することなかり

し。犬の眼も、猫の眼も、星光を覩るを得るに於ては何の疑もなし。然れども彼等は單なる事實として之を覩るなり。理學者の眼も星光を覩るに於ては何の疑もなし、然れども彼等は單に理學的の事實として、他の地球として、遊星として、世界として、是を覩るなり。是れ彼等の事實なり。然れどもユマルソンの詩的、哲學的の眼光は更に他の事實、事實の外の事實を視る。彼は日月星辰の理學的の事實なるを知り、更に又た其の運行と、其の聯托と、其の引力とを支配する一の大なる理法を視るなり。此の理法は彼が提げ來りて事實の中の事實として吾人に敎ふるところのものにして、而して此の理法なるものは、現實的の外觀を以て之を觀るべきにあらず、虛想的の內觀を以て、即ち心を以て、之を觀ざるべからざることを敎へたり。能く斯の如き內觀を以て「自然」を觀る人には、自然は既に隣人ならずして其人の物なり。彼は己れの智德に應じて「自然」の反映を受くるなり。彼は曰く、『「自然」を愛する人とは、內部及び外部の感性が誠に相結托したる人の事なり。幼兒の心を成年まで保ちし人の事なり』と。且つ曰く、『斯く「自然」を愛する人の天と地とに於ける交通は彼の日々の糧の一部分なり』と。

是よりして、彼は「自然」の悅樂を說き來り、啻に天上の美のみにあらず、又た夏時の盛景のみならず、凡ての物、凡ての期、人間の心の有樣に感應適合せざるなきを語り、枯枝に鴉のとまる秋の暮を觀じたる芭蕉とは異なりて、「自然」の中なる悅樂を携へ來り、之を以て其の樂天主義の中心として立てたり。彼は更に之を詳說して曰く。

森林を歩めば人自づからにして、蛇の殼を脫するが如く其の年月

を剝ぎ去るなり。爰に於て老人も亦た小兒に還る。森林には永久の少時あり。爰には儀法と聖情との常に屯在するあり、淨天なる祭儀常に行はる、而して爰に入れる賓客をして千歳厭くことを知らざらしむ。森に來れば吾人、信仰と道理とに還る。……冬日の裸景に立つ時、鮮美なる大氣に洗はれて、余は無限の大空に擡げられたる如く、すべての卑野なる自負（エゴチズム）を解脱するの思ひあり。我は透明なる一眼球として立てり。我は何物にてもなし。我は凡ての物を見る。宇宙的存在者（ユニバーサルビイング）は我を通じて流動するが如く、我は神の一部分一分子たるを認む。尤も近き友も遠く離れ、兄と呼び弟と唱へ、主と呼び僕と稱するも、偶爾空然たるものに過ぎざるなり。我は唯だ限られず死なざる美の愛好者として存するのみ。……鮮麗なる景色に對する時特に地平線の彼方に於て、人は彼自身

の天性の如き秀美なるものを見るなり。

之より彼は進んで植物界に於ける「自然」の悅樂を說きて曰く「我は孤獨ならず、不知ならず、彼等は我に向つて揖せり、我は彼等に向つて揖せり。强風に戰げる枝葉の動搖は、我に向つて常に新らしく常に故るし。忽然として來るが如くなれど全く知らざるにあらず。恰も彼の高等なる思想或は純善なる感動が、我が正しく考へ正しく行へると思ふ時に來るが如き有樣に於て來るなり」。

彼は斯の如く「自然」の悅樂を示せり。然れども斯般の淸淨なる悅樂は人間の能く保持するを得べきものなるか。現實と聖境とは、凡俗の心には大なる溝によつて隔てられてあるにあらずや。朝には夙く起きて野に出る農作者も、山又た山を步ちわたる獵夫も、日常接するところは自然によつて如何程の悅樂を得べきや。彼の所謂「自然」

の悅樂とは、如何なる懶惰者にも、如何なる齊東の野人にも寬やかに賦へられたるものなるか。果して然らば「自然」は意味もなく威嚴もなき虛想に過ぎざるべし。彼豈に斯の如き事を說んや。曰く。

然れども斯の悅樂を生ずるの權(ちから)は、獨り「自然」にのみ存すると思ふべからず、人間にも亦た是あるなり、「自然」と人間との調和こそ斯の悅樂の由て來るところなれ。是等の悅樂を取らんとせば、大節制を行はざるべからず。請ふ之を說かむ、「自然」は常に祭日の裝束を着くるにあらず、昨日香風微動して仙姬の舞袖を飜へすと見し景色は、今日唯だ慘憺たる一面の悲劇たる事あり。「自然」は常に心靈の色を着くるものなり。

自然と人間との調和、是れ「自然」より受くる悅樂の本源なり。人は自然に背いて榮ふること能はず。自然の中には大なる理法の存するあり。その理法は、「自然」の上にも、人間の上にも同じく臨めり。「自然」の悅樂を得んとせば、先づ能く「自然」を知らざるべからず、且つ又た自然を支配せる同じ理法の下に順隷せざるべからず、斯くの如くして而して後、人は自然の友たり、自然との調和者たり。「自然」は人を欺かず、人も亦た「自然」を欺く能はず。之れ即ち彼の聖淨なる悅樂を受くるの唯一の秘訣なり。人は嬰兒たらざる可からず、この眞理ナザレのイエスも曾つて之れを說けり、多くの偉人も同じく之を傳へたり、エマルソンの「自然」の宗敎(Religion of Nature)豈に特に鮮新なるものならんや。

是れよりエマルソンは物質的の觀察より精神的の觀察に移らんとして、第二章に進んで曰く、

世界の終極の原因を究むる人は、無數の用(ユーセス)ありて、その原因に各

部分として流れ入るを見るべし。而して是等無數のユーセスは次の四大部の一に算へられざるものあるなし。四大部とは何ぞ。曰く便用(Commodity)曰く美。曰く言語。曰く教義。是なり。

便用とは如何なる者ぞ。請ふ共に彼の定義を聞かむ。

便用なる一般の名の下に、余は、吾等の感性が自然に負ふところの凡ての利益を列ねんとす。この利益は「自然」に屬するものなりと雖、元より一時のもの、中間のものにして、自然の心靈に對するものゝ如く最後のものにあらず。然り斯の如く卑くし、然れども其の特性に於ては各々完美せるものにして、凡ての人類が等しく了得するを得るものなり。

吾人は爰に於て、ユマルソンが「自然」の悅樂を享くるの路を分ちて、感性と心靈との兩者に區別するを見る。而して彼は心靈により

て享くるものは、普ねく人類の占領するを容るゝところにして、感性によりて受くるものは、凡ての人間が平等に之を享有するを得るものなることを說き來れるを見る。爰に彼の常識あり。爰に彼の共和思想の本源を見る。然れども彼が常識にのみ拘泥する人にあらざる事も亦た明らかなり。

彼は更らに、人間を載せて空間を轉ろび行く地球の上に自然の給養と悅樂斯くの如く饒多なるを見ば、不幸を悲しみ薄命を嘆ずるは幼童の頑是なきに似たるにあらずやと說き。更らに進んで、是等の華麗なる裝飾、是等の富饒なる用品、この氣、この水、氣と水との間なるこの地とを見よ、如何なる神使ぞ之を創作せしものは。と說き、更に進んで、星、雲、氣候、四季等より、火、水其他の雜物まで悉く人間の便用に供せられたるものなるを示し。且つ曰く。

自然は人に對する職に於て、獨り物質的なるのみにあらずして、又た途（プロセス）と果（セザルト）とを兼ぬるものなり。凡ての部分は、人の利益の爲に、相渉りて働らけり。風は種子を蒔散らすなり。日輪は海水を蒸發せしむるなり。地球の他の側に於ける氷塊は此の側に雨を傾くるなり。雨は植物を養ひ、植物は動物を養ふ。斯くの如く神聖なる慈悲は終りなき循環を以て、人間を補育するなり。

彼は自然の中に成立てる大秩序を認めて、之を以て人間の便用の根本とせり。神聖なる慈悲とは、彼が「自然」の人間に對する善意を形容する言葉にして、恒久に退轉することなく人間を補育するものなることを示し、人をして厭離の念を生ずるの理なきを悟らしむ。

エマルソンの樂天立義、漸くにして顯著なりと謂つべし。

彼は更に說いて曰く。「一賤民も亦た、己れの爲に築かれたる市、

橋、等をもてり。彼れ郵便局に行かば、人間の種族は彼の爲に使ひするを厭はず。……彼れ法庭に出づれば、國民は彼の爲に其の損害を償ふ」。是れ一種の社會主義なり。彼は市街橋梁等を以て各個人の爲に存するものなることを信じて、而して人間の之を節制し以て自家の用に供すべきを敎ふること切なり。彼れ若し之を欲せば凡ての物は彼に屬せり。とは後章に於て、我が哲人の敎ふるところ。此の眼光を以て見れば、ナポレオン獨り天下を征略せしにあらずして、各個の小民一々其の天下を領有せるなり。「自然」界は兵戈を以て迫るを要せず、武威を以て脅かすを要せず。丹心を以て正當に手を擧ぐるものには、「自然」は既に其人の有（もの）たり。能く弓を彎くものは、能く弓の自然に從ふものなり。能く經濟を行ふものは、財政の自然に從ふものなり。那須與一の秘訣豈に他あらんや。二宮尊德の財理豈

に亦た他あらんや。尤も自然なる行爲は即ち尤も大なる行爲なり。

彼は此章を結ぶに左の語を以てす、曰く。

然れども是等の被傭的の利益は適ま以て尙ほ遙かなる善の爲に存するのみ。人は養はれん爲に養はるゝにあらずして行し得るが爲めなり。

第三章に於て彼は美を論ぜり。冒頭に於て一呵して曰く。「人間の尙ほ高等の要用にして「自然」によりて補はるゝもの、之れを美の愛といふ」。と言ひ、更に進んで、凡ての物色運作の中に一種の悅樂あることを說き、世界は其の根本に於て、美の表現をなせるを語り、眼と光線とを論じて曰く、「眼は美術家の尤の尤なるもの」、又た曰く、「眼は文豪にして、光線は畫伯なりと」。「濃密なる光線を以て美くしくする能はざるものあるなし。死屍と雖も光線に觸るゝ時は一種の美

を備へたり。何物か又た美ならざるものあらんや」と。

彼は猶ほ進んで美の形像を三段に立ちて論ぜり。

第一　自然の形の單純なる概念も一種の悅樂なり。商估の如き代言人の如き、鬧熱の裡に埋殺せられつゝあるものと雖、來つて蒼天を仰ぎ森林を步めば、再び己れに歸るなり。自然は斯の場合に於ては醫藥なり、人生の苦痛を療ずるの妙醫、此外又た何をか求めん。

然れども自然は肉躰上の利益を離れたる所に於て、單に其の愛らしさを以て人を悅ばすものなり。……我に健康と日とを與へよ、王侯の榮華將に何かあらん。天の曉くるところは我がパッシリアなり。日の沒するところ、月の昇るところは我がパホスにして想像すべからざる仙女の境地なり。日の蘭干たる時は即ち感性と諒解の我が英國なり。深々たる夜は夢想と神秘哲學の我が獨逸なり……

「然れども美として視られ又た感ぜらるゝ自然の美は、最爾たる部分のみ。日中の景、朝の景、虹霓、山岳、花園、星、月、靜水に浮べる影等、是等のものは、之を眺矚する事愈多ければ、遂には茫漠として意味なき不現實となるなり。家を出でゝ月を眺めよ、やがては無味の粉飾となるべし。夏の夕べの翠色いかに美はしとも之を掬すべきにあらず。行いて之を見んとすれば既に去りて跡を留めず。汝が窓に倚りて眺むるところのものは謂ふ所の蜃氣樓に類するものにあらざるを得んや」。

第二。「高上なる、即はち心靈的の元素の現存は美の完成に必要なり。高且つ聖にして、人間の弱性以外に愛好するを得る美は、人間の意志と相結合して成れるものなり。美は神か德の上に置きし徽章なり。各々の自然的の動作は優雅なり。各々のヒーロイツク（英雄的の譯する能はず意義自ら異なればなり）の業は自から崇高にして、其の役せられたる場所を、旁立者とを輝やかしむ。偉大なる事業は吾人に敎ふるに、宇宙はその中に住へる各個人の所有に屬するものなるを以てす。醇乎たる理性をもてるものゝ爲には凡ての自然はその財產なり。要するに、彼の之を欲すると否とにあり、之を欲すれば即はち彼の有なり。……彼の思想と意志の力に從つて彼は世界を彼自らのものとするなり」。

「眞理に適へる業、ヒーロイツクと稱するに足るべき業の行はるゝところには、蒼穹は其の社殿となり、日輪は其の燭光となるべし。自然は其の腕を伸べて、人を其の懷に抱かんとす、要するに人の思想が能く自然に適ひたる程に偉大なるものならざるべからず」。

第三。世界の美は更に又た智識の目的物として現はるゝことある

なり。徳義との關係の外に、思想との關係なるものあり。……

彼は徳義と智識との關係を說き、その相聯環して離るべからざることを言ひ、一の物は他の爲に用意し、他は又た彼の爲に用意し、一は直ちに神の心の中に横はれる萬物の大秩序を讀まん爲に存し、他は即ち優雅なる行爲に導くものなることを論じ、而して最後に斷じて曰く。

凡そ聖大なるもの一として死すべからず。凡ての善は永久に再生的なり。自然の美は人心の中に於てそれ自身を再造す、癡鈍なる默思を生ぜんが爲にあらず、新らしき創造（クリエーション）を得んが爲なり。

新らしき美の創造とは何ぞや。彼は之を解かんが爲に趣味を論じて、曰く、「凡ての人は或度に於て世界の景相に感銘するものなり。否、寧ろ或る人々の爲には大なる悅樂となるものなり。自然に對する此の愛慕を呼んで趣味といふ。此愛慕をもてることを尋常ならずして、單に自然に對する欽賞を以て充足することを能はざる人々ありて、之を新らしき形の中に擬せんとす。斯の如くして成れる美の創造は即ち美術なり」。

「美術の製作はヒユーマニチーの幽奥に向つて光を投ぐるものなり。術の作は世界の拔萃なり。……自然の作業は量りなく數なく凡て相異なるが如くなれども、彼等の結果と發現とを檢すれば、悉く異にして同、複にして單なる者なり。自然は不同の同、不均の均を以て充てる大海なり。樹葉の澤々たる、日光の輝々たる、山の峨々たる、水の洋々たる、各々相異なれるが如くなりと雖、人心の上には契同したる感銘を與ふるなり。彼等を通じて一樣なるものあり、即ち彼等の中に存する完全と調和と是なり、此の一樣なるもの即ち美か。

……何物と雖孤獨にして美なるものあらず、全圈に於て美なるにあらずして美なるものあらず。孤獨なるものゝ美なるを得るは此の通有の雅美を備へ有するの度に於て然るなり。詩人も畫家も彫刻家も音樂家も、その一角の上に世界の光輝を蒐むるものにして、各々己れを動かしたる美の愛を滿たさんが爲に殊異の業の上に之を爲すなり。斯の如く、美術とは、人間のランビキを通過し來れる自然の謂なり」。

「斯くの如く世界は人間の心靈をして美の思欲を滿足せしむるを容るせり。余は此の原質を呼んで最終の目的といふ。何が故に心靈は美を思欲するものなりや、之に對しては理の以て辨ずべきあるなし。美はその高大深奥なる意義に於て宇宙の一發露なり。神は全美なり。眞、善、美、とは同じき全(All)の異りたる面のみ」。……

之より彼は第四章に進みて言語を論ぜり。

「言語は自然が人間の爲に備へたる第三の用なり。自然は思想の駕乘なり、或は單に、或は複に、或は主段に思想を乘するところのものなり」。

言葉は自然的事實の表示なり。自然史の用は吾人をして超自然史を知らしむるにあり。外部の創造の用は、各人をして內部の創造の存立と變化とを識らしむるにあり。道德上及び智識上の事實を言ひあらはす言語は、其の起原を尋ぬるに及んで、或る物質的の外形より來りしにあらざりしもの稀なり。Right means straight; wrong means twisted. spirit Primarily means wind.……(吾人は此處に於て、ユマルソンが漢字の所謂表像的文字を引例するの便を得ざりしを惜むなり)

「物質的より精神的の意義に進むは未だ以て重要なる事實とするに

足らず。表號的なるは獨り言語のみにあらずして、物皆な表號的ならざるはなし。各々の自然的の事實は、靈性的の事實の記號なり」。……

「靜水に向ひて寂想する人は、すべての物の搖動を微察す。試に小石を取つて之を水面に向つて投ぐれば、多くの環の相踵いで生じ、相追ふて廣がり行くを見るべし、凡そ物の勢力なるものは斯の環の如くなるにあらずや。人は我の內と外とに存在せる通有的の靈を知覺す、之を知覺するは恰も蒼天に於て、義、眞、愛、自由等の性の炳照するを認むるが如し。此の通有的の靈を呼んで「理」といふ。「理」は我の有にあらず、汝の有にあらず、彼の有にもあらずして、我等すべてが、その「理」の有にてあるなり。我等が棲息する地球を包める天、永久の靜和をたもてる天、もろ〳〵の軌道を容れたる天は即ち「理」の型なり。吾人が智性の上に於て「理」と稱するもの、之を自然との關係に於ては「精神」(Spirit)と呼ぶなり。「精神」は創造者なり。精神は自らに於て生命をもてり。而して人は凡ての時代と凡ての國に於て、「父」といふ名を以て、「精神」を言表せり」。

斯の如くエマルソンは事實は即ち精神の記號なる事を論じ、然る後一歩を轉じて、言語の確實を說き、「思想と之に對する適當なる記號を結合するの力、及び之を發言するの力は、其の人の性情の丹誠にあり。……」と言ひて、更に眞理に對する愛好を說き、詳かに記號と思想との關係を示せり。

次に彼は、「吾人は斯の如く自然の物によりて、特種の意味を發言することを得」ることを說き、「自然は吾人が言はんと欲するところのものを着け來りて、殆ど吾人をして凡ての文字は自らに於ては何

の意義をも有するなきにあらずやを疑はしむ。山も水も天も、吾人が吾人の思想の記號として彼等に與ふるの意義の外に何の意義をも有せざるにあらずや。言語は表號的なり。動詞名詞等の部分は譬諭なり。自然の全躰は人間の心に對する譬諭なるにあらずや。道性の法の物質の法に對するは、明鏡に對して相映ずるが如し」。と言ひて更に之を説明し而して後曰く。「心と物との間に於ける此の關係は詩人の想像の中に存する者にあらずして、深く神の旨の中に立てり、之を以て何人と雖之を識るの自由を有するなり」。……「宇宙は透明になるなり、而して尚ほ高大なる法の光は之を貫ぬきて輝くなり。世界の太初より以來、英靈の氣を宿したる詩人哲學者等を驅つて學究せしめたるもの只だ此の問題あるのみ。……凡ての時代に於て、一路側に立てるスヒンクスあり、一預言者の爰を過ぐるものある毎に、之を呼び留めて謎を解かんことを要む。……事實は精神の結尾なり。見ゆるものは見えざるもの、周圍なり」。……

斯くの如くにして心と物との關係を説き去り、更に進んで、第五章に入り、教義としての自然を論ぜり。吾人は先づ彼が冒頭に説き出づるところを譯出せむ。

「吾人は自然の意義を尋ね來りて、爰に更に他の新らしき事實に達するを得たり。即ち自然是れ教義なること之なり。……空間、時間、勞力、社會、氣候、食物、移動、動物、機械力等は、限りなき意味をもちて、日々夜々吾人に對つて尤も眞摯なる教誡を垂れつゝあるなり。彼等は理解力と道理とを教養するものなり。物(マター)の全領は理解力に對する學校の如きものなり。……同時に道理は是等の教誡を、物と心との契同の推理によりて、思想上の己れが世界に移し來るな

り」。

彼は第一に智性的の眞理に於ける、理解力の教義を説けり。續いて財産によつての教義を説けり。然る後差別によつての教義を説けり。續いて又た意志によつての教義を説けり。次に道理の教義を説けり。

道理の教義を説ける中に言へることあり。曰く。「道の法は自然の中心に横はれり、而して其の周圍に活射せり。渠は凡ての物躰と、凡ての關係と、凡ての作爲の心髓なり。吾人が交渉する凡てのものは、吾人に向つて説法しつゝあるなり。田野も亦た吾人に對する好福音ならずや」。

この後彼は自然の純一を説けり。變化の中の不變を説けり。諸物の諸々の變化は合同的の感銘を與ふるものなることを説けり。更に

一段を進めて曰く。「各々の動物は他のものゝ變改に過ぎざるなり。彼等の似同は差別に比して遙かに多し。而して彼等の現法は一にして同なるものなり。一の術の則、一の組織の法は、凡ての自然を通じて僞るところなし。この純一は自然の最奥の服裝の中に存して、通有的精神と其の源泉を察合すと謂ふも不可なきなり。そが思想を徹達するも亦た同じ。吾人が言語に發する凡ての通有的眞理は凡ての他の眞理を含有せり。恰も多くの環を含みたる大環の如し。……各々の眞理は一の側より見られたる絶對の存在なり。然れども多くの他の側あることを記憶せざるべからず」。

斯くの如く、エマルソンは自然が人間に對する教養の職に就きての見解を説き去り説き來りて、殆ど餘蘊なきに至れるに及びて、自ら言ふ之れ實に終るところを知らざるものなりと。吾人をして彼と

共に第六章に進みて、唯心と題する一章を研究せしめよ。

教養としては自然を論ずるを得る時は、吾人宛然たる新世界の新教師としてのエマルソンを觀るの心地す。然れ共一歩を轉じてアイデアリスムを論ずるを見る時は果して如何。或は之を疑ふて以へらく自然論の中にアイデアリズム將た何の用をか爲さんやと。蓋しエマルソンを知らざるの言なり。自然はエマルソンによりて最早現實の現實として考へられず、不充分ながらも、獨逸の新傾向を通じて彼の中に潜み入りたる佛教的思想は、彼をして牢固なる現世の傍らに、輪轉無常中の純理觀を尊奉せしめたるなり。自然に對する觀念の、特にエマルソンに於て異なるところあるは、このアイデアリズムに存すと謂ふも不可なし。彼は曰く

「一の崇高なる疑問恒に吾人の胸間に横はるが如し、即ち教義の此の目的は、宇宙の終因にあらざるにあらずや。而して自然は外現にのみ存在するにあらずや。との疑問之なり」。

之を冒頭として、吾人の感覺に觸るゝところの諸現象の實躰を疑ひ、之を以て心靈の上にあらはれたる繪畫の如きものにあらざるなきやを惑ひ、諸々の差別、無量、無邊等を説き、自然は果して實躰の存在を有する者なりや、將た又た心の配劑の上にあらはれたる虚影に過ぎざるかを疑へり。

而して後、彼は斷々たる確信を以て、精神と現象との間に成立てる奥妙なる關係を透破し、彼の妄りに唯心論を攻撃するものに向つて、辨難の辭を爲して曰く。「輕浮なる輩は唯心的理を愚弄して、條理に合はぬものゝ如く、自然の確實を害するものゝ如く思へり。之れ大なる僻事なり。神は吾人を玩弄するものにあらず。自然の目的

を以て、不條理の詐爲に暗諾せしむべきにあらず」。斯く言ひて而して後、唯心的理の重んずべきを説ひて曰く、「法の牢固に對する不信は人間の性格を病ましむるの元なり。その牢固の聖く奉ぜらるゝ所には信仰の完全なるものあり」。……「若し理にして熱ある幻像となる時は、外部表面は透明なるものになりて、最早見るべからざるものとなるべし。彼等を通じて見らるゝは原因と精神となり。生涯の尤も好き時は、高上なる權の美くしき覺醒あるの時にして、神の前に自然を道引するの期なり。

之より論歩を轉じて、人心の上に於ける教養の結果を説けり。而して後詩に於けるアイデアルを説けり。

詩人にあらざるものは、事物をその儘にて露出す、然れども詩人は事物を彼の思想に同化す。山を山とし、水を水とするは之れ詩人以外の人の現實なり、然れども詩人は是等のものを通貫せる或るものを見るが故に、能く諸々の事物の和同を認めて、之をその思想の上に點綴す。俗人は自然を以て單だ堅定不動のものと視るなり、然れども詩人は其の流動躰なるを認む。俗人は現實の爲に使役せらるゝなり、事物の外相に拘々するを知つて、其の内相を顧みざるなり。然れども詩人は自然を、現實を、事物を、この思想の奴婢の如くに使役するなり。かのシユークスピーアと建築師と異なるところ蓋し存して爰にあるなり。

之よりエマルソンは詩人と哲學者との區別を示して曰く。詩人は美を大眼目とし、哲學者は眞を大眼目とす。外形の秩序と事物の關係とを思想の王國に延滞せしむるの點に於ては兩者相異なるところなし。すべての現象を支配する法の信仰によりて進むもの即ち哲學

なり。法既に明らかなれば現象は從つて辨ずべし。この法の心に於けるや。之を極致（アイデア）とは曰ふなり。而して極致の美は無限なり。眞の哲學者と眞の詩人とは、異なるが如くにして一なり。美にして眞なるもの、眞にして美なるもの、之れ兩者の與に目的とするところなり。……雙方の場合に於て、同じく見出す事は、心靈の生命が自然に賦與せられたることと之なり。

之よりユマルソンは學術が常に物の存在を疑はしむる傾あることを言ひ、タルゴットを引いて、物の存在を疑ふことなき人は、形而上學に進むの資性なきものなりと言ひ、斯の疑は以て玄にして非造的なるもの即ち極致に人を導くことを得るものなることを言ひ、而して後、斯の如く理想の妙趣を得たる人の心境を說いて曰く。彼は既に變化の領界を超絕したるが故に、生老病死は最早彼を脅かすものたらず。既に義、眞の妙相を觀たるが故に、絕對と雙對との差別を知了す。……時間、空間の如き物との關係を離れて、不死不朽となる。……

爰に於て彼は進んで宗敎及び倫理の唯心說を說けり。

宗敎及び倫理は理想の實行なり。即ち理想を生活に導引するものなり。宗敎と倫理との區別如何。倫理とは人間によりて始められる人間の義務の組織にして、宗敎は神より出るものなり。宗敎は神のパーソナリチーを含み、倫理は之を含まずと言へり。宗敎及び倫理の區域に於て、唯心論の利益あるは、心に適合したる信仰を立てしむる邊にあり。思辨と實際、哲學と德義とが相協和したる「理」より來れる見解を守ることを得る邊にあり。思想の光に照らせば、此の世界は常に現象なり。而して德義は之を心に隷屬せしむ。唯心見（アイデアリズム）

は神に於ける世界を觀る。彼は人、物、行、事、の全環を觀るなり。國、宗教、の全環を觀るなり。是等の物が遠く隔たりたる過去より蓄積し來りたる各局部を詳察するにあらずして、是等を以て心靈の解説に任せんが爲に神の永久てふものゝ上に畫き出たる彩色を觀ずるなり。

爰にて彼のアイデアリズムは章を終れり。次に來るものは精神なり。

この章は尤も短かきものなり。始めに精神と呼ぶところのものゝ考へ得べくして言ひ難きを辨し、神なるものゝ言語若くは思想を以て表明すること能はざるを言ひ、アイデアリズムの不充分なることを説きて曰く。物とは何ぞや。何處より來りしぞ。何處へ行くべきぞ。唯心論は言ふ、物は現象にして實躰にあらずと。斯くの如く唯

心論は、本我の存在證明と世界の存在の證明との間に大なる不同を置けり。云々。

人間の心靈と聖大なる精神との關係は如何。之れエマルソンは多くの他の論文に於て解説したるところにして、其意を摘萃すれば。

赤心は聖なる智慧を受くるの途なり……人をして凡ての自然と、凡ての思想の啓示を、彼の心に於て、悟發せしめよ……尤も高きもの彼の中に棲へることを悟らしめよ。尤も丹妙なる心を以て神を禮拜する人は、即ち神となれるなり……吾等は、部分、分子に於て生活せり、然れども同時に人の中には全躰（ホール）の心靈あるなり。賢とき寂默あるなり。凡ての部分と分子が均一に關係せる通有的の美、即ち永遠の一あるなり……

精神の次に來るもの即ち第八章に載するところは期望と題する一

篇なり。

此の章は全篇に對する結尾の如きものにして、或は詩的に、或は哲學的に自然を觀察し來りたる眼を以て其の著明なる樂天主義の識見と相合して、期望を說き且つ敎へたるものなり。斯の如く吾人は新らしき眼を以て世界を視るべし。智性にとりては終りなき疑問たるもの、即ち眞理とは何ぞや。心性に取りては、善とは何ぞや。とのこの二大問は堅固なる意志に受動的となるときに於て應へらるべし。とは此章の中に言へるところなり。吾人は此章に於て、亞米利加の聽衆に對するエマルソンを見れども、哲學者としてのエマルソンを見る能はず。吾人をして爰に「自然論」に對する拔萃を畢り、更に新らしき題目に移らしめよ。

第三章　報酬論

報酬論は故中村敬宇先生の愛讀せし一文なりと聞く。エマルソンの論文中に尤も深遠なる哲理を含めるもの蓋し此篇に過ぐるはなからむ。之を以て予は敢て其の艱與なる文字を摘譯して、直接にエマルソンに接すること能はざる人々の爲に紹介の勞を取らんとす。

始めに彼は少年の頃より報酬に就きて一文を草せんことを心掛居たるを言ひ、頃日聞きたる一牧師の說敎によりて遂に動かされて稿を起すに到れる由を明らかにせり。牧師は正統派の敎義を守れる人にて、此世に於ては、奸惡なるもの能く榮え、善良なるもの枯るゝことあるは是非もなき次第なり、然れども未來の世に於ては、善惡の兩岐判然として、必らず正しき應報を受くべき旨を說けりしなり。

之を聞けるユマルソンは、心中ひそかに平らかなるを得ず、今の宗教、今の神學說の、斯の如く現世を措きて未來を重んずるの迷信に對して、己れの信ずるところを陳べんとしたる、之れ即ち報酬論の成りし所以なり。

動と反動は自然の各部分に於て吾人の出遇ふところのものなり。物の兩極性是なり。例せば暗と光との如き。熱と冷との如き。高潮と卑潮との如き。男性と女性との如き。……離るべからざる二元性は自然を兩分して、各の物をして常に半片たらしめ、之を全部とするが爲には、他の半片を求めざるべからしむ。心と物。男と女。主觀と客觀。內と外。……等なり。

之より彼は世界の各部分に於て斯の二元性あることを示し、更に機械力に於て同じ性あることを論じ、更に進んで言を爲して曰く。

「之と同じき二元性は自然と人の有樣の上にも存在するなり。各の過度は不足を生じ、各の不足は過度を生ず。甘きもの必らず酸し。惡しきものは其の善を有てり。快樂を享くるの能は又た其の濫用より生ずる罰を受けざるを得ず。得れば失ひ、失へば得。富めば貧しく、貧しければ富むなり」。……又た曰く。「農夫は權力と地位とを羨やめど、白宮（ホワイトハウス）の中に於ける大統領の勞苦は彼の知るところにあらず」。……

是より彼はすべて勝りたるもの、優れたるものに必らず、その劣りたるところ、足らざるところあるを言ひ、而して後曰く、「此の法は即ち市と國の法を書くものなり。此の法に背いて建設し計畫し結合することあるとも惡く徒勞に屬するものなり。……政府若し殘酷なりせば政治家の生命は安全なるを得ざるべし。稅歛餘りに高けれ

ば、歳收遂に多きを得ざるべし。刑法餘りに殘酷なりせば、審官は罪證を捕ふること難かるべし。國法若し寛に失せば、私刑私罰漸く當に行はるべし」……

是等の現象を取りて察すれば、宇宙は其の分子の各個に表現する事實を觀るを得るなり。自然に於ける各物は自然の凡ての權を有てり。すべての物は或る隱れたる質によつて成れり。自然家（ナチユラリスト）が各の變狀の下に一の摸型を見るが如し、馬を走れる人と呼び、魚を泳げる人と呼び、鳥を飛べる人と呼び、木を根ある人と呼ぶが如し。各の新らしき形は、その摸型の主性のみならず、凡ての微密に於て、凡ての目的に於て、凡ての進歩、障碍、等に於て、各の他の形の組織を繰返へすなり。……個々悉く人生の表號ならざるはなく、其の善の、其の惡の、其の試誘の、其の敵の、其の進路の、其の結局の表號ならざるはなし。而して各個その全人と多少關係せざるはなく、凡て彼の運命を反復せざるはなし。……皆現のまことの義は、神が細苦にも蛛網にも、凡て彼の部分を以て、再現するを言ふなり。……「斯の如くにして宇宙は活けり。」凡ての物は心性的なり。我等の內にありて、感覺として知らるゝ心靈は、我等の外にありては法なり。我等は其の啓發を感ず。歴史を披けば、其の奇しき力を見る。心靈は世界の內にもあり、然れども世界も亦た心靈によつて作られたるなり。正義は延滯することなし。完全なる平等は生活の各部分に於て其の權衡を整ふ。世界は乘法表の如く、方程式の如く、之を如何なる方角に向くるとも、必らず其の權衡を保つなり。……各の秘密は語られ、各の罪は罰せられ、各の德は酬はれ、各の惡は報ぜらる、好し無言にして人は如何なるところに此の報酬あるやを辯ぜざるが

如き場合にも確然として動かすべからざる結果あるなり。吾人が應報と呼ぶところの者は、何處にても一部分の現はるゝところに、全躰の現はるべき、通有的の必要をいふなり。煙ありといはゞ火あるを知るべく、足ありと云はゞ、躰あるを知るべきにあらずや」。……

各の行爲は二段の方法に於て、其自身を報ゆ、他の言葉にて言はゞ、其自身を全ふす。第一は、物に於て、即ち實性（リアル、チーチューア）に於て。第二は事情に於て、即ち外性（アッパーアレント、チーチューア）に於て、根本の應報は實物の上に存して、心靈によつて見らるゝものなり。事情（サーカムスタンス）の應報は理解力によつて見らるゝものなり。……罪と罰とは同じ幹より生長す。罰は快樂の花の裡に熟する結果なり。原因と結果、手段と目的、種子と熟果等は之を別つて二となすことを許さゞるものなり。結果は常に原因に於て華さき、目的は常に手段に於て成立し、果實は常に種子に於て圓成すればなり。……

彼は之れより人生の種々の有樣に於て、報酬の法の行はるゝを說き、勞力の眞價は智識と德義にして、其の徽章は富と信用なりと說き、愛せられんと欲するものは必らず先づ愛すべきを敎へ、百般の事例を排刊して以て報酬の止むべからざるを示せり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「斯くの如く一切の物、事情の無頓着を敎へざるはなし。人は全な（マン、イス、ホール）り。一切の物は善惡の兩側を持てり。一切の利益は其の租稅を拂はざるべからず。人須らく足ることを知るべし」。……

然れども若し斯の如く凡ての事唯だ報酬の理に遵ひて廻轉せば、愚者終に迷はざるを得べけんや、善を爲す何かあらん、惡を爲す又

た何かあらん、我は報酬の理を知れば即ち可なりと、言ふものなきを保せず。報酬は果して斯の如く生命なく感覺なき廻轉に過ぎざる可きか。エマルソンの説けりしもの、徒らに人をして自らをして自らの預言者たらしめ、自らをして自らの賞罰者たらしめ、灰の如く石の如く、空寂たる悟達者たらしむるにあるか。然らず。彼は根底に於て新世界の新預言者なり、新世界の新民をして覺知せしめんとする大事實は、酬報の理にあらずして、報酬を衣たる不變不滅のものの是なり。報酬は外なり。一切の物遷移するは能く報酬の理を示せり。然れども一切の遷移、一切の廻轉、一切の生滅の外に立てるもの、報酬以外のものあり。心靈即ち之なり。「心靈は報酬にあらずして生命なり」。「心靈は存せり」。「まことの存在なり」。大元、即ち神は、雙對にあらず、部分にあらず、全躰なり」。

惡業を爲し、詐僞を爲し、而して何の應罰を受けざるが如きもの少なからず。之を見て凡眼は、直ちに疑つて惟へらく、正義必らずしも守るに足らずと。蓋し報酬の理を知らざるが故なり。彼の惡業、彼の詐僞が繼續する限は、彼は「自然」より死したるなり」。人は之を罰せずとも自らは之を罰するなり。心靈は生命なり。生命の道は己れに背けるものを殺ろすなり。「高德の行に於ては、我は適當の我なり。善き事をなすは何物をか世界に加ふるなり。渾沌と虛無より得たる沙漠に何物をか植付けるなり。而して「暗」をして地平線の彼方に立ち消えしむるなり。愛と智と美には過ぐるといふことあるなし、心靈は限を退ぞく、之れを以て、厭世なるものなく獨り樂天あるのみ」。

エマルソンの樂天主義に就きては後章評論の部に於て言ふところ

あるべし。爰には、唯だ如何に彼の思想が高潔聖淨にして、深く生命の理に通じ、而して生命に對する信仰の大なるも以て斯くの如く理性的の宗教を聞けるを一言し置くのみ。

世に狀態の不平等なるものあり。「多」と「少」とは人生悲觀の中心なり。「少」を有てるもの、「多」を有てるものを羨むは至當なり。智あり能あるものに對して、智なく能なきものゝ悲しむは至當なり。俗眼を以て之を見れば、世界は斯くの如く不平等に、斯くの如く不正なるものゝ如くなれど、心靈の報酬を知るものは、天地の無私にして、一切のもの皆な平等なるを視るに難からず。「愛は日輪の凍氷を溶かすが如く不平等を溶かすなり。一切諸人の心と靈は唯だ一なることを知らば、「彼の」と「我の」との區別より起る惡感は自からにして消滅すべし。彼のものは我のものなり」。ユマルソンの文章が他

と異なる所以、ユマルソンの哲學が他と異なる所以、ユマルソンの教理が他と異なる所以蓋し存して爰にあり。隣人の我に勝るを知る時に、我は尙ほ之を愛するを得るなり。隣人を以て隣人と思はず、隣人の所有を以て、隣人の所有にあらずと思ふことを得るを以て、我は友愛の至情を以て、其の園池を賞覽するを得るなり。「心靈は一切の物を我が有とするを得るなり。耶蘇も沙翁も心靈の一部分なれば、愛によつて我は之を我が領界の中に全躰することを得るなり。彼の德は我が德にあらずや。彼の智も我が智にあらずや。彼の德にして、我の德と爲すべからずんば、彼の德は德にあらず。彼の智にして我が智となすべからずんば、彼の智は智にあらず」。

ユマルソンは斯くの如く心靈の秘を闡きて、古昔の迷信、舊時代の傳說の必らずしも尊奉するに足らざるを說き、古を拜せずして新

らしきものを興すべし、新らしきものは他に之を求めずして可なり、心靈は常に故るくして常に新らし、その中に限りなきの富あり、この富を正當に用ゆるは即ち我が新民を建設する所以なることを敎へたり。コンコルドの哲人の報酬説大約斯の如し。

第四章　自信論

吾人は已に自然論の幽妙を味へり。報酬論の深遠を嚐めり。是等は以てエマルソンを悉せるか。エマルソンのエマルソンたるを代表すべき者他に之れなきか。余は之れに答ふる爲に「自信論」を取上げたり。自信論は哲理にあらず實際的宗敎なり。前二篇と反對の側に立てるエマルソンの面を代表すべきもの恐らく自信論に如くはなからん。

然れども自信論の著書は、自然論及び報酬論の著者と、途を異にして歩みたるものにあらず、彼に於て潛なりしもの、是に於て顯、是に於て潛なるもの、彼に於て顯なるに於て相違ありと雖、要するに其思想の本源は一なるのみ。彼は近世の多くの偉人の如く事實を

重んじたり。彼は空言空語して自ら樂しむものにあらず。然れども彼の所謂事實なるものは、事實其物にあらずして、事實の奥に潜める事實なり。彼は人生の虚幻なるを知る、彼は人生の無常なるを知る、然れども彼は凡ての虚幻の奥に横はれる實相を知るなり、凡ての無常の底に隠れたる常を知るなり。生命は彼の心靈なり。心靈は彼の生命なり、生命の外に人生なく、心靈の外に事實なし。その事實あるは心靈の繋がるが故なり。その人生あるは、生命あるが故なり。故に彼は「自然」に對して、人生と自然との距離を否めり。尤も自然に近きもの、否な自然と同一なるもの、即ち眞の生命なり。自然の純一と心靈の純一とを相離れたるものと認めざるなり。彼は何處までも實驗派に對する敵なり。然れども エマルソンのエマルソンたるは、その神秘説に於てのみ存するにあらず、その唯心論に於て

のみ存するにあらず。彼の唯心的神秘的の哲理が、奇しく人間の實際的宗教となりて、吾人の上に臨める永遠の福音となれるところ、是れ即ち吾人が エマルソンに景仰すべき所なれ。吾人をして閑談を歇めて直ちに、彼の實際的宗教の本據なる自信論に入らしめよ。

人は人の後を享くる者なり。人は人の業を摸するものなり。人は人の言を信ずるものなり。人は人の教に從ふものなり。人は人の旨に順ふものなり。世界は常に故るき衣を着けたる新らしき人を以て充滿せり。一の時代は他の時代の古套を着たるにあらざれば則ち自ら裸躰ならんことを恐るゝなり。今日の日本誰れか正面に立つて儒教道德を主張するものあらむ。然れども彼等が判斷の原機は即ち存して彼にあるにあらずや。今日の日本誰れか外來の宗教に甘從せんや、然れども其の實彼等は外來の教義教則に拘束せらるゝにあらず

や。何が故に是なる、曰く彼れ之を是とすればなり。何が故に非なる、曰く彼れ之を非とすればなり。非非是是、悉く我にあらずして他にあり。昨日は大石良雄を大悪人と見做せしもの、今日は大忠臣と崇む。昨日は錦織を大忠臣と見認めたるもの、今日は即ち大奸物と稱す。斯の如きは世の批評なり。彼等は事物の表面を見れども、その眞相を見る能はず、人吠ゆれば、我も吠へざるべからずと信じ、人泣けば我も泣かざるべからずと信ず。社會は斯かる種類の人物を以て塡充せらるゝ時、既に皮ばかりになれるなり、即ち死せるなり。唯だ怯懦にして、古來の法則を打破すること能はざるもの、唯だ狹隘にして、服從をのみ之れ事とするもの、唯だ淺薄にして、外面をのみ之れ心とするもの、斯くの如き人物を以て立てる社會は、一の生命なきものなり。汝は自由黨なりや、然らば我も自由黨たるべし、

汝は改進黨なりや、然らば我も改進黨たるべし、汝は國民協會なりや、然らば我も國民協會たるべし。斯の種類の人物を以て成立てる國家は一の自信なく、一の自我あるなし。エマルソンの自信論たゝれ亞米利加の爲めに說かれたる福音と思ふなかれ、今の日本の如き、特にこの福音を要すべき時にあらずや。

人は己れに與へられたる耗地あり。この耗地より自らの勞作を以て、自らの收獲を納むるの外、宇宙にいかほどの善きもの充滿せりとも、之を取つて己れの有となすこと能はず、摸倣は自殺なり。羨怨は無識なり。人は善惡共に自ら之を撰ぶなり。彼の權は全く新らたなるものなり、彼の外に彼の權を知るものなし、彼の外に彼の識るところを知るものなし。……自から爲さんと欲することを爲せし時、人は尤も樂し。自ら爲さゞらんと欲することを爲したる時、人

は泰らかなるを得ず。……

汝自身を信ぜよ。一切の心此の鐵線に觸れざるはなし。運命が汝に與へたる場所を甘受せよ。偉大なる人物は、小兒の如く己れの運命に服從したるの人なり。……然れども能く運命に從ふの人は、即ち能く自らを信ずるの人なり。自らを信ずること愈固ければ、自からにして毀譽褒貶に從はざるに至る。社會は何人にも和熟を求むるにあらず、人の之れに對して和熟を求むるなり、社會は人を驅つて服從者（コンフォーミスト）たらしめんとす、能く當時の德義を守り、能く當世の事務に通ずるもの、之れ社會が指して以て最高の人物と稱するところなり、然れども苟くも人たらんと欲せば、不服從者たらざるべからず。人の善と呼ぶところのもの必らずしも善なるにあらず、自から其の善なるを探驗するを要す。汝の心の成全の外に神聖なるものあらず。

……我若し惡魔の子なりせば、我は惡魔の道に從つて行ふを恥とせず。我が本性の法の外に、一の他の重んずべき法あることなし。善と惡とは、人が彼方に移し、此方に移す一定の本據なき名義のみ。我が善しとするところは、我が本質に從へばなり、我が惡しとするところは我が本質に背けばなり、死したる制度、死したる教法は、奉ずると奉ぜざると、將た何かあらむ。

普通に德と稱するところのものは、規則（ルール）よりも寧ろ取除（エキセプション）きなり。人と彼の德とあり。己れを離れたる勇氣ある事業又は慈善の行爲をなす。而して之を見る者は曰く、此人の德高いかなと。何んぞ知らん、彼が斯くの如くに爲せる善行は、病客の高き宿錢を投ずるが如く、自らの爲に計れる詫金の如きものなるを。然れども人は之を知らざるなり、斯の種の善行を爲せるものは自から矜りて、以て之を

人に責め、責めらるゝものは以て之れを學ばざるべからずとす、愚も亦甚しき哉。

我は我が考ふるところを爲さん、人の考ふるところは我が關り知るところにあらず。故に或は社會よりも甚しき攻擊を受くることあるべし、卑劣なりと呼び、淺薄なりと呼び、あらゆる罵言を盡して排けらるゝことあるべし、然れども看よ、世の說に從つて世に活くる程容易なることありや。然らば孤獨は如何。然り孤獨は以て全く自家の心に從ふて生活するを得せしむべし。然れども尤も難きは紛糾錯雜の裡にありて、坦々として孤獨の不羈を守ること是なり。之を爲し得るもの、以て大人と稱するに足れり。

習慣の死骨に默從するの弊は人の氣力を減殺するにあり。人の時を失はしめ、人の性格を損はしむるにあり。死したる都會を守るの

人、多數にして勢力ある黨派の爲に投票するの人等は、その如何なる人物なりやを知了するに苦しむなり。是等の人々は自己なるものを備へざるなり。其の言ふ所は己れの言葉にあらず。其の行ふ所は己れの行にあらず。某の敎派に屬せりと言へば、其の說くところ畧ぼ察すべく、某の黨派に屬せりと言へば、其の論ずるところや知るべきなり。

然れども之に反して所謂非服從者(ノンコンフォーミスト)なる者は、世界の鞭苦を免るゝ事能はず。彼れ街上を步めば、世界は彼を邪視するなり。朋友の客室に於ても亦た然り。世界は眞に彼を憎惡すること、彼が世界を憎惡するが如く甚しきや。然らず。公衆の一顰一笑は一の原因を有するものにあらず、面を拂ふ風の如く、來るも輕く去るも輕し。

次に吾人の自信を傷る者は、整合を求むるの念なり。舊法舊式を

墨守するの果を生ずるは此の念よりなり。一の事を行し、一の言を發するにも、其の事と其の言の眞性質を考ふるに先ちて先づ其の果して舊法舊式に整合すべきや否やを煩慮す。斯の如き整合は小量者の陰鬼なり、彼の小政治家、小哲學者、小宗教家等の爲すところは此の陰鬼の業にあらざるはなし。然れども大人豪傑の爲すところは之と異なれり。彼の胸中、一の整合あるなし。彼は己れの影を知れども、他の影を知らず、直指直進、自らの信ずるところに到らざれば息まず。之を以てピタゴラス、ソクラテス等の英豪は一代に誤解せられたり。誤解せらるゝは蓋し英雄の常のみ。

眼前の毀譽に拘々たるものは其の行爲は往々にして其の意志と背馳せり。然れども眞贊なるものゝ行爲は、如何に變化多くとも、之を一貫する絲あるを見る。整合は隱蔽なり、詐僞なり、達士は自ら

を暴露す、惡をも善をも暴露して、人の之を是非するを顧みず。名譽とは何ぞや。紛々たる新聞紙的の名譽將た何する者ぞ。眞正の名譽は、千古不動なるもの、今日之を崇拜するは、古時之を崇拜せしに異ならざればなり、今日之を崇拜する所以、永遠に亘りて之を崇拜すべければなり。禮節は守らざるべからざるに非ず、然れども屑々として唯だ之を破らんとするを恐るゝが如きは、抑も自信なきの至りならずや。眞人は「時」にも、「場所」にも屬するなし。彼は一切諸物の中心なり。彼の在るところに造化あり。眞人は大元なり、一國なり、一時代なり、彼は無限の境、數、時とを抱きて以て其の道を成すなり。之を以て後人之を遵奉す。

人須らく自らの價を尊むべし。匍匐して行く勿れ、徑立して歩むべし。世界は彼の爲に成立てることを知らざるべからず。王侯宰相

果して何かあらむ、玉冠錦綬果して何かあらむ、彼等も我も同じく無限なるものゝ前に立てり、須らく天眞の意想を以て、我が立てるところに立つべし、彼の光は即ち我の光なり、彼と我との間に何の距離かあらむ。

之よりエマルソンは心靈と聖大なる精神との關係を論じて曰く

人の心尤も丹きところには、聖なる智慧（ウイスドム）の自らに來り臨むあり、一切の過去は此時を以て堙滅して、「現在の時」は萬ろづの物を吸入す。一切の物は之を中心として鳩まり、細々察々たる諸物悉く此の中心に注集す。人若し汝に向つて、他の知らざる國の、他の消え去りし時代の朦朧たる幻影に入りて、當時の「神」を求めよと言はゞ、之を信ずる勿れ。樫樹は樫子よりも勝らずや。生氣盈たる少年は其の雙親よりも可からずや。何ぞ過去を崇拜するの愚を學ばむ。心靈は光なり、時間と空間は眼が與ふる色に過ぎざるにあらずや。心靈の存するところに日あり、過去は即ちその夜にあらずや。人は餘りに顧眄す、何ぞ自らの考ふるところ、自らの任ずるところを言はざる。古人を引照するにあらざれば、言ふこと能はざるを信ずるか。看よ、我が窓前の薔薇は、過去りしもの、又は他の優れるものに對して顧眄するの色は毫も無し。彼等は自ら在る儘にて、今日神と共に存せり。彼等は「時」を顧みざるなり。彼等は悠々として彼等のみあるなり。その未だ蕾なりし時も、其の既に花となりての後も、其の冬枯の時も、割られず、劃られず、增さず、減ぜざるにあらずや。」

之よりエマルソンは、凡ての物が中心に注げること、人間の須らく鵠立すべきこと等を論じ、大なる自信は、一切の事業、一切の宗教、一切の教育、一切の生活、一切の哲學等に改革を與ふるものな

ることを論じ、祈禱なるものは神と我とを二にするものにして、意志の疾病を證するものなることを說き、信條は即ち智識の缺乏を示せるものなることを說き、學術其の他の爲に旅行するものは、自己を離れて、古代の中に生氣を沒入するものなることを誡しめ、更に又た摸倣の弊を論じ、他を學ばずして己れの心に從へと敎へ、文明は車駕を造りたれども健脚を失へりと嘆じ、財產に憑り、政府に憑るも亦た自信の缺乏なることを示し、滔々數千言、自信の重んずべきを敎へて餘蘊あるなし。最後に運命に就きて斷じて曰く。「多數の人は運命を賭して、悉皆之を得たりと思はるゝことあり、然れども運命の輪は自からに廻るが故に、何時の間にか彼等は悉皆之を失ふてあるなり。人須らく運命の博奕を愼しむべし、直しく神の左右大臣なる原因結果の理に聽くべし。「意志」によつて能く行し能く蓄ふれば、「機會」の車輪は容易に繫ぎ留むることを得べし、之を以て恐怖に脅かさるゝことなきを得るに幾からんか。政治上の勝利の如き、地價の上騰の如き、痼疾の回復の如き、其の他爾の心を騷がして良期來れりと雀躍せしむるものありとも、爾は之を信ずる勿れ。「爾自身」の外に、爾に平和を與ふるものなし。固く爾の主義の上に立て、之れ平和の秘訣なり」。

第五章　英雄論

英雄論とはRepresentative menと題する一冊子の題名の意譯なり。之を譯して「代表者」と云はゝ至當なるべきも、方今の我が思想と我が言語とは、共和制の哲人が用ひたる代表の意義を彰はすに適せざれば、余は彼と雙兒の間柄なるカーライルの用ひたる文字を假來りて、之を英雄論と意譯す。然れども讀者之を以て、彼が英雄に對する思想をカアライルの英雄に對する思想と混ずる事あらば、之れ余が哲人に對する罪を深からしむるものなり。

カアライルは其性君主制に傾けり、崇拜を喜べり、エマルソンは然らず根本に於て共和制に傾けり、英雄を論ずるも古代的崇拜を避けて、自然と心靈を素とせり、故にプレトーに就きても、

プレトーは極致の負債者にして、吾人のプレトーに負ふところは、即ち極致に負ふところのものなりと言へる程也。讀者請ふ之を諒せよ。

其一　序論

英雄論は千八百五十年を以て始めて上梓したる一冊子なり。其序論は、第一に英雄を信ずるの止むべからざるを論じ、少年は之を夢み、或人は之を索むと說き、如何なるものにも英雄あり、科學にも宗敎にも其他凡ての事に其の英雄あるを示し、次に英雄とは何ぞやの疑を解いて、他人が辛苦經營を以て尙ほ達すること能はざる高大なる思想の領地に棲へる者なる事を論じ、次に又た、英雄の種類を分析し、英雄とは人民に憲章を與ふるの皇帝、心靈の平等を敎へ、人民の塗炭を救濟するの法王、彼の王國を統御するの帝王、（皇帝、法王、帝王、等の語、字義の表面に拘泥すべからず）等なることを示せり。而して後英雄の終局の用を說いて曰く、神才の利益は其の人を原力として信ずるに由つて生ず、彼は原因として吾人を助け、又た結果として吾人を助くと。

其二　プラトー、哲學者

プラトーは哲學にして、哲學はプラトーなり。……妻もなく子も持たざりしが、凡ての文明國の思想家は彼れの子孫たるの榮を喜べり。造化は斷へず人傑を送り出して、彼の人（His men）即ちプラトー派の人とならしむ。アレキサンドリヤ派も、エリサベス朝も、トーマス、ムーア、ロード、ベーコン、其他幾十百の英士も、悉く彼の

子孫にあらざるはなし。カルビン派も、彼のフェード（書名）に本源を取れり。基督教も彼によつて今日あるを致せり。マホメット教も彼の哲學に本づくところ少なからず、其のアクハルキ、ジヤラリと稱する倫理書を一見せば明らかに之を知るべし。神秘派も亦た然り。

この希臘の一市民なるプレトーは之を愛國者と呼ぶべからず、之を一村民と呼ぶべからず、英人の傳を讀むや、如何に英國的（イングリッシ）なるよと言ひ、獨人の之を讀むや、如何にチユートニックなるよと言ひ、到る所の國民は之を讀んで自國の有と思はざるはなし。彼が英雄たるは即ち爰に存す、彼の洋々たるヒユーマンチーは一切の派流的（セクショナル）の疆域を超脱せり。

次にプレトーの原造を論じて曰く。プレトーは他の諸英雄の如く彼の時を盡せり。英雄とは大なる契和力の謂なり、美術を、科學を、

智識を、彼の身邊に簇めて之を己れの糧とするものゝ謂なり。彼は一切の物を殘さゞるなり。彼れは一切の物を整ふるなりと。次にプラトーの世界觀を論じて曰く。プラトーは彼の時代の學藝を吸收したり。前代の諸師より以下、彼の故師ソクラテス迄の智識を網羅したり。伊太利に行けり、埃及に行けり、遙東にまで旅せりと云ふものもあり。斯の廣汎なる智識は以て彼を哲學の代表者となすに適せり。彼は哲學者にして哲學者以上なり。彼は又た詩人として、其最高の地位に立つべし。

これより一轉して、大才の大才は短かき傳記を持てりと云ひてプラトーの傳記の爲に數行を費やし、而して後彼の傳記は內部なりと說き、彼が愈古るくして愈新なることを示し、漸く進んで、哲學の本躰を論じて、哲學とは、人の心が人の心に、世界の根本を與ふる

記載なりと說き、而して後哲學の基礎として立てる二大事實を擧げて曰く。一は純一(ユニチー)即ち同一(アイデンチチー)なり。他は多樣(バライチー)なり。吾人は一切の物を統一する法を知り、且つその表面の差別と深奥の似同とを識るに因つて一切の物を歸合す。然れども、此の歸合同一を知るは即ち物の差別を知る所以なり。一(Oneness)と他(Otherness)とは斯くの如く兩立せり。多くの果の一の因を索めて、之を得れば、その因に對する因を索む、而して後再び尙ほ深き因を索む、斯の如くにして絕對の因即ち一にして凡てなるものを得ざれば止まず。大陽の中心に光あり、光の中心に眞理あり、眞理の中心に死なざる者あり。東西の哲學は同じ中心を持てり。……之よりベタスを引きて、一と他との關係を明らかにし、尤も重んずべきは心靈なるを說き、而して後曰く。思辨は斯くの如く一切の物を提げて純一に注ぐ時に、動爲(アクション)はその反

對の側に立ちて、一切の物を變化に捧ぐるなり。甲は心の進力若くば引力にして、乙は「自然」の力なり。純一は吸收し溶解す。自然は開放し創造す。此の二大原力は一切の物と一切の思想とを經緯せり。一として、他として、存在として、智識として、必要として、自由として。靜として、動として。權として、分配として。强力として、快樂として。意識として、定義として。神才として、才能として。熱情として、博聞として。所有として、貿易として。族級(カステ)として、敎養として。王として、共和として。斯の如く凡ての物を取つて之を別つことを得べし。蓋し一は組織を脫離するもの、他は機械的の執行なり。

是より彼は、東洋と西洋との思想の相異を論じ、大東(イースト)は純一を愛し、不動の制度を重んじ、哲學を尊び、抽象を喜び、深奥なる理想

に耽るものなることを說き、又た西洋(即ち歐羅巴)は之に異なりて、活動的、創造的なりと說き、族級を排するに敎養を以てし、哲學としては敎養を取り、美術、發明、商業、自由の國なることを說けり。之を說きて後彼はプラトーに還りて、彼に於て東西の兩大元素は、美はしく折衷せられたるを示せり。曰く。プレトーは埃及及び他の東洋國に思想の順禮をなせし結果として、一切の物が注集する唯一神(チー)の思想を胎生せり。亞細亞の純一思想と、歐洲の多樣思想とは、彼の上に和合せり。亞細亞的心靈(アヂアチックスピリット)の無限は、歐洲の表面を愛好する、機械を製造する、結果を賞美する思想と共に彼の上に契同せり。プレトーは是等を和合契同し、兩者の長所を取つて之を一團に打成せり。亞細亞の宗敎を基礎とすると共に、彼の形而上學自然哲學等は歐洲の靈智によりて成れり。彼は實に此の二大元素を兼ね備へたる

の人なり。……

漸くにして彼は、プレトーの中心の敎道に進みて曰く。多くの理學者が物質的化學的に理論なりとするところのものは、プラトーに於ては第二の原因にして、世界の理論にあらずして裸躰の目錄なり。爰に於てプレトーを引いて曰く。「吾人は最高命令者をして宇宙を製作せしむるに至りたる元因を知らざるべからず。彼は善なり。善なるが故に惡念あること.となし。惡念なきが故に、彼は一切諸物をして、彼の如くならしめんことを欲せり。何人にても、之を以て世界の基礎の元因なりとする者は、即ち眞理に在るなり。一切の物は善の爲にあるなり。而して善は又た一切の美なる者の元因なり」。之れ即ちプラトーの敎道の中心なり。……

吾人は此小冊子の一部分に於てプラトーを紹介するにあらず、

プラトーを論じたるエマルソンを紹介する者なるが故に、不本意ながら爰にてプラトー論の抜萃を閉ぢざるを得ず。

第六章　エマルソン小論

其一　彼の祖先、周圍、及び生活

吾人は已にエマルソンの小傳を終り、又た彼の著述の抜萃をも終れり。之より傳記家の義務として爲さゞるべからざる事は彼に對する評論なり。

讀者はエマルソンの小傳によつて、略ぼ彼の生涯に接したらむと思へば之を繰返すの要なし。彼は多くの他の偉大なる人物の如く、極めて短かき傳記の中に、極めて長き成果を殘せり。而して吾人の彼を論ぜんとするに當りて、第一に注意せざるべからざることも亦た此の短かき傳記にあり。

出來事なき生涯、變化少なき生涯、之れエマルソンの思想の鐵甲

なり。始めて「自然論」に於て鳴らされたる琴線は終りまで同じ調を奏して、愈多く趣を添へ、愈多く味を新にせり。彼はウオーヅウオルスを始めとして、多くの神才等が陷沒するを免かれざる反動の急潮にも溺るゝ事なかりし。彼の生涯は、好し其の初航には愛妻を失ひ、愛子を先だせし等の事ありしと雖、終始同一なる航路を取り、泰然として凡ての誘惑と凡ての難難とに打勝ちし事こそ、抑も彼の思想をして彼がありし如く價直ある者とならしめしなれ。

彼は幸福なる者の中の幸福なる者なり。彼は多くの他の哲學者、詩人等が「運命」の驅るところとなつて嘗め去り嘗め來つて、然る後に發悟する人生の苦痛を自己の生涯の明鑑の表に寫し出さゞりし。彼はカアライルの如く蘇國の沈欝なる大氣を呼吸せざりしなり。彼はウオーヅウオルスの如く佛國の迷巷に徘徊せざりしなり。彼の生涯は能く修練せられたる自己の進捗なり。その中に米洲は其の健全なる希望を宿せり。その中に新らしき世界は新らしき生命を湛へたり。彼は能く自己を廣げて、之を一國に施せり。彼は新英土の一民として生れ、新英土の一民として終れり。彼の祖先は彼の上に、純潔なる、正直なる、且高尚なる血液を與へたり。彼の思想は、常に此の血液の運行と密接の關係を有せり。彼を繞れる新英土の空氣は、清教徒によつて呼吸せらるゝに適したり。彼も亦た彼の生活に於ては一個の清教徒たり。此の祖先あり、此の周圍あり、而して此の生活あり、エマルソンを造れる第二の造物者を知らんこと豈に難からんや。

然れどもエマルソンのエマルソンたるは、彼が祖先の血液を繼承したるが故にあらず、彼が新英土の健全なる空氣を呼吸したるが故

にあらず。之れ常人の爲し得る所なればなり。古へより偉人の生涯は波瀾多し、波瀾なきを以て彼を過賞すとも彼に一分の價格を添ゆるなし。沈波なきを以て重しとするにあらず、波瀾なき生涯に波瀾ある功業を奏したる事、之れ即ちエマルソンの特異なる榮譽なり。極めて靜平に過ぎし彼の生涯は、極めて多事なる改革を成し遂げたり。彼は勇者の劒戟を執つて戰場に奮躍するが如く、直ちに戰ひ直ちに勝たずと雖、彼の生涯は徐々として昇れる日輪の如く漸く進みて漸く固く、終に自己を新世界の生命の中心たるの地位に安んじ、一代の中に其の思想の世に行はるゝを見るに至れるなり。

然れどもエマルソンは何人ぞや。彼は預言者なりや。預言者の名は遠く歷史の紙の後部に沈みたり。彼は詩人なりや。彼は哲學者なりや。或は宗教家なりや。是等の榮譽ある名の何れに屬するや。盲目の崇拜者は、彼を詩人と呼ばん、彼を哲學者と呼ばん、彼を宗教家と呼ばん、何となれば彼は是等の者の名に適する或分量を持てる事甚だ明瞭なる事實なればなり。然れども傳記家は必らずしも盲目なる崇拜者たるを要せず。請ふ之より讀者と共に彼の何人たるかを學ばんか。

其二　彼は詩人なりや

彼は詩人なりや。然り彼は詩人の一人なり。彼の詩は彼の論文と共に多數の崇拜者を有せり。疑もなく亞米利加の智識界に於ては、彼の同輩なるホイッチア、ロングフェローと共に詩界の明星として畏愛せられたらんか。彼の May Day を讀み、彼の Boston hynen を讀みたるもの誰れか彼の思想の幽遠高雅なるに驚歎せざるべき。余は元

よりエマルソンを多讀したるものにあらず。然れども余は白狀す、余がエマルソンに對する尊敬は、彼の論文にありて、彼の詩にあらざるを。余は彼の詩の恬寂を愛せざるにあらず。彼れども余は王陽明を詩人として崇拜することを能はず。彼の思想は詩人としては、餘りに凝固的なり、餘りに靜平にして且つ幽奥なり。彼の詩は彼の論文の繰返なり。彼の論文を韻語に更めたるの外、詩に必要なる諸種の元素を認むること能はず。彼は自らの哲學によつて、日常感得するところ、接觸するところを吟哦す、而して彼の詩の本源には、彼の哲學あり、彼は此の哲學を離れて詩人たるを得ず、即ち沒我の域に立つて、人生の妙機を闡くは彼の長所にあらず、彼は彼の觀るところを歌ふものにして、其の詩は常に彼なり、而して彼を離れて彼の詩あるなし。彼は又た其のスタイルに於て、間ま澁難にして、的確を缺くことあり。多くの他の詩人に比する時は、遙かに此點に於て劣等の地位に立たざるべからず。加之彼の詩は寧ろ默思沈想の後に成れるものにして、彼の神氣躍動して、雷電を馳驅するが如き狀趣もなく、何處に天來の靈韻ありやと疑はしむるばかりにて、元より此點に於ても多くの他の詩人に及ばざること遠しと云ふべし。且つ彼の詩の特に他と異なれるは、餘りに抽象的にして、具象的事實の上に、何等の感銘を與ふること能はざるが如き、詩人としての彼の技倆は、極めて不充分なる者と言ふべし。彼は又た詩人に切要なる熱意熱中の資性ある人にあらず。彼の幸福なる生涯は彼をして、人生の痛恨悲哀を味はしむることなかりし、涙の谷は彼に取りて他人なり、姦惡邪心は彼に取りて他人なり、彼は誘惑の世を離るゝこと遠し、彼は罪惡の行はる

ゝところを距ること遙かなり、之を以て、彼を鼓舞するところのものは「自然」の優渥なる賚物か、然らざれば默思默想によりて得たる抽象的の觀察なり。彼は彼の主觀的の心の中に於て、彼の詩料を取れり、此の裡に映じ來るものは必らず彼の唯心的哲學の承諾を得ざるべからず、必らず彼の純潔にして透明なる思想と合躰せざるべからず、之を以て彼の詩は單調にして變化に乏し。彼は創造の才を有てるものならず、想像の力を有てるものならず、思想を結晶して、美術上の創造とするは彼の爲し得るところにあらず、想像を使役して、詩歌の幻化を生ずるは彼の自から當るところにあらず。

彼は詩人なりや。曰く然らず。エマルソンは自ら其のカアライルに與へたる書簡の中に於て之を言へり。「余は詩人にあらず、余が屬するところは、文學の卑き部局なり。即ち報告者ともいふべき地位なり」と。彼が自から任ずるところ、彼にあらずして、自から他に存するあるは之を以ても見るべし。彼は自から其のスタイルの缺點を擧げて、同じくカアライルに與へたる書中に章句を爲すに及ばざることを言へり。彼は本より章句の人にあらず、詩人にあらざると共に詩作者にあらざること分明なり。

斯の如く彼は詩人にあらず、否な詩人として多くの他の詩人の席に列することを容すべからず。然れども讀者請ふ彼の詩集を披きて、其の美の歌の如き、自然の歌の如き、尤も短かきものを取つて之を一唱せよ、元よりグレーを讀むが如く艶婉秀麗なるところはなかるべきも、元よりゴールドスミスを讀む如く眞率と的實とを見ることは能はざるも、自から一種の調を成し、自から一種の趣を備へて、エマルソンといへる詩人の杳然として讀者の眼前に現はるゝを見るに

あらずや。彼の May Day. を讀まば、如何に自然の光景と彼の樂天主義とが相調和して、希望と生命の美くしき泉源を活描し得たるかを見るべし。The humble Bee に於て、如何に微細なる動物と雖自由に天地に飛遊するの光景畫き出でたるを見るべし。Brahma に於て、靈秀なる哲理を見、give all to love に於て、如何に彼が愛情の重んずべきかを知り、之が爲には何物をも辭せざるべしと歌ふを聞かん。彼は彼の論文を繰返す如く、「富」を歌へり、「經驗」を歌へり、是等は詩人としての彼を他に異ならしむるに於て力あるもの、或は又たスピンクスを歌ふが如き運命を歌ふが如き、自から題目に於て既に他の詩人と異なれる撰みをなせり。

余は彼の詩を愛すること深きものにあらず、從つて之を多讀したるものにあらざることを白狀す、之を以て余が摘出して彼の詩の標本として讀者に示さんと欲するところ自から他のエマルソン愛讀者と異なるあるやを圖らず。左に掲ぐるところは、The world Soul と題する一篇の前三節にして、好くエマルソンの詩想を代表するもの、但し散文に於てすら難奥にして譯すべからざるもの、其の妙趣を傷けんことを恐れて原文の儘にて載掲す。

Thanks to the morning light,
Shanks to the foaming sea,
To the uplands of New Hampshire,
To the green-haired forest Free;
Thanks to Each man of Courage,
To the maids of holy mind;
To the Boy with his games undaunted
Who never looks Behind.

Cities of Proud hotels,
Houses of rich and great,
Vice nestles in your chambers
Beneath your roofs of slate.
It can not conquer folly,
Time-and-space-conquering steam,
And the light-speeding telegraph
Bears nothing on it's Beam.

The politics are base;
The letters do not cheer;
And 'tis far in the deeps of history,
The voice that speaks clear.
Trade and the streets ensnare us,
Our Bodies are weak and worn;
We plot and corrapt each other,

And we despoil the unborn.

* *

其三　彼は哲學者なりや

余は既に詩人としての彼を見たり。彼が詩人にあらずして而も自から詩人なるを論じたり。哲學者としての彼も之と大なる徑庭を見出さず。即ち彼は哲學者なりやといふの問に對しては、否、と答ふるを以て尤も適當なりとす。

彼は如何なる學派に屬して、如何なる新說を唱へ出たるか。彼はプラトーにも屬せり、神秘派にも屬せり、ゾロアスターにも屬せり。或は又たカントより出たりと言ふもあり。而して彼は自ら曰く、尤も古るき眞理は尤も新らしき眞理なりと。彼の論文は概ね講話の躰

をなせり、哲學書として取るべきにあらざるは無論なり。彼の學說は大方重複せり、彼は自から言はんと欲するところを言ふが爲に、譬喩をも引照をも、全力を擧げて、之に傾むく、之を以て彼の論文を讀むには勢ひ論理を離れ系統を離れて、彼の哲學に沒入せざるべからず。

彼は既に彼に沒入したる吾人の眼を引て、自在に或は無限、或は有限の哲學に遊ばしむ。或時は生命の存在に關する重要なる法則を敎へ、或時は人生の行爲に關する法則を捉へて之を敎ゆ、斯くの如く彼の敎理は錯雜を極むるものにして、今しも超然的妙理に耽りて、悠々として心靈の奧を語るかと思へば、忽ち去つて人生日常の行爲に移り孳々として人間の德性を敎ふ。斯くの如く「彼」に沒入したる後、彼を去つて少しく遐たりたる所に往きて反顧するに、彼は本來のエマルソンなり、彼の哲學は哲學者の哲學者にあらず、彼の學說は學說者の學說にあらず。彼は靜かに几に隱れて古今の哲理を味ひつゝあり、然れども彼は自ら哲理を開發せんと欲するの心あらず。彼は新らしき哲理なるものゝ存するを信ぜざるに似たり。「哲學とは人の心が世界の成立に關して自らに與ふる記載たり」。と斯く彼は言へり。「我が曉天は我がアッスリヤにして、我が日沒は我がフハホス等の想像的神仙國なり。我が白晝は感覺と理解力の我が英國にして、我が深夜は神祕的思辨的の獨逸なりと」。彼は斯く云へり。彼は又た或る論文に於て、(哲學も詩も宗敎も其の元素に於ては一なることを論じ、又た眞と善と美とは一にして離るべからざるものなることを言ひぬ。要するに哲學者と稱する階級に向つて、强いて彼を仲間入りせしめんとせば、彼は極めて不論理なる、不規律なる、不整合な

る哲學者たるを免がれざるべし。

彼は數學の法を看過せし譯にはあらず。自然の法、物質の法を怠慢に付したるものにもあらず。然れども要するに、彼は秩序を守りて物理を講究するの人にあらず。彼は多く心と物に就きて談れり、然れども形而下及び形而上の哲學的通語は彼を包擁すること能はざるものなり。彼は「自然」に就きて多く說けり、然れども彼の「自然」は哲學的成語の意味に從へるものと認むること能はず、彼の「自然」は即ち彼自らの解釋に基ける「自然」なり。

彼は哲學者の名に於ては斯くの如く大なる哲學者にあらず。試に彼をして哲學の淵叢なる獨逸に入らしめば、誰か彼に付するに此の榮譽ある名を以てするものあらむ。然らば彼は如何なる人ぞ。彼は人間の尤も高尙なる榮名の中に就いて、既に詩人をも否まれたり、

哲學者をも否まれたり、宗敎家としても亦た彼の傳記が示めせる如く無神論者として異敎徒として、彼の國民に否まれたり、彼れ果して偉大なる人物なりや、如何。

第四　エマルソンの地位

余はエマルソンに關して、多くの否定を以て彼の本據を明らかにしたり。彼は詩人にあらず、哲學者にあらず、宗敎家にあらず、元より頑迷なる政治家にあらず。爰に於て吾人は彼の地位を知らんと欲すること切なり。

凡そ偉大なる靈魂を有てる人は、自らの身邊に其の時代を吸收するものなり。多くの小政治家が、議會の內外に喧囂し、多くの小宗敎家が正統不正統の末節に紛糾し、多くの小哲學家が茫漠たる智識

の大海原に漂蕩する間に、眞に偉大なる人物は、己れを圍める宇宙と、己れを繞れる時代とを己れの足臺として立つなり。

吾人之をエマルソンの生涯に徵するに、彼は心と躰と與に成熟したる年を以て、コンコルドの幽境に身を退けり、其處にて彼は東西古今を通觀せり、彼は王陽明の思辨を以て、陶淵明の幽寂に身を置けり。彼は思想せんが爲に花園を耗やせり。花園を耗すが爲に思想せり。彼は一家にありて、樂しき一個の民なり。共和國にありて樂しき一個の共和民たり。新らしき時代にありて新らしき時代の人たり。米國は彼に於て尤も從順なる精神の兒を認め、彼は米國に於て尤も親密なる「自然」の親を認めたり。彼は外國旅行の愚を責めて、智識の爲め、美術の爲めに外國に遊ぶは、自己を捨てんとするものなるを錄せり。疑もなく彼は自己即ち我を重んずる者なり。彼は痛く美術などの摸倣を難ぜし節あり。(何の文なりしか記憶せず)。彼は數學的若くは論理的の智識を輕んじて、自然的(スポンタニアス)若くは直實的の智識を重んじたり。(才智論)彼は虛禮虛儀の賤しむべきを說けり。(風俗論)彼は思想の形式に先てるものなることを論ぜり。(詩人論)讀者若し一々彼の論文に就きて彼が如何に自己なるものを重んずるやを見るに至らば、彼の唯心論の根基も彼の自然敎の本源も、「爾自身を信ぜよ」と鐵案を下せる彼の自信說も、漸く正に了解するを得べきなり。

彼は知と行に於て、自らの立つところを明にせり、而して卓越せる識見を以て深く自己の存在を信じたり。彼の尤も重んずるところは心靈なり、彼は全宇宙を分ちて自然と心靈との二とせり、而して自然は終に心靈の爲めに成立てるものなるを說かずんば止まざるな

り、宇宙は心靈の前に透明無色なるものにして、爰に心靈あり、爰に純理あり、此の心靈は唯一の存在者にして、此の純理は唯一の支配者なるを説かずんば止まざるなり。我の裡に我あり、我の外にも我あり、而して凡ての者は我の裡なる我の爲に存し、之を除きては一も成全をなせるものあるなし。輪轉無常は爭ふ可からざる宇宙の定法なり、然れども其の中にありて、必らず毀はれざる、必らず滅ぜざるものあることを彼は信ぜり。

この廣大幽遠なる「我」は彼と共にコンコルドの僻地に在り。始めより終りまで彼と與に在り。この「我」は凡ての時代の偉大なる思想と凡ての時の純潔なる觀念を彼の身邊に誘ひ來れり。彼は古今の歴史は他人の事を記するものにあらずして、己れを載するものなることを説けり。（歴史論）實に彼は古今の歴史をコンコルドの彼の幽居の中に集めたるものなり。彼はウオーヅオルスと性を異にして、勤勉なる讀書家なり、彼の書齋には、各般の典籍の堆積せるを見る、彼は此の裡にありて且つ讀み且つ考へぬ、彼の讀むは心を以て讀むなり、彼の考ふるは精神を以て考ふるなり。文の才、文の氣等は彼の關り知るところにあらず、想（アイデア）、之れ即ち彼が讀みたる、彼が考へたる唯一の目的なりき。之を以て詩人としての彼は前にも言へる如く諸々の他の詩人に比すべからずと雖、一種拔くべからざる清高幽奥なる哲理の隱約として其中に散見するを見ば、誰か彼を以て詩人の名を許るすべき者と認めざるを得んや。感情を以て書かず、激昂を以て歌はず、都べて空寂なる哲理を以て經緯せる彼の詩は、元より詩人の詩にあらず、然れども亦た之れエマルソンの詩にあらずや、彼は能く偉大なる人物が世に處するの道を知れり。彼は其の自信

論に言ひし所を自ら行へり。彼は口角沫を飛ばして是非を爭ふ種類の人にあらず、ハーバート大學に於て爲めに一場の演說が宗敎界の輿論を惹起して、辨難攻擊の聲一身に簇まりし時、彼は平然として自ら言へり、余は自らの言はんと欲する所を言ひしのみ、人若し何が故に之を言ひしかを問はゞ知らずと答ふるの外なし、余は人の抗擊に對して答ふるところを知らざるを恥ぢずと。

彼のダイアル雜誌を刊行するや、人の之れを顧みるものなく、三年の間收支僅かに相償ふのみにして、勞力の價は之を得るに處なきも。彼は澹乎として之を憂ひずー「自然論」一卷五百部を刷りて、十二年の歲月を費せる後に再板の榮に會へるも彼は悠々として之を慮らず。彼は荆棘を拓いて彼の邑地を廣ぐるの斧を以て、同じく思想界に於ける彼の領地を廣ろげたるなり。彼の自信は彼の斧にあり。

彼は曾つて一度も政治的紛爭の中に出でず、南北戰爭の大事に當りても、彼は滿足したる傍觀者にてありき。彼は一度び宗敎上の講壇に立てり、否な之れを以て畢生の天職とまで思ひ込みし事ありしなり、然れども彼は良心の故を以て自ら之を棄てたり。彼は到底コンプヲーミストたる事能はざるなり。衆を以て輿論を制する所謂政治的運動なるものは彼の尤も疾惡する所なり。舊式に扼み、舊法に拘はる所謂宗敎的敎養なるものは彼の遂に自ら堪ゆること能はざるところなり。彼は聖餐を論じて、聖職を去るに當りて自ら曰く、人の之を守るは余に於て何の異存あるなし、只だ余は之を守る能はずと言ふのみと。彼は多くの友を持つ能はず、ボストン近傍に住へる僅少の思想家が時に彼の靜默を破るのみにして、世に言ふ八方美人たるは彼に於て爲し得ざるところなり。要するに彼は漸次に彼の境地

を狹め行けり、ノンコーフオーミストたる彼は漸次に孤單獨の身となれり。而れども之と同時に、彼は思想の本地に於て、奇しきまで偉大なる人物となれるなり。彼は前にも言へる如く滿足したる新世界（米國）の新民なり。彼は新世界の粹美を着服して已れの用に供することを厭はず、彼は迂濶なる慕古者を笑へり。彼は過去の枯骨の中に盲摸するの愚を嘲れり。彼は今日も亦た昔日と同じ大陽を仰ぐにあらずやと言へり。（自然論序論）彼は古の善きは自然なるが故なりと言へり。（詩人論）斯の如く彼れは滿足したる新民なり。然れども記憶せよ、彼は米國の思想の潮流に滿足したるにあらざるを。彼の滿足したるは彼の身邊に新共和國の新精神を引き付けたればなり。この精神の上に堅く立ちて、彼は靜かに現代の思想に對する逆航者となれり。頃日米國より歸朝したる信憑すべき學士の說きしところを聞くに、米國の宗教界及び一般の思想界は著るしき變革をなせりと言へり。吾人の彼の洲の事物に接する毎に、或は雜誌に或は書籍に、或は見聞に、吾人は彼の洲の最早著るしき變革を成し遂けんとするに近きを疑ふ能はず。此の希有なる宗教國、此の希有なる自由國、此の希有なる民立國は、ユマルソン及び彼の同志によつて、前の紀元より後の紀元に移りし事實は、今日に於て之を確かむることを得るなり。この希有なる宗教、自由、民主の國はユマルソンに注集して然る後ユマルソンより傾瀉せられたり。この偉大なる成果（近頃の言葉にて事業）をなすが爲には、彼は彼の時代を彼の一身に集めざるを得ず、之を以て彼は宗教界に立ちては、一般の敵となれり、政治界に立ちては退隱の立法者となれり、詩界に立ちては自らの哲理を歌ふの外に餘暇なき詩人となれり。思想界に立ちては廣ろ

く世界觀の沈思家とならざるを得ざるに至れり。

亞米利加の民は思辨の民にあらず、彼は之を知れり。亞米利加の民は理解力の民にあらず、彼は之を知れり。亞米利加の民は莊重の民にあらず、彼は之を知れり。亞米利加の歴史的高大の以て天下に誇るべきなし、彼は之を知れり。亞米利加は兵力を以て世界に雄視すべき國にあらず、彼は之を知れり。之を知れるは心を以てなり、精神を以てなり。然れども之と共に彼の知れる事あり。亞米利加は英國及び歐土の粹を拔きて持ち來れること之なり。宗教上の自由の爲に萬里の險を犯して、移住し來りたるもの即ち米國の中心を成せること之なり。亞米利加は新らしき國にして故るき國々の諸々の制度文物を適用するを得ること之なり。亞米利加は傳說若しくは謬信の深く根蔕を据へたるものを見ざるなり。亞米加利は不羈自由の民

を棲息せしむるに宜しく、全く個人主義の應用を見るを得ること之なり。亞米利加は土地廣ろく希望多く、活きたる生命に盈てること之なり。斯等の事をも亦た、彼は心に於て之を知れり、精神に於て之を知れり。彼が立つべきところも亦た彼に於て昭々乎たり。爰に於て彼の自信は彼を導きて、一の新らしき哲理、故るくして新らしき哲理を、即ちエマルソン的哲理の光をコンコルドの寒村より晃々として放ち出でしめたるなり。

この光の爲には彼の超然派と稱する一種の思想家の團躰は、先驅として物質的形式的の思想界に其の道を開けり。歐洲に於けるカントの勢力は漸く太西洋の此岸にも、其の波動を打ち寄せたり。ゴエテの世界的智慧と稱する一種の魔力は始めに英國を振盪して而る後

漸く正に其進路を此方に向けつゝあり。カアライルの猛烈にして熱火の如き聲は今や酣に英國を轟ろかしつゝあり。此の際に當りて、エマルソンは温かなる春日の靜かに東天に冲るが如く、太西洋の此濱に於て新らしき光を輝かし始めぬ。カアライルを羨めども敢てカアライルを學ばず。ゴエテを慕へども敢てゴエテを擬せず。カントを究むれども敢てカントを祖述せず。自ら立つことゝ盤石の如く、遂に不死不朽なる思想界の大天地に、コンコルドの哲人エマルソンの地位を打ち立てたり。

其五　エマルソンの自然教

エマルソンは已に哲學者にあらず、然れども哲學を整排して、乾燥なる學理を温血ある教理となせしものなり。彼は自ら言へり（カアライルに與ふる書の中）「余は雜龙（ミセラニー）の犧牲なりと」。然り、雜龙は彼の天職たりしなり。彼は己れが東堂となりて、我土に歡迎したりし「サルトレザルタル」の熱中したる痛罵と、昂揚したる預言者らしき靈聲を發すること能はずと雖も、雜種雜樣の部局に渡りて隈なく涯なく其の民を教へたり。英國の批評家アーノルドは彼を以て、羅馬のアーレリアス王に比せり。カーライルもゴエテも存生中に於て、彼の如く己れの思想の普及を見ること能はざりし點を以てするも、アーノルドがアウレリアス王に比して彼を思想界に於ける、帝王なき國の帝王としたるも敢て異しむべきにあらず。

此の驚ろくべき權は果して那邊にか存するとせん。新英土（ニューイングランド）に於ける改革的の小噴火山は彼の近傍に於て、愈多く米國從來の宗教及道德を打却しつゝありし間に、彼は如何に、打破せしか、建設せしか、

打破したるものは如何に、建設したるものは如何に。彼は一方に向つては寧ろ此の噴火坑を埋めんと試みたるものなり、然れども到底彼は舊式舊法の人にあらず、彼は打破もせず、建設もせず、然れども彼は彼の新教理を説けり。故るくして新らしき人性の上に、撓むべからず折るべからざる教理をうち立てぬ。

吾人をして聊か彼の教理を知らしめよ、而して第一に彼の自然教を學ばしめよ。

余は之を自然教と呼ぶ。或る批評家が謂ふ所の Religion of Nature 之なり。自然教とは自然を禮拜するの義にあらざるなり。「自然」を恐怖し、若しくは崇畏したるペルシヤ人、グリーキ人は遠く歴史の海の彼方に沈みたり。十八十九兩世紀の哲學者が鋒を並べて、研究に研究を重ねたる「自然」、之も亦たユマルソンには甚だ大なる便益を

與へたるにあらず。ユマルソンの「自然」は自から異なれり。字義の解釋すら廣汎にして、他のものとは異なれり。何方より彼は此の希代の妙珠を尋ね得しぞ。暫らく之を説かむ。

彼は新らしき民として生れたり。血は之れを英國の人種に得しと雖、彼は自ら能く新らしき人種たるを得るなり。歐洲のポジチーブの思想は、歐洲の休息(レストレッス)なき心性の賚物にして、英獨佛等近世の歐洲國は、何れも此の種の心性によりて成り立たざるなし。羅馬の貽内より生れ出でし近世國は、この積極的の思想を以て、古代の消極的心靈的の東洋國を破滅して取つて以て易れるなり。東洋に生れたる基督教は、彼等の西洋に入りて其の半面なる積極的教理に蔽はれたり。歐洲は所謂事業の國として發達せり、羅馬及希臘の遺物を合せて、更に莊嚴高美の國として進歩せり。シユークスピーアを生めり、

ナポレオンを生めり。然れども彼等の中にありて、一の欠がるゝを得ざる缺點、として知らるゝは、幽寂の味之なの、一の欠がるゝを得ざる缺點、として知らるゝは、幽寂の味之なり。波斯の如き、印度の如き、希來の如き古代國に見るところの消極的の德、義、愛、善、美、等は彼等の中に其の面影を殘さゞるなり。彼等は能く理學を談ず、然れども理學の窮極は何ぞ。彼等は能く形而上學を談ず、然れども形而上學の終局は何ぞ。彼等は能く機械を運轉するの民なり、能く物品を製造するの民なり。然れども古代の靈高偉大なる觀念は彼等の中に存するなし。エマルソンは已れ自在なる境地に立ちて、自在に古今を通觀するの快樂に耽りたる後、漸く古代の殘墟より、其の遺珠を蒐め來りて、細かに之を量り、其の取るべきを取り、其の捨つべきを捨て、更に又た之を近世的思想に較し、彼の消極と此の積極とを打つて一團とし、此の一團を以て平民的の福音とし、此の福音を携へて之を其の米洲の民に施せり。

（プラトー論及び自然論參照）

彼の自然教は即ち此の福音を代表する者の一なり。彼は尤も早き東洋の思想を、尤も高く進歩したる近世の智識に加へんと試みたり。之を以て彼は俗眼を以て入ること能はざる自然に潜み入り、其の處より所謂エマルソンの樂天主義なるものを携へ來りて、之を世に普及せしめぬ。

彼は新らしき意義を「自然」に與へたるか。曰く然り。然れども彼は之を古るき意義に附加したるに過ぎざるのみ。米國に於ける歐洲的思想の餘りに物質的なるを憫れみて、彼等をして暫らく小兒の純樸に歸り、然る後「自然」の温かき無盡藏より、無量無邊の德化を得よと勸め、「自然」の美を說き「自然」の眞を論じ、之を說き之を論じ

て終るところを知らず。彼は歐洲及米洲の種族が活動的の發達に於て、既に其の頂上に達したることを觀たり、佛と獨の兩民が盛んに兵武の力を蓄へて、以て歐洲主權を爭はんとするを見たり、土耳其及び露西亞が、一は慓悍、一は獰猛、相對峙して運命を競ひつゝあるを見たり、斯の如く西洋的精神の充溢せる國々の過去及ひ未來を鑑みて、彼は恐らく、我が米國の百年千年の長計は、此の積極的活動的思想に加ふるに何物かを以てせざるべからざるを思ひ得たらんか。之を以て彼は遠く之を亞細亞に尋ねたり、彼は好んで波斯の詩を讀めり、彼はマホメットを讀めり、彼は更に獨逸の新傾向を利用して遙東の印度的寂靜を味へり、孔子を讀めり、ブラマを歌へり。彼が以上の諸聖を研究したる事實は、彼の論文を通讀するに從つて、諸所に見ゆる引照によつて明らかなり。彼は斯の如く智識を古今東西に求めたり、而して其の結果として、彼は驚ろくべき包擁の人となれり。彼は躬信の人として立ちながら、懷疑の人を喜べり、(ミンターが論) 彼は躬共和制の人としてナポレオンを容れたり、彼は自ら白狀する如く、報告者にして、又た雜物の人たり。然れども此の報告者、此の雜物の人にして始めて、極めて眞摯なる心を以て、「自然」の奧義を窺ふことを得るなり。彼は嬰兒の虛心を以て、「自然」の意義を探れり、之を以て彼は彼の種族に於て、未だ曾つて發見せられざる「自然」の涯りなき同情を發見し、優に彼一身に於て、東西兩世界の思想の大秘藏を結合せり。

波斯人は寧ろ「自然」の盲稱者たり。希臘人は寧ろ「自然」の力を畏れたり。羅馬人に至りては自然よりも人間の權を信じたり。歐洲の近世國になりては、「自然」は殆ど何物にても無かりしなり。その一

神的思想は、萬有的思想を蔽遮せり、その積極的宗教心は、「自然」と人間との間に大幕を張りたり。而して歐洲諸國の歴史は、實に人間の權の歴史にして、輓近の哲學者就中猶太の高尚なる血統を承けたるスピノザに至るまでは、「自然」に對する彼等の思想餘りに驕慢なりしなり。ゴエテに至りて、形勢頓に一變せり、而してカァライルは英國的思想を以て之を彼國に蔓衍し、「自然」に對する信仰、謂ふ所の萬有的趣味なるもの忽ち歐州の思想界を席卷するに至れり。然れども彼等の萬有的趣味、彼等の自然に對する信仰は、多くは希臘を承けたるものにして、希來的一神思想と相融和せるもの、未だ以て遙東の寂靜なる自然思想を消息したるものと云ふべからず。之ある。は蓋しユマルソン、米國共和制の一紳士エマルソンに始まれるか。

余は之を遙東といふ、然れども支那にあらず、日本にあらず、若しくは又た印度にあらず、チルヅオルスと淵明の比較論は、湖處子の技倆を以て始めて之を爲すべし、東西精神の相異なれる、其第一元因に於て已に相背馳せり、其の諸種の成果を取つて之を比論するは、余に於て成し得べからざるところ、之を以て余は余の主人公の人物と東洋の或る人物との比較は之を後の學者に殘し置くことゝせざるべからず。或邊に於ては、彼は淵明に似たりとも云ふべし、或邊に於ては彼は陽明に似たりともいふべし、或邊に於ては、彼は孟軻に似たりともいふべし、然れども之れ似同たり、此の似同は自から馴致し來りたる似同にして、此の似同を綜合し來りて後、彼が如何に多く遙東の消息を傳へたるかを知るべし。之を消息といふ、或は非ならん、消息にあらず契合といふべきか。

ユマルソンの共和的眼中には一點も古代の古神的思想あるなし、

之を以て近世歐羅巴の萬有的思想家とは、「自然」に對する思想を異にせり。彼は或意味に於ては無神論者なり、彼は屢「神」といふ語を人的神（パーソニハイド、ゴット）と背馳せる意味に用ひたり、或論にては彼は「純理」を以て神と同一視せり、或論にては彼は大素（エッセンス）を以て神を表はせり、或論にては、彼は吾は神の一部分なりといふ唯心的の神を說けり、其他諸所に同樣なる句調を用ひたるを見る。然れども彼は「一」の思想の上に立てるものにして、此點に於て他の多くの萬有思想と全く其軌を異にせり。彼は生命の中心を心靈とし、萬物の中心を同じく萬物の心靈とせり、而して是等の一切のものゝ元素、一切のものゝ原因にして、すべての關係を離れたるもの、凡ての雙對を離れたるもの、即ち「全」（ホール）なるもの、之を以て神とせり。この「全」（ホール）は即ち彼の「一」（ワンチッス）にして、此の「一」は凡てのものの原因にして、又た結果たり、部分にして又た全躰たり、此の「一」に於て、凡ての法の源あり、「心」（マインド）と「物」（マッター）との相結托するは、即ち此の「一」に於てなり、此の「一」に於て彼は「自然」と「心靈」の區別を沒せり、此の「一」よりして、凡ての精神的（スピリチュアル）法（ロウス）は流れ出るものなることを認めたり。此の「一」は即ち彼の神なり。

此の「一」なり、彼の東西を兼ねたるは、此の「一」なり、彼に西洋的神の思想と、東洋的神の思想とを調和せしめたるものは。彼は東洋的の神より、客觀性の「心」を取れり、彼は西洋的の神より、主觀性の「心」を取れり、而して主觀客觀を合一して、恰もカントを奉ずるかの如く、純理をして第一原因の地位に立たしめ、「心」（ソール）を以て一切萬物の中心に座せしめたり。「吾人の世界は神の眼を以て見れば透明なる法なり、事實（ファクト）の堆積にはあらず、法は事實を溶解して之を流動躰となすなり」。（サークルス）と彼は言へり。「自然には終局なし、

一の終局は即ち他の始原なり」（同論）と彼は言へり。「宇宙は心（ソール）の外現なり、何處にても生命（ライフ）のあるところには、其の外面に現出せざるなし」。（詩人論）と彼は言へり。彼の「一」は最早東洋的の神性思想の如く、意識界無意識界相逼たりたるものにあらず、神即ち「心」にして、吾は其の「心」の一部分なり。之と共に彼の「一」は最早神と人との相異なりたる存在（ビィシング）にあらず。「狀態といふ滿干常ならざる潮水の下に、實の存在あり」。この存在は即ち神にして、この存在なきものは惡にして、この存在あるものは、眞理と德義なり。この存在は彼にもあり此にもあり。神と人との間に一の遮斷あるなし。

爰に於て吾人は彼が「自然」に對する思想を明かにするを得べし。彼の「自然」とは此の「心」にあらざるものを言ふなり。「宇宙は「自然」と「心」とを以て成立せり」。とは彼が自然論に於て明言するところなり。而して彼の自然教の春曉ともなるべきは、此「自然」と此「心」との調和にあり。此の自然は心の仇にあらずして、心の僕なり。自然は人の爲の用にして、人は自然の主人なりと、之れ即ちエマルソンが「自然」の中に無窮の悅樂を探り得て、之を人間に傳へたる所以にして、要するに人間は自然の前に立ちて、頑是なき幼童の如く益もなく悲厭すべきものにあらずといふは、彼の自然教の根本なり。彼は斯の如く「自然」と「心」とを別つと雖、彼の「一」の思想は爰にも貫通してあるなり、彼は「物質（マッター）」としての「自然」を「心（マインド）」と相離れたるものとせず、見るべきものを見るべからざるものと相異なれるものとせず、動と反動とを相反對せるものとせず、無言と活動とを相背きたるものとせず、「凡ての物質的の物は、造物者の本心の渣の如きものなり」。と言ひし佛國の哲學者を引きて、物は到底心の外現なる事

を論じ、而して後「自然」と調和したる生涯は即ち德を愛し善を好む生涯なることを論じ、反覆丁寧に、此の調和を敎へたり。此の調和より吾人はユマルソンの樂天主義を學ぶを得べし、請ふ題を改めて之を論ぜん。

其六　彼の樂天主義

智識は悲の本源なり。世間無學にして無識にして而して自らの境遇に安んぜざるもの稀なり。人は智識なくして生活するを得べくんば、過去の幾千年の間に蓄積し來りたる、凡ての詩人、凡ての哲學者の、吾人に與へたる智識を抹殺するも亦た可ならずや。然れども智識は夏の日の涼飈の如し、心ある者は樹陰に行き、岸塘に立ち、以て此の涼飈を迎ふ。

知識に入るは易し、智識を出るは難し。バイロンは知識に入つて之を出るに難かりしもの、自ら白狀して智識の毒刺を詛へり。知識は甘美なる酒の如し、之を飲む時人は又た己れあるを知らず、醉熟して而して後漸く其の苦惱を覺る。斯くの如く東西古今の秀才英物の多數は迷へり。この苦惱に驅られて、人心の肺肝より溢れ出る一種の呼吸、之を厭世の思想といふ。この苦惱を脫し、更に自らの命を知り、自らの性を明らかにするもの、之れを呼んで樂天の思想といふ。

然れども偉大なる厭世家は、竟に一種の樂天家なり。吾人は爰に厭世樂天の定義を與ふるを要せず。ゲーテを呼んで厭世家といふは可なり、然れども長き間の彼の迷悶疑惑は、漸く晚年に近くに及びて、雲霧の靜かに日輪を離るゝが如く、彼をして彼の美術的現世に向つ

て微笑を以て身を安んじたるにあらずや。西行を呼んで厭世家といふも可なり。然れども彼も亦た遂に世を厭ひ世を逃るものならんや。超然として世を出るは元より止むべからず、世に對する心は遂に美くしき花の色を徹して、優に樂しくなりて、自から一種の大滿足に達せしことを疑はず。妄りに厭世と樂天を談ずる勿れ、凡俗の厭世は忽ちにして樂天たるを得べし、凡俗の樂天は忽ちにして厭世たるを得べし。

エマルソンの樂天主義は、彼の教理の中心たること、先人多く之を言へり。彼の自然教を研究したる後、彼の樂天主義を學ぶは至當の順序ならんか。

彼の樂天主義は彼の固有の性とも言ふべし。ゲーテの如く幾多の疵瑕を造り、幽暗なる大谷を渡りて而して後に到着したるものとは

異なれり。彼の樂天主義は、彼の八世の祖先が、彼の血の上に印銘したる結果とも云ふべし。之に加ふるに、彼の生活、彼の周邊、彼の財産。彼の地位、悉とく此の樂天主義に結果を注がざるはなし。彼に樂天主義あるは、彼が自らの手を以て之を攫みたるにあらず、天が彼を用ひて、希有なる福音を人類に頒たんとしたるのみ。

カアライルは人間に向つて、大なる信仰を傳へたる人なり、而も彼の著書の中には、往々にして痛く世を罵り世を厭ふの調を見るなり。彼がサルトレザルタスの中に永遠の否定を論ずるの一節を讀みし時、余は余が心の頻りに鼓動するを覺えたり、此の偉大なる靈魂が、宇宙と人生とに關する秘密を探りて、遂に永遠の是定を認むるに至るまでの生涯が、如何に慘憺闇黑にして、血汗の全身に徧かりしを思ひてなり。人は到底一度び彼の謂ふ所の聖大なる悲痛なるも

のに陷沒するなくして、燦爛たる光明に入ること能はざるべし。幸福なる生涯はエマルソンをして、カアライルの悲痛を味はしむるに至らざりしと雖、余はエマルソンに對して、或人々が假定する如く、始めより終りまで清圓にして疑迷なき思想の上に滑らかに轉び行きしものなることを信ずる能はず。

彼がモンターグ論の初章に記するところを讀んで、余は少しく之を得たり。後又た哲學雜誌に譯載したる或人のエマルソン論の中に、彼の少時の目錄の存するものありて、其中に何とも分らざる悲悶ありし事を記するの一節を引けるを讀むに及んで、余は更に之を得たり。余は其の目錄を得んと欲したるも得ること能はざるを遺憾とせり。然れども余は漸くエマルソンの樂天主義の門に近づけるの心地す。彼も亦た安き價を以て彼の樂天主義を購ひ得たるものにてはあらざる事愈明らかなり。

彼は學生たりし時、心がらの沙翁愛讀者たりし事は傳記家之を證せり。然れども彼は獨り沙翁の愛讀者たりしのみならず、懷疑派の巨擘モンターグの如きも、彼が尤も愛讀したりしものなる事モンターグ論を讀んで之を知るべし。其他彼の讀書の嗜好は推察するに難からず。後年聖餐に同情なきの故を以て、聖職を辭するに至りしまでの彼の胸中豈に徒爾ならんや。故を以て、聖職を辭するに至りしまでの彼の胸中豈に徒爾ならんや。偉大なる人物は、己れの爲に己れの途を拓くなり、之をなすが爲には、勢ひ周邊の物と鬪はざるを得ず、勢ひ荆棘に傷められざるを得ず、之に克ち、之に堪え、而して後に、凡ての物を己れに同化し、己れの爲め存在となさしむ。思想に於て然り、心性に於て然り、生活に於ても亦た然り。之を以てエマルソンも亦た此の必然の運命を

越へざるを得ず。余が見る所を以てすれば、彼の第一歐洲行は即ち彼の前後の生涯を分つ境界にして、彼時までは彼はなほ未だ全く周邊に克たず、大盤石の立脚地未だ全く定まらず、通常一般の牧師として一生を終るべき人なりしか、或は偉大なるエマルソンとなりて、世界を光らすものとなるべきや未だ全く渾沌の中にありしなり。然れども時は來れり、歐州に遊びて其の榮光と其の弊根とを究察せり。其の偉大なる心の人に接見したり。其の歷史的智識を明らかにしたり。歸り來りて而して後、居をコンコルドに定むるの時、彼の一生の希望も、彼の自然教の根原も、彼の樂天主義の基礎も牢固として動かすべからざるものとなり、此時よりして旭日は東天に衝き上りたり。

彼は微細に「自然」を察したり。彼の數學的の知識を以て、彼の物

理學的の智識を以て、之を各般の側より研究したり。而して凡て是等より得たる悟覺を、彼の唯心的悟覺に加へたり。彼は到底數學的の人にあらず、唯心的の直覺、他の言葉にて言へば、心靈の内觀、之れ即ち彼の思想の唯一の武器なりしなり。

シルレルは「自然」を論じて、其兩面を詳かにせんとしたり、一側面には力あり、他の側面には美あり、力を以て自然は人を脅かし、美を以て「自然」は人を樂しましむ。多くの詩人の經驗するところ、說明するところ、多くの哲學者の解說するところ、釋明するところ、此の兩側面を見ざるは稀なり。然るにエマルソンの說くところは之に異なれり。彼は自然の中に靈力靈氣あるを認めざるにあらず、然れども此の靈力靈氣は「自然」自身に存するよりも「心」に存するものなることを信ぜんとせり、「心」と「自然」との密接の關係を認めて、

各個人の事情は其人の心の外表なることを言ひ、英雄らしき業のなさるゝ處には、太陽は其の燈火の如く、蒼天は其の殿の如しと言ひ、自然は決して精神を離るゝものにあらずして、心は「自然」を我が用として保つものなることを論じ、多くの論文に於て此の理を明晰に説明したり。彼は「自然」を他の哲學者が見る如く畏るべき力ある者と思はざるなり、希臘の「自然」思想は彼の前に帽を脱ぎて去れり、彼は「心」を以て御する限は「自然」は甘美なる朋友にして、人は如何なる處にても渠と共に歩み、渠と共に語り、渠と共に樂しむことを得るを信ぜり。日月星辰は吾人を離るゝ事遠しと雖、心靈の眼一度び明らかに開かば、彼等は吾人の身邊にありて、親しく吾人を慰むるものなり。「自然」は吾人と他人にあらず、渠が他人たるは、吾人が先づ渠に對して他人たればなり。吾人が渠の甘美なる聖情を味ひ得る度に比して、渠は吾人に對する甘美なる朋友たるなり。而して詩人は、過度に之れを吸取する者にして、彼の大なるは之を以てなり。「形」は「神」の表面なり。深の上に深あり、終の後に終あり。彼は「自然」を以て「心」の前にありては透明にして無色なるものと認めたり。

彼は斯の如く「自然」と「心」との親密の關係を看破せり。而して彼は凡ての上は「純理」なるもの支配し居るを認めたり。人は一時一刻も此の純理を離れて立つこと能はざるを認めたり。之を離るゝものは必然の罰を受け、之と與なるものは必然の報を享くることを認めたり。彼は明らかに運命なるものゝ存するを認めたり。宇宙の大法は一點一畫も之を擾すことを得ざることを認めたり。此の故に信仰あり。「人は己れの爲に開かれたる途ありて、水を渡る船の如く、此

の途を進み行くなり」。（精神的法論）彼は一切の事情（サーカムスタンセス）を以て、一切の「自然」を以て、一切色界の現象を以て、無限の心靈の反映と認めたり。之を以て、彼の前に狂濤哮ゆるとも、彼の後に懸崖倒るゝとも、彼は之を以て畏怖すべき者と思はざるなり。無常流轉は彼れ之を知れり、生死遷滅は彼れ之を知れり、然れども彼は之を表面の小波動として知れり、彼は萬物の奥に不退轉の靈あるを認めて之を信じて動かず。

智者の智は何ぞ、此の不退轉の靈を感得するにあり。行者の行は何ぞ、此の不退轉の靈を實踐するにあり。言者の言は何ぞ、此の不退轉の靈を言明するにあり。情を以て之を見れば即ち「美」なり。智を以て之を見れば即ち「眞」なり。意を以て之を見れば即ち「善」なり。美や、眞や、善や、元と相異なれる原素にあらず。智や、行や、言や、素と相差へるものにあらず。哲學者や、詩人や、英雄や、素と相異なれるものにあらず。（詩人論）一切諸物は、時間と空間との配合に從ひて、種々態々なる現象となりて、或は現はれ或は消え、或は生じ或は滅すると雖、是等は眞正の事實にあらず、眞正の事實は奥妙なる「心」にあり。宇宙は事實の堆積にあらずして、「心」の實在なり。この實在の「心」、この不退轉の靈、之れ即ちユマルソンの樂天主義の本源なり。

彼は世の規律的の善惡を卑しめり。彼は政治家と稱ふる一群の人々の社會に對する破壞の愚迷を怒れり。彼は事實を重んずるの人なり、然れども表面の事實は彼の多く量るところにあらず。彼はモンターグを論ずる中に、プレートーすらも、若し其の心中に分け入るを許せば、必らず卑野なる何物かを見出す事を得べし、耳を彼の心

に屬けて、靜かに其の內なる皷動を聽け、プレトー自身にのみ覺らるゝ秘密を知るを得んかと言へり。彼は繩墨の理を以て、人心の善惡を測度するを惡めること僞善僞德を惡むが如し。彼は命と性の眞樸の外に、人をして眞の善をなさしめ、眞の德を行はしむるものなきを信するが如し。彼の問ふ所は心にあり。彼の重んずるところは性にあり。此の故に彼は天地の醇、天地の粹、宇宙の至靈を發見するを以て最大の事業と信じ、此の目的に適へるものに向つて、詩人、哲學者等の榮名を與ふ。

此の「心」のあるところ、此の「靈」の存するところに眞の「我」あり。この「我」は色界と無色界とを超越したる一の存在者(ビイング)なり。この「我」は道理と信仰とに相涉りたる存在者にして、如何なるものゝ力も之を傷害すること能はず。この「我」は無限と有限とを兼ね備へたり。有限にありては、或は損喪し或は增植することあるとも、無限にありては萬古に通じて依然たり。この「我」は即ち神の一分子にして、部分(パート)の中に全躰(ホール)を抱けるものなり。この「我」は即ち死すべからざるもの、滅すべからざるもの、之れを撓むるとも必らず直かるべし、之を折るとも必らず徑立すべし、之を碎け之を斫れ、之を燒け、之を埋めよ、必らず元の儘なるべし。この「我」と共に「運命」あり。この「我」と共に「靈界の大法」あり。この我と共に「酬報」の理あり。この我と共に「大なる自信」あり。是等の運命、靈法、酬報、自信等は、エマルソンをして世界は厭ふべきにあらずして、悅樂すべきものなることを感得せしめたる源泉にして、之を離るゝ時は、凡ての彼の哲理は、乾れたる河の砂礫の如くならんのみ。

この「我」あり、森を步めば、森わが爲に存するが如く、天を仰げ

ば天わが爲に在るが如く、この「我」に對する敬虔なる信仰は到る所として我が味方を招かざるなく、行くところとして我が朋友を引かざるはなく、妻を失ひて皷を擊ちし莊周の心は知らねども、死屍にも亦た悅樂ありと言ひたる樂天的大詩人エマルソンの思想亦た高からずや。

斯の如くエマルソンの樂天主義は全く唯心的の樂天主義なり。同じく樂天家なるフランクリンの世俗說も、同じく樂天家なるミルの唯理說も、彼の前に立ちては無味澹泊の者となるなり。コンコルドは今やエマルソンに因つて世界の名所の一となれり、余は親しく其の所謂コンコルド河なる者を見ず、然れども見えざるコンコルド河は悠久として萬古に流れ、是より後世界の有らゆる部分に向つて、人生の價直、人生の悅樂に關する生命の水を注ぎて終るところなかるべし。古るき宗敎の皮を破りたる彼は、其の樂天主義に於て、古るき宗敎の血を再び通有的の大江として流溢せしめたり。

其七　彼の實際敎

エマルソンは哲學家にあらず、然れども哲理の据付手（プロバウンダー）なり。彼は建築學者の大なるものにあらず、然れども彼は統領の尤も大なる者なり。此の故に彼は哲理に於て重きにあらず、哲理の据付けに於て重きなり。理想と實際とを結合したるところ、之れ即ちエマルソンの敎理の秀でたる成果なり。彼は其の唯心的の內觀を以て、奧妙なる哲理に逍遙すると共に、此の奧妙なる哲理を基礎として立てる堅牢なる實際敎を布けり。

彼は十九世紀の新敎が已に形式と流派の弊に堪へざることを看た

り。彼は十九世紀の學術が既に唯物唯理の弊に堪えざるを看たり。之を以て彼は甘んじて八世相承の職業と信仰とを破棄したり。人の無神論者と呼び、異教徒と罵るに任せたり。之を以て彼は知識を以て何の價直あるものともせずして嬰兒の赤誠を尊びたり。學者(スカラー)とならずして哲人(セーヂ)となれり。

カアライルは心に於て人間の好まざるなり。エマルソンは心に於て人間を愛したるなり。一は厭世の傾を以て人間を觀じ、他は樂天の情を以て人間を抱けり。カアライルは人間の聖善ならんが爲に、情を絶ち行を廢せんことを慫慂せり。エマルソンは之に反して、人間の聖善ならんが爲にまことの情に滿ち、まことの行に進むべきことを教へたり。カアライルは頑固なる保守家なり。エマルソンは優悠たる進歩家なり。與に眞摯にして、虚僞なき心を以て立てり。一は熱烈なる道義的の觀念を以て、人生の懦弱なる、假僞なる、醜惡なる性情を叱罵せり。他は獨立不羈なる素朴なる調子を以て、人生の眞面目ならざるを誡めて、本來の性に歸らしむることを努めたり、一の聲は深く、一の聲は廣し。カアライルは聖高聖大なる邊より、至醜至惡の邊までを自由自在に翺翔したり。エマルソンは至醜至惡にまで其翼を擴ぐる能はずと雖、人性(ヒューマニチー)の細微なる奥と其の外現とには行き渡れり。カアライルの眼は眞理を貫くに於て大なり、エマルソンの眼は眞理の結果を悟るに於て大なり。カアライルは瘦瘠たる蘇國の野に於て、戰ふべき爲に生れたり。エマルソンは充實せる米國の陸に於て、築くべき爲に生れたり。カアライルの聲は雷の如くに轟ろき、エマルソンの聲は風の如くに飄へる。カアライルの心は怒り、エマルソンの心は和らぐ。カアライルの情は鐵にして、エマ

ルソンの情は水なり、一は火となつて燒き、一は氣となつて蒸す。

斯くの如くエマルソンの地位はカアライルの地位に異なれり。エマルソンは築くべき爲めに生れたり。彼の米國は歷史なきの國にして、新らしき歷史を造るべきの國なり。打破すべきもの少なくして、建設すべき者多し。新らしき共和主義、新らしき個人主義は彼を迎へて彼の新らしき福音を聞かんことを要せり。彼は敎ふべき爲に、助くべき爲に、導くべき爲に、彼の國民によりて哲人の地位に上げられたり。

彼の實際敎は、若し之を細說せんには、此の小冊子の幾卷をも要すべし、然れども吾人元より一生の勞を以てエマルソンを研究する者にあらず、其の細微なる攻究は之を讀者の勞に委ぬべし、特に余は白狀す、余と雖エマルソン全集を悉く讀みたるにはあらず、之を以て余が讀者に紹介するところのものも亦た、余が掬し得たる靈泉の數滴に過ぎざるのみ。

エマルソンの實際敎に就きて、尤も注意すべき事は、其の哲理と契同したる敎理にあり。彼は心靈を重んぜり、之を以て彼は生命を重んじたり。彼は「純一」を尊べり、之を以て彼は行爲の「眞朴」を尊べり。彼は酬報の理を信じたり、之を以て彼は自ら信じて動かざるの意を信じたり。彼は靈界の法を悟りたり、之を以て彼は得喪によつて心を動かすことなく、斷として自ら立つところを守るべきを覺りたり。彼は絕對的の眞善美を奉じたり、之を以て彼は智情意を以て之れを實際にあらはすことを敎へたり。彼は純理の支配を認めたり、之れを以て彼は製作的の權力に從ふの無益なるを知れり。彼は「心」と「物」と、「法」と「式」と、「實」と「假」と、「相」と「靈」と、「內」

と「外」と、「動」と「靜」と、「言」と「行」と、凡て是等の關係を透視曉得したるの人なり。

彼は德義なるものを表面の事實によりて制するの愚かなるを認めたり。世人が德とするところの者は、彼と德（He and virtue）と相別つにあらざるやを疑へり。眞正の德は「彼」に在りて、彼を離れず。彼の內にあり、故に彼と一なり。又た彼は美を論ずる一篇の中に、美は生命を離るゝ者にあらざるを說けり。美は彼（無限）にあり、美は此（無限）にあり、彼の美と此の美と同じ、故に尊きなり。又た彼は詩人を論ずる一篇の中に、詩人は元より新らしき思想を生む者なり、然れども其の新らしきは人性を離れて新らしきにあらず、古るき人性を新に發見するに過ぎざるなりと言へり。

彼の重んずるところは人性（ヒユーマニチー）なり。然れども人性の外面の事實にあらずして內部の生命にあり。この「內部の生命」は凡ての希望の宿るところ、凡ての力の發するところ、勞力も富も工業も之と相涉るの處に於て、神聖なる者となり、永遠なる者となり、不死不朽のものとなる。彼は愛情（ラブ）を論ずるにありても、プラトニツク、ラブの原則より演繹して、高尙なる思求より發するを論じ、友情を論ずるにも、友義間にもイムモータルの者存するあるにあらずやを疑ひ、彼の心靈と我の心靈との間に生ずる友愛の情、平和と歡喜の情は、一切の宇宙と一切の思想とを皮相とするに足れりと云ひて其の唯心論を此の實際問題の上に打ち立てぬ。彼が「經驗」を論ずるも亦た然り。人誰れか自らの立てるところを知らん、人誰か自らの爲すところを知らん、吾人は影の如く、「自然」を摸索して步む者なり、「精神」は「物質」を鑄つて極めて薄くしたるものなり、然れども「精神」は自己の

證明（エビデンス）を持てる者なりと彼は言へり。彼の德義論は、彼の實際敎の中に尤も有益なるもの、吾人之を詳說するの暇なし、其の要旨を摘めば、「世界の知識に三級の達練あり、第一は摸型（シンボル）の實用に棲める階級にして、此の仲間には健康と富とが最後の善なり。第二は此の實用の點を超へて、摸型の美に棲める階級にして、詩人美術家物理家等之なり。第三は此の摸型美の點を超へて、顯示（シグニフィ）せられたる事物の美に棲める階級にして、是等は所謂賢人達士なり。第一は常識を主とし、第二は趣味を主とし、第三は靈的悟覺を主とす。」……「人若し彼の權衡を失ひて或る商業、或る快樂に耽らば、彼は好き輪好き針と言ふべきも、全く敎育せられたる人にあらず」……彼は又た德義の破るべからざるを示して曰く「自然」は必らず德義の失却を罰す。」……彼は又た詩人と德義と相合せざるべからざるを論じて、詩人は立法家なり、國法と日常の案の法とを制定する者ならざるべからずと言へり。……人を「自然」の永久なる顧問者となさしめよ、渠（自然）の完美をして、吾人の正しき方尺たらしめよ。……彼をして如何なる細小なる事にても、彼が蒔きたる者は必らず彼自ら用ひざるべからざるを知らしめよ……眞理の破却は自殺よりも寧ろ社會の健康を刺す者なり。……斯の如く彼は確固たる理の上に立ちて、迷はざる實際の敎を說けり。「法」と「行」と必らず相乖かざるを明らかにしたり。背かざるを示したり、心と物と必らず相

彼は要するにダビッド、ニコルが論じたる如くデモクラシーの新紳士なり。彼の前に彼に似たる紳士フランクリンあり、然れども理想と實際とを統合したるはエマルソンに始まれり。彼の「自信」の秘訣

は「自然」に從順なるにあり。彼の德義の最奥は「法」に默從するにあり。斯の如く彼は亞米利加の新らしき民に敎へたり。「爾自らを信ぜよ」之れ即ち爾が强大なることを得る所以、之れ即ち爾が幸福なるを得る所以、之れ即ち爾が希望に進むを得る所以、之れ即ち爾が新らしき國にありて古るき國の古るき善を取りて古るき惡を棄て、以て新理想の新共和國を建設するを得る所以、斯く彼は敎へたり。世人の爭は今日は西に、明日は東に吹く風の如し、雄大なる思想家の一國民を率ゆるは、不動不拔の基礎を以てするなり。この唯心的思想家、今やコンコルドを出て漸く世界に其の敎理を說き始めたり、彼の福音は到る所に新らしき信者を得つゝあり、憾むらくは余の如き價直なき者の手に依つて、日本は僅かに其の一部分を傳へられたるを。余は切に他のエマルソン紹介者を待つ者なり。余は傳へしと言はず、論せりと言はん。

エマルソン終

680
11192

明治二十七年四月廿一日印刷
明治二十七年四月廿四日發行

定價拾八錢

著作者　東京市京橋區彌左衛門町七番地　北村門太郎
發行者　東京市京橋區日吉町七番地　垣田純朗
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六番地　山本鐵次郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

版權所有

◉民友社出版書籍目錄◉

平田久著

十二文豪 第一卷 カーライル

肖像入
定價十八錢
郵稅四錢

○近世の大文豪トマス、カーライル一生を悉くせり近時の著述者讀んで自ら愧る所を知れ(大阪朝日)

○豪壯の筆を以て、併も同情の念を驅て、之を傳せしもの、謝すると多しと云つ可し。時世の彈劾者として生れたる彼れ飽くまで、すれたるを顯はすと面白し、而して天より遣られ、今猶朝に叫ぶ豫言者の聲を聞け。と結ぶ處底意ありげにて、時世に響くが如し(評論)

○本書は民友社より發兌すなる「十二文豪」の先陣としてあらわれたる平田久氏が著作なり著者は嘗て「伊太利建國三傑」を物して傳記評論の伎倆を示したり此篇の希世の文豪トマス、カーライルが一生の事業と其の經歷と特質とを趣味ある筆をもて叙說評論し頗る其の要を得たり案するに我が方今の社會其の何れの方面に於てもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けること久し此の一冊子若し能く幾多の懦夫をして起たしむるを得ば平田氏の功は尋常傳記家の功たるに止まらず(早稻田文學)

○平田久君の著「カーライル」は「十二文豪」の第一卷として出でたり、此篇緒をカーライル時代の形勢に起し、「泣虫トム」より「時世の彈劾者」に至るまでを詳細に畫き、更に筆を轉じてカーライルの評論に移り、その心意の變遷を追ふて委曲に之を論述す、合せて十一章、文勢流暢、艷麗の筆を執て熱火の偉人を畫く、また是れ近來の好文字、(九州日々新聞)

竹越與三郎著

十二文豪 第二卷 マコウレー

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

◎毎日新聞　竹越氏は平生尤もマコウレーに同情を表せる一人也而して世は著書の行文を評してマコウレーの文を讀むが如しとなす是深く感觸する所による乎。此筆を以て彼の傳記を叙す一度卷を開くや知らず〳〵マ氏の性情、思想、經歷、文脉、あきらかに現れ來るもの又故ある也。著者は今日の文學者中最多くマ氏に熟通する者にして又マ氏を以て目せらるゝ者也其行文一瀉千里順風に帆を上て行くが如きも無理ならざるべし

◎國會　著者は我國のマコウレーを以て自ら擬する者也宜乎十二文豪中マコウレーを撰びしや、觀察精細、文章流麗、マコウレーの精細爲象紙上に活動するを覺ゆ

◎朝野新聞　批評精彩、能く大勢に通ず、文、酷はだマコウレーに似たり

◎讀賣新聞　批評家、政治家、歷史家としてマコウレーの人物、性行、紙上に活動す。叙説の脉裁、頗簡其宜しきを得たりと云ふべし

◎都新聞　溫籍にして典雅、引證は豊富にして趣味に富み其親接の點に於て最も輕妙を極む

◎六合雜誌　批評家として歷史家としてマコウレーを論じて精通微達殆ど遺憾なし、其評説亦最も明快切實なるを覺ゆ蓋し平生蓄積する所深きにあらずんば決して此の如くなる能はざるなり、拾二文豪の傑作雄篇是より續々として出づべしと雖も此書も必ず其雄篇中の一ならんは余輩の疑はざる所なり

山路彌吉著

十二文豪 第三卷 荻生徂徠

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

此書出てより批評甚だ多し、區々たる小冊子世上の一顧を價せしは幸甚なり、其賞讃せらるゝものは曰く豪放濶大なる一奇儒は灑々流れて盡きざる文字の間に傲然蹇蹠せるの想あり（自由）曰く英靈快活津々たる滋味卷を舍く能はず（都）曰く先生一代の性行を描き出し殆んど餘蘊なく、照合點綴甚だ妙を盡くせり、（國會）曰く從來の編年的習慣を脱して四方八面より徂光と快利なる文章とは能く徂徠を寫し得て略其面目を活現せり、（日々）曰く著者の溫かなる同情と鋭き眼徠なる文學とは能く徂徠を寫し得て略其面目を活現せり、（日々）其非難せらるゝや曰く英語の活論法なり、古來の漢學者が一髪一爪のみを細微に研究したるとは大に其趣を異にせり、（日々）其非難せらるゝや曰く英語の文法を用ひたり、曰く新しき事實なし、曰く獨斷に過ぐ曰何曰く何、著者唯憨悖恐縮するのみ、世評斯の如し、文學上法庭の審判は未だ濟ます、偏に世上君子の一讀を得んことを欲す、輿論は即ち最高審庭なれば也

宮崎八百吉著

十二文豪 第四卷 チルヅチルス

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

本書の價値を知らんと欲せば、左の批評を讀め、最も繪畫的なる筆法を以て精彩に叙述したれば讀者をして讀去るの中恍兀中湖畔詩人及び其閑居、家庭の如きは作者が最も繪畫的なる筆法を以て精彩に叙述したれば讀者をして讀去るの中恍々然として彼のチルヅチルスと共に相提携し湖國のほとり山影水聲に起臥して樵唱牧歌を聞き樹陰石邊に優遊して歸雲飛鳥を眺め心靜に胸寛に自然造化の幽妙に化せられんとするの感あらしむ、（讀賣新聞）

一章中讀て尤面白かりしは湖畔詩人及び其詩とチルヅチルス及び陶淵明の二章なり殊に後章の如きは支那に於ける田園詩人とチ氏とを對照批評せしものにして流俗の評論外一歩を拔て兩者大に其類を同ふすと雖其依りて來る性情、生活、天職に於て全然眞反對に立てるを論するの一段蓋し幾何か自然界、現實界の消息を知了するものに非ざれば斯る精細なる議論あるへからず蓋し湖處子にして始めて是論ありと言ふべし、（毎日新聞）

「チルヅチルス極めて面白し全一篇盡く無韻の詩なり」（護教）

一字一句詩趣を帶ぶ、同情あり造詣深きに爲了能く斯の如くならん哉（福音新報）

高木伊作著

十二文豪第五卷

ゲーテ

肖像入

定價十八錢

郵稅四錢

◎護教　異文の國の人を寫すは極めて難きものあり、而して君之を文學に行る綽々餘地あるが如し。是豈百鍛千錬の果にあらざらんや。此裏苦心、身之れを驗する者に非ずんば知る能はざる也

◎東京日々新聞　著者のゲーテを畫くや幼年少年壯年老年の四期に分ち其性行其氣品其學問其事業を叙し盡して餘蘊を殘さずゲーテ氏の面目躍如として一篇の中にあり文章亦甚だ精練にして著者の苦心を見る荷くも文學に志あるもの此大詩人に私淑して遺餘を搜るべきなり

十二文豪爾後出版の目錄左の如し

『新井白石』……山路彌吉
『賴山陽』……德富猪一郎
『近松巢林子』……塚越芳太郎
『トルストイ』……德富健次郎
『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎
『ユーゴー』……人見一太郎

第一

國民小說

定價十五錢

郵稅四錢

目錄

◎一口剣　辛田露伴
◎細君　春の屋主人
◎舞姫　鴎外漁史
◎艮夜叉　饗庭篁村
◎蝶　美妙齋主人
◎蝴　楠木轉
◎流　學海居士
◎新編破魔弓　北邱散士
◎拈華微笑　南翠山外史
◎大東號航海日記　紅葉山人
思軒居士譯

第二

國民小說

定價十五錢

郵稅六錢

目錄

◎伊太利の囚人　森田思軒譯
◎夢現境　嵯峨廼舍主人
◎空　同
◎罔　南翠外史
◎雨蟬　二葉亭四迷譯
◎あひゞき　鷗外漁史
◎航海小說　羅武烈號　驚濤生譯
◎懺悔　賣薪生譯
◎曇美　天人
◎石武者　白波
◎落屋　湖水
◎空緣　西處隱者
◎惡因震　鷗邱史
◎地獄　同外子
◎うきよの波　同漁士

第三

國民小說

定價十五錢

郵稅四錢

目錄

◎霜用達會　柱
◎吾亡社妻月　響
◎明月語　思軒居士
◎老人物　宮崎三郎
◎巨人石　抱月庵主人
麗愛一水山生
◎村落小記　櫻庭篁村
◎宿魂鏡　鷗外
◎夏の夜がたり　透谷
◎雛の丈夫嫁夢　敬處
◎女の夢　若松賤子
◎迷　鷗外漁史

680

第四 國民小說

目錄

●千人會　思軒居士
●何處に？　嵯峨の屋主人
●羅の菊　小中村義象
●七株の松　落合直文
●末期の言　警濤生
●不二の高根　麗水生
●懺悔　秋風閣主人
●家妻　湖處子
●白薔薇　書湖仙史譯
●夏休　嵯峨の屋主人
●田家新年　麗水生
●物語の物語　秋山生譯
●千島大尉　弦齋居士
●盲新婦　塊南居士

定價十五錢
郵稅六錢

福地源一郎著

懷往事談

附 新聞紙實歷

定價二十錢
郵稅四錢

左は居士が自序なり。餘りに面白ければ、茲に掲げて先づ讀者に告るなり。蓋し「懷往事談」は實に居士が「幕府衰亡論」と相表裏して始めて完璧を成すもの、故に衰亡論の莊重典雅、譬へば人の正傳の如きを讀みたる者は、亦必ず瀟洒俊逸、人の逸事の如き懷往談を讀まざる可からず、然らずんば十二分中、遂に七分の趣味だも得る能はざる也。「新聞紙實歷」に至ては更に言を待たず、能く自序の文字に看ば、則ち能く其性質を知らむ。

櫻痴居士漸く老たり、齡已に半百を踰えて、心力その半を鎖磨し、既往を回憶する毎に、忱として夢の如く、幾と歷史上の想を成せり。憶ふに居士少年にして妄りに青雲の望を懷き、笈を負ひて東遊し、十九にして禍を幕府に釋き、大に庸ひられん事を冀ひて志を得ず、東西に奔走せる十年、空しく悲慘劇場の人たりき。既にして廟堂の諸公に知られて、砌りに鵷班に列したるも、才短く志迂にして其用たるに適せず、退きて筆を新聞紙に執ること十有餘年の久しきに至れり。然れども一事の成す所なくして終に論壇を下りて、讒に身を以て文苑の中に免かる、而して其跡を顧みれば、居士三十餘年間の境界は、悉皆過失の實驗にして、之を言ふは即ち懺悔たるに過ぎざるのみ。蘇峰德富君、余を訪ふ毎に、此懺悔を聞くを喜び、余に請ひて之を筆せしめ、回を重ね章を積みて、懷往事談及び新聞紙實歷の二編を得るに至り、更に之を刊行せんと謀る、憶々、何ぞ君が此新を競ひ奇を爭ふの今日に於て、居士が懺悔談を喜ぶ是の如くなる。居士已に當世に志なし、舊を談じ往を語りて、其過失を懺悔するも、老境の一樂なり、復何を嫌て之を辭せんや、乃ち稿本を訂正して、印刷に附し、併せて舊作を錄して云く

平生心力半銷磨、無限烟雲眼底過、
昨夜月明今夜雨、來宵情事更如何、

吉田松陰

德富猪一郎著

定價金五拾錢
郵稅金六錢

松陰の肖像○松陰神社、松陰墳墓の圖（米僊氏畫）○佐久間象山松陰を送る詩。松陰東北日記。松陰より横井小楠に與ふる書簡。及び長州の先輩村田清風の詩。孰れも其眞

蹟を石版摺にして附載す

本書が如何に勢力を有し、如何に價値を具へ、又如何に今社會を傾動しつゝあるかは、左の最も精確なる批評に由りて判知するを得べし。吾社豈徒らに自ら贊せんや。

◎題して『吉田松陰』と云ふと雖も、實は維新革命の一部分を寫したる活歷史なり文章の簡淨にして而も斬新の言顯（ニユエキスプレシヨン）に富む、其の人物を描くの巧妙なる韓退之マコレーを九原より喚起して松陰傳を作らしむるも是迄ならん、蓋し氏の名をして日本の大家（クラシツク）として世に不朽ならしむるは此の『吉田松陰』ならん（經濟雜誌）

◎世間若し吾人に向かひて讀みて面白きと同時に識見卓拔なる書を近著中に就いて示せといはゞ吾人はまづ此の書を推撰すべし、蘇峰氏は此の普く世間を悅ばする筆を有する點に於て實にマコーレー卿に似たる所あり、よしや其の文章家としての資格はマコーレー卿に尙數步を讓る所あるも其の識見に於ては彼の卿の下にあらず、此の書題して『吉田松陰』といふと雖も著者みづからいへる如く優に『維新革命前史論』と名け得べし一卷三百餘頁の冊子宛然として我が近世史に於ける最も驚歎すべき、最も感奮すべき、最も慷慨すべき又、最も翫味すべき種々の出來事を、殆ど演劇的に活畫して來たり讀者をして卷を措くを難んぜしむ、忽にして維新前に於ける全日本の政局、忽にして松下村塾の光景、忽にして佐久間象山、忽にして水野越前、譬へば健腕の畫匠が椽大の筆を揮つて咄嗟に山川艸木花鳥人獸を描畫し來たるが如し而して著者が得意の評論は巧に其間の理脈を繫ぎて吾人をして個人と時勢との關係、國家と其の周圍との關係、其の他幾多の聯絡を會得せしむ、今や世間翕然として回顧す、然れども彼等の多數は尙僅に過去の個人を考察するに汲々たり著者は更に一歩を進め個人を考察すると同時に時勢を考察す、着眼の國家大なる所此の著者たる所以なり（早稻田文學）

◎……此書、蘇峰の手に成る。其文章の明淨流麗、其の批評の簡潔峭拔、其眼孔の鋭利靈活、其時勢を寫すの明透深刻なる、其の人物を畫くの高妙輕捷なる、實に近時の一大佳篇と爲す。東湖を指して『國家經綸の大綱を提げ、社會動亂の趨勢を握るの辣快雄敏なる、自ら獨歩の地あり』と言ふが如き、象山を指して『人は自ら立たんとなす所に立つを得ば彼は實に百尺樓上に立つものなり』と言ふが如き小楠を指して『横井一生の工夫、總合大觀に在り』と言ふが如き、所謂『風雲在口、鬼域生心』の妙あり松陰を寫すや、『革命の健兒』と呼び、『天成の鼓吹者』と呼び、『殉國殉道の達人』と呼び、『眞誠の人』と呼び、『一箇の革命的急先鋒』と呼ぶが如き、所謂字字精金、句句美玉、東坡、聖歎をして再生せしむるも、斷じて一字を易ふるを能はず……（中央新聞、千山萬水樓主人）

◎德富蘇峰、嘗て自著『人物管見』に序して曰く、如何にして人間を知る、直覺の心意、精到深射の眼識、寛裕同感の胸懷、及び謹嚴周匝なる事實の摭拾、濶大包括なる四圍の觀察の如きは、最も必要なる資格に相違なき也と。今や此等の資格を理想として、而も用意非凡、精勤亦非凡なる彼は、文學者としての彼に尤も適當せる人物評傳の一大著作を、初めて吉田松陰の上に試みたり。

書を開き亦閉ぢて、先づ三つの注意すべき事實を看取す。曰く、新島先生の紀念として斯の冊子を獻ぐ。余亦た海舟翁

の門下に教を受く。彼が殉難者としての血を濺ぎしより三十餘年、維新の大業半は荒廢し、更に第二の維新を要するの時節は迫りぬ、第二の吉田松陰を要する時節は來りぬ、彼の孤墳は今既に動きつゝあるを見ずや。此の三片辭、鼎立して彼が立場を支ふ。以て、著者が、精神を察知すべし。卷中の副主人公、十を以て算す。一々精練の評皆な各箇の小傳論たり。讀過して殆んど應接に遑まあらざらしむ。就中、小楠と象山。越州と樂翁との双關評の如きは、品定百回に動かす。古人をして千歲の下に安んぜしむ。嗚呼、何等の觀識ぞや。……一卷一人物の評傳として、近代、世に出でたる創作物に未だ此書の如く、評眼透明、品藻徹底せしものを見ず。吾人は、敬重して之を迎へ、暫らく其小瑕瑾を言はず。（評論）

◎人物の評論に於て最も長ぜりと稱せらるゝ德富氏の人物評論中未だ此書の如きものを見ざるなり。此書は彼れ自ら吹聽する如く題して『吉田松陰』と云ふと雖も其の實は維新革命史論なり先づ德川幕府は何故に且つ如何にして顚覆したる乎を說き、外交の問題突如として起り幕府顚覆の機運頗る熟し開國鎖港の論沸騰して國情痛く紛擾せる時に於ける種々の政略種々の人物種々の事業大概其中に網羅列擧せざるなく夫より時勢、境遇、血統が遂に吉田松陰を作りたるを說き進んで家庭に於ける松陰、天下の士としての松陰、革命家としての松陰教育家としての松陰等を描く頗る精細巧妙一たひ之を拔けば容易に卷を放つに忍びず吾人は德富氏の人物評論中實に第一の傑作として之を世人に紹介するを辭せざるなり（報知新聞）

◎維新革命の事に最も偉大の名ある吉田松陰先生は德富蘇峯氏の筆に依りて世に公にせられたり蘇峯氏の人物を畫く巧みなる既に世論の認むる處荒夫㒒童も氏の筆にかゝる時は其行爲又見るに足るべく人をして覺えず快哉と呼ばしむに至る是れ氏が烱眼卓見妙に人の言ひ能はざる處を言ひ人の記す能はざる處を記すにあり松陰は實に一代の豪傑なり之れが實歷を叙する者又氏の如き文壇の雄將たらざるべからず然れ共氏は此書に於ては松陰の實歷を記すに務むるは重に維新革命史の事に筆を向けたり故を以て此書吉田松陰の全傳を叙するよりは最も剴切に痛快に維新革命史を叙せり方今文學者實に歷史家其人に乏しく從て又其書少なし此寂寞たる文學界斯る書冊の發行を見る吾輩の喜んで之れを讀者に紹介する所以彼の櫻痴居士の筆になる幕府衰亡論を一讀したる者は亦必ず此書をも一讀せざるべからず（毎日新聞）

平民叢書 第一卷

十九世紀之大勢

定價十二錢

郵稅二錢

●十九世紀前紀●十八世紀の地位○革命の時代○殖產界の革命○思想界の革命○道德的革命○佛國革命の大危機○第十九世紀○十九世紀の物質的進步○物質的進步と文明○英國の物質的進步○物質的進步と思想界○物質的進步の功德果して如何○物質的進步と貧富の懸隔○平民的大勢○政治上に於ける平民主義○佛國革命の反動○希望の時代

◎早稻田文學の評「平民叢書」の第一卷なり德富猪一郎氏其の卷頭に題して曰はく明治二十六年の今日尙內地雜居に向

つて鬼胎を懷くものあり唯支丹、邪宗門の禁を唱ふるものあり唯命是順主義を說き國家專制を唯一の治道と說く者あり物質的には二十世紀に片脚を踏入れんとしながら精神的には中世の封建時代に却奔せんとする者あり彼等は興ふるを欲せずまた求むるを欲せず彼等は精神的斷食者なり云々と、民友社の「平民叢書」は實に此の精神的斷食者、むしろ一種の精神病者を療治せんと本願によりて調合せられたる簡便藥劑なり本書の如きは眇然たる小冊子なれども也て彼等に十九世紀の精神の何物なるかを知らしむるに足る、敍說評論する所廣く政治、社交、經濟、文學等に涉る其の關係頗る普通なれば何人も一讀して多少の益を與へを得べし

◎經濟雜誌の評　トマス、カーライルの十九世紀論に反對し十九世紀に於て文學科學工藝發明及び一般の文明の進歩せるを發明評論し結局十八世紀ほ十九世紀の段階たり十九世紀は二十世紀の相續者たる以上は來世紀は最も好望ある世紀なりと論斷し文章流暢の小冊なりと雖も論は乃ち大なり、

◎郵便報知新聞の評　是平民叢書の先鋒として現はれたる者可憐可愛の袖珍書なり重に彼のハリソン氏の十八世紀論及び十九世紀論を參酌したる者、男子世に在るや先づ大勢を知らざる可らず十八世紀は如何、十九世紀は如何抑も亦將に來らんとする二十世紀は如何此の書皆な之を解釋せり

平民叢書 第二卷

世界經濟上之變動

定價十二錢
郵稅二錢

第一章輓近經濟界の動亂○第二章生產、分配の新機關及其影響○第三章物價下落及其原因○第四章金銀比價の變動○第五章干涉保護政策と經濟的動亂○第六章現時歐羅巴諸國の商業政畧○第七章經濟的變動の社會上に於ける影響○第八章勞働者の不平○第九章結論

◎評論の評　「世界經濟上の大勢」は、ウエルス氏が「近時の經濟的變動」に據りたり。文章着實にして、極めて有益の書を成せり。銀貨下落。保護政策と經濟的動亂、勞働者の不平等を始めとし、近世の經濟上の大問題を大抵簡易に解き明かしたり。其緒言に至り、輓近の經濟的變動は、文明の進歩にして、退歩にあらず、人間社會の改善にして、墮落にあらずと言ふも、亦頗ぶる可なり。……

平民叢書 第三卷

國家と政府

定價十二錢
郵稅二錢

緒論●第一編國家○第一章國家の概念○第二章國家の權力○第三章國家の目的○第四章國家の起原○第五章國家の種類●第二編國家の發達○第一章英國憲法制定史○第二章平民的國家●第三編政府○第一章政府の種類○第二章英米獨佛の政府●結論

平民叢書 第四卷

教育と遺傳

定價十二錢
郵稅二錢

目次○緒論●第一章、道德本能と教育（一）生理的誘告、（二）心理的誘告、（三）德育と誘告●第二章、道德本能の發起（一）道德力　意志、（二）道德の目的　義務、（三）道德的疾病（四）道德本能の發達に於ける教育と遺傳●第三章、鈍育、（一）鈍育の必要、（二）腦の逼壓、（三）手藝の練習●第四章、智育、（一）智育の地位及目的、（二）智育の方法●第五章、學校教育、（一）專一的智育の危險、（二）倫理學の教授、（三）道德的訓練、（四）市民教育、（五）審美的教育、（六）科學的教育、（七）競爭試驗の利害●第六章、女子教育と遺傳●第七章、作物轉換と教育●第八章、教育の極致、無限の進化●教育沿革史

◎『國家と政府』　これもまた重寶なる小冊子なり國家の起原種類、國家の發達即ち諸大國の憲法制定史、政鈍の種類さへも簡便に說明したり（早稻田文學）

◎『教育と遺傳』　第一篇に次ぎて興味の普通なるものなり就中守舊になづめる人々の忍びても一讀すべきものなり、教育法の要旨いみじく說明せられたり、德育、智育、鈍育の相互ひの關係を說けるにあたり子弟ある人々に取りては目前の用あり卷末に教育沿革史を添へたる用意よろこぶべし（仝上）

◎『教育と遺傳』　平民叢書の第三卷及び第四卷として發刊せり、何れも例の流暢明晰なる文を以て說きたり、此等の政治問題の簡明なる解釋として朋友間に大言議論するを得べき、重寶なる書物なり（經濟雜誌）

◎國家と政府の問題に就ては、政治家然として平民叢書として梓せられたるもの英米佛獨の憲法制定史及其政鈍の比較の如きは頗る參考

◎教育と遺傳　平民叢書の第四卷に欠くべからざる袖珍本なり、此書讀み去れば、即ち此

考に資すべし教育と遺傳は專ら德育を揭げて而して遺傳と云ふことを發揮するに努めたり其の論該博にして縱橫の概あり（東京日々）

◎『教育と遺傳』近世の教育論者中、一方にはヘルバルトの心理說を應用し、一方には進化說に訴へて、廣く人類の運命の上より教育を論ずたる者は、佛國の學士ギュヨウ氏を以て巨擘とす。ギュヨウ氏の論說を更に擴充して國家の命運と教育との關係を論じたる者を、是亦佛國の學士フォイレー氏を推さゞるを得ず。此の二氏は實に近時に於ける一種の意見を出たしたる者にして、滔々たる一世の思想家皆競て近時理學に重きを置くに當り、精神遺傳の元則に基き、毅然として古典學の必要を主張せり。殊にフォイレー氏の如きは、熱心に之を唱へたり。ギュヨウ氏は此點に於ては、彼に及ばずと雖、其德育を論ずる處の如きは、其明暢なること、決して之に劣るを見ず。今民友社が主として之を譯して世に示したるは、慧眼と云ふべし、殊に其譯文の如きも、通暢明快、寸毫の遺憾なし。之を教育の學として講究する程の者にはあらざるも、教育上の論文としては、大に價値ある者なり（教育時論）

平民叢書 第五卷 文明之弊及其救治 定價十二錢 郵稅二錢

文明の起原及歸趣◎野蠻と文明○健全なる生活○人間の墮落○第二の樂園●文明と科學◎現時の科學○將來の科學○文明と道德等

○東京日々新聞の評に曰く　文明の弊及其救治は英人エドワードカーペンター氏の著を譯したるものにて冒頭突如として文明誇るべきか野蠻羨むべき乎と叫び先づ讀者を疑渦に投ず更に一轉語を下し文明は一種の病也と喝破して滔々と文明の弊を論じ國家及警察なるものは終に强者の權を保證して正義の觀を毀ばしめんが爲に發明されぬ警察制度は社會が强制的制度を要する程に墮落せることを現はすと云ひ野蠻人の生活は文明人の生活よりも健全なり而して此文明の病を拯ふは只天然に歸るにありと斷じ次に文明之科學を論じ鐵槌を天上より落し來りて現時科學の法則は總て假定に過ぎず云ひ放せり……此渺々たる小冊子光燄萬丈の概あり間々時弊に適切なる警句あり

平民叢書 第六卷 現時之社會主義 定價十二錢 郵稅二錢

目次●第一章、社會の種類●第二章、十九世紀以前の社會主義○(一)猶太及基督教の社會主義○(二)トマス、モールなりルーソーまで○(三)フーリールの共同組合制○(四)ルイ、ブランの勞働組織○(五)ミルの社會主義●第四章、新社會主義の勃興○(一)獨逸社會黨の始祖フェルディナンド、ラサーレ○(二)公有制度○(三)勞働者保護○(四)官設事業●第七章、社會主義的立法○(三)近の運動○(四)替土亞虛無黨●第五章、新エートピヤ○(一)非ユートピヤ○(二)社會主義の有樣○(三)社會黨最的社會主義○(一)近時社會問題の著書漸く我邦に出づるに當りて先づ現時社會主義の有樣を公平に叙出したるは是○每日新聞の評に曰—近時社會問題の起るは是れ爭ひ難き命運なりされは我邦に於ても此問題の沸騰する亦遠さ著なり蓋し文明の波及する所早晚社會問題の過去か尋れ又現時の有樣を考究したるもの平民叢書の第六卷としてにあらず本書は其際に於ての用意の爲め社會主義の民友社より發行したるものなり

平民叢書 書號外 銀貨之過去現在未來 定價十二錢 郵稅二錢

目次●第一章、單複本位貨幣制度○本位貨幣の便益。本位貨幣制度の現況。單複本位論の激爭。兩論旨將來の趨勢●第二章、銀價問題○其一、銀價下落の原因。銀價の大變動。下落に關する人爲の原因。自然の原因。下落の運命は永久の結果なり。○其二、救銀政策＝北米合衆國の銀問題。米國に於ける銀黨の躍起。救銀政策第一＝プラント案。救銀政策第二＝シャーマン法。救銀政策第三＝一八九二年の萬國貨幣會議●第三章、印度貨幣制度の改革及其影響。銀貨國としての印度。財政の紊亂。商業上の困難。改革論の發生。論旨及運動。改革の勸行。其影響。日印兩國間銀の輸出入●第四章、シャーマン法の廢止。米國上院と廢止案。廢止後の結果。折衷論の妄辨。日米間貿易上の反響●第五章、我國經濟社會の反響。外國貿易の盛況。物價騰貴。正貨增加の影響。生產振起。財政上の關係●第六章、我國現行の貨幣制度。

新貨鑄造の議。伊藤博文氏の金單本位論。新貨鑄造令。法律上の兩本位國實際上の銀單本位國となりし由來。再金單本位を採用するの可否。第五議會と貨幣問題。

○自由新聞の評に曰く　現下の問題なるを以て平民叢書の號外として世に出づ著者は伊藤鏢三郎氏にして簡淨の筆能く銀貨問題の終始を叙す今日の銀貨問題を喃々する者少くとも此書に記するだけの事を知らば又當さに迷岐茫洋の嘆なきを得べきなり

○毎日新聞の評に曰く　銀貨の過去現在未來平民叢書の號外として發行したるものなり目下世界に於て大問題特に東洋唯一の銀貨自由鑄造國たる我國人の須知を要する銀貨問題に就て過去現在を觀察し將來を洞見したる著書にして議論確然叙事整然苟も此問題に志を傾くるものは速に一讀せざる可からず

平民叢書第七卷

經濟と道德

定價十二錢
郵稅二錢

目次●經濟學の範圍○第一經濟學の目的○第二經濟と道德○第三經濟と宗教○第四經濟と政治○第五經濟と法律●經濟上、道德上より奢侈を論ず○第一奢侈の定義○第二奢侈心の解剖○第三奢侈は怨す可きか○第四奢侈と精神的發達○第五奢侈と機械の使用○第六奢侈と個人の幸福○第七奢侈と富國○第八奢侈と公正○第九公共的奢侈○第十奢侈と政鉢○第十一經濟と歷史

眞理の評に曰く　資本の大なると製產の夥しきを以てのみ生民の幸福を卜し得べくんば第十九世紀の如き文明世界はげに極樂と云ふべからんも然るに昔時迫想に餘念なきものゝ古今東西其例に乏しからざるは何ぞや蓋し貨財の如何に分配せられ又如何に消費せらるゝやは社會の幸福に至大の影響を及ぼすものなることを思へば是れ亦全く謂はれなきことにもあらず吾人は節儉に依りての外社會の眞個の富有も之より生ずる所の幸福を享くるを得ざることを忘るべからず「經濟と道德」は詳に奢侈の流弊を論じて餘蘊なし余今夏「同志社文學」に於て聊か言の全一の問題に及べるあり今此書を得て恰も同志に接するの感あり敢て一讀を大方の君子に勸む

平民叢書第八卷

歷史攻究法

定價十二錢
郵稅二錢

史論大に起り、歷史攻究また漸く盛ならんとす、此時に當りて、此の書の出づるもの、豈偶然ならんや、本書はもとこれ、かの有名なる露國小說家トルストイ伯の著はす所、全篇十有六章、以て、文明史家、萬國史家、國民歷史家、主傳的歷史家等、凡て從來の歷史家が、相踵で陷り來れる失敗の原因を探求し、彼等が採用せる研究法の誤謬を論明し、更らに進んで、當さに採るべき歷史新攻究法の大作の方針を示せるものにして、其の新見奇識別に一生面を開きたるは專門史家をして、後に瞠若せしむるものなくんばあらず。吾人が殊に之を今日に紹介する所以の微志は、請ふ一讀して之を知れ、

附錄『史學と文學』は、佛國の文家テーン氏が所說の梗概にして、其の所論の超卓秀傑なる、既に天下の公評也

平民叢書第九卷

哲學變遷史

定價十二錢
郵稅二錢

系統尤も古く範圍最も大なる學術界の帝王は哲學是也學術界を貫通する脉管たり思想界を縱橫する經緯線たり或意味に於て十九世紀文明の血液たるは哲學也。古今東西大家名家の學說紛々として雨の如く哲學の海茫々として津涯を知らざるを歎する者に尤も欠く可からざるは哲學史也哲學變遷史也、哲學變遷史は哲學の串繩也哲學の系圖家譜也一目瞭然たる側面圖也。哲學尤も知らざる可からず、哲學史亦尤も知らざる可からず。好良の哲學史は哲學の海の舟筏也。平民叢書第九卷は此尤も必要なる需に應ぜむが爲め最も斬新且最も精明上々レスより下今日の哲學者に到るまでの哲學思想の變遷を論盡し其變遷の次第、進化の順序、相互の關係を明々白々に叙論し加ふるに我邦の哲學家中尤も識見透徹蘊蓄深奧の譽ある某學士の丁寧周密なる校閲を經たるものなれば其精確斬新蓋し尋常哲學史と大に軌を異にする者あらむ。江湖の諸君一本を購ふて其然るを知られよ。

平民叢書外號

責任內閣

定價十錢
郵稅二錢

時局の必要は我社をして此の一卷を平民叢書に添へしめたり。則ち時局の必要に應ぜんが爲めに成るものと雖、政治學の原理に據り、政治史の事實に基きて嚴正なる論斷を下したるの一事は爰に公言するを憚らず。敢て江湖の一讀を請ふもまた謂はれなしとせんや。

入見一太郎著

國民的大問題

定價二十錢
郵稅四錢

●經濟雜誌の評は曰く　著者は民友社の年少卓見家入見一太郎君なり、君の識見を以て目下の急務たる條約改正問題を論ずる文辭通俗なりと雖も、讀んで憤慨の氣自から其中に籠れるを知るべし、況んや我國の外國條約の淵源する所を調べ、文書事實に就いて考證したる有益の書なるをや、但君の論を實地に行はんとは、政府否一般日本人民の手腕と度胸にあるのみ、●自由新聞の評に曰く　條約改正は我が政界に於ける重大問題の第一なり國民の之を研究する宜しく其の首より尾に透徹するを要す何となれば苟くも透徹ならずんば偏見固執に陷りて悟らざるの恐あればなり、此篇は曾て國民之友に連載したる條約改正論を敷衍し增加し追加したる者にして該問題の歷史及び改正の準備機會を論じ治外法權撤去關稅改正內地雜居土地所有權等を論じ終に臨で改正の方策を論ぜり、此問題を研究するに於て好參考書と云ふべし而して卷末に付したる土耳古のカピチュラションに就て所感を記すの一篇の如き著書の所謂血性を攄へたるもの讀去て感慨止む能はざらしむるものなり●東京日々新聞の評に曰く　全篇我が現行條約の利害得失を詳叙す、就中治外法權の撤去、關稅の改正、內地雜居、土地所有權等の事を論ずる明晰にして又た痛快、心を外政に用ゆるものは一讀以て自己の意見と對照せば蓋し稗益する所尠なからざるべし、

德富猪一郎著

國民叢書

靜思餘錄

定價十五錢
郵稅二錢

◎インスピレーションの如き希望の如き餘裕の如き平民の道德の如き雅量の如き快樂の如き觀察の如き其他の雄篇と共に光彩爛たり山あり河あり時に千里の茫洋あり時に漠々の曠野あり或は花笑ひ鳥歌ふの處或は雲飛び水流るゝの邊時に詩の如く時に哲理の如く時に豫言の如く時に平民の談話の如き者これ先生が所謂詩人にあらざる詩哲學者にあらざる哲學豫言者にあらざる豫言なるものか讀誦の間沈思默想すれば中々に味あるが如し覺者も以て深く悟るべし迷者は以て覺に入らん苟しくも着實なる精神的修養を希望するものは須らく此種の書を讀まざるべからず(青山評論)◎『靜思餘錄』……げに此の眇たる小冊子は德富氏が人生諸般の現象に對する意見の精英を網羅し得たり其の「希望」を說き「非厭世」を說き「インスピレーション」を論じ「天地悠々」を唱へ「快樂」「觀察」を語るや時に哲理の幽玄に接し時に宗教の神聖に觸る或は古希臘の哲理を談ずるものゝ如く或は希望の教務を宣ぶるものゝ如し而して其所謂詩人にあらざるの詩人の詩は「故鄕」「故鄕春色今奈何」「老人と小兒」等の諸篇をもて最とすべきか著者が文章の特質は明晰透徹を旨とするが爲にや往々講話の體に流れ餘韻に乏しきこと毎にありと雖も而も其の引喩譬喩の豐富なる、其の理想のエマソンに似て淸く高き優に此等諸種の文章をして散文の詩中に位せしむるに足る……著者は其の理想動もすればコンコルドの君子の幽遠に出入しさきに飄逸として詩人の境界に遊ぶものから其の最も明著なる傾向は殆ど純乎たるアングロ、サキソンにして酷だ其の最初の師マコレーに似たり即ち現實を重じ實踐を尙びあくまでもPositiveあくまでもPracticalなり此の故に世間を離れたる空理を惡み當世に實効ある常識をよろこぶ之れを要するに庶民的(平民的)といふ系脈は著者が理想にも文辭にも通徹せり其の說教の講話的なるも其の旨の庶民的なればなるべく其の當世を主とするもまた民の暢達を其の理想の根底としたればならん著者已に庶民の利福を主とす其の論ずる所未だ悉く新奇高遠なりといふ能はざれどおしなべて公平健正なり吾人は著者が此の書の卷頭に「不健全なる思想は決して之れ無きを期す」といへるその實に人を欺かざるべきを保す(早稻田文學)

德富猪一郎著

國民叢書第五册

文學斷片

紙數二百八十五頁
定價十五錢
郵稅四錢

所謂純文學は文學者をして之を作らしめよ。但た文學を論じ文學者を論じ社會を觀じ天然を感ずるに至ては獨り之を文學者に委ぬべからず。著者は文學者に非らず。故に本書に所謂純文學なし。然れども其文學を愛好し、且文學者に望むの餘、迸て論說となり、人世を觀し天然に感ずるの餘溢れて小品となり、彫琢を假らず、巧思を求めず、思ふて言はざる

はなく、言つて透徹ならざるはなく、其腸に於て其眼に於て、其手に於て（淺薄にせよ、高尚にせよ）一點不健全、不透明の分子なく、思想意見すべて純粹敦厚に歸するは、自から本書の特質なりとす。本書載する處、明治二十年より昨年に至る、短篇長章、凡そ四十餘篇とす。文字の未に於ては暫く言はず、其見る所感する所、果して正鵠を得るに庶幾からざるや否や、願くは江湖諸君子の眞判を俟つ。

德富健次郎著

近世歐米 歷史之片影

定價二十錢
郵稅四錢

最暗黑之東京

定價十三錢
郵稅四錢

◎現今有名なる政治家文學家軍人富豪其他の傑人の喜ぶべく愕くべき逸事逸話を最も正確なる出處によりて極めて風趣あり筆致を以て撰擇纂輯したるもの以て永晝長夜の好伴侶たるべし（國會新聞）◎小德富纂する處の歷史之片影なるもの將軍、文學者、教育家、大政治家躍如として紙上に現出す零々一冊子と雖も其趣味は頗る富贍なり殊に『世界の末日』の如きは最も面白く讀まれたり（自由新聞）◎歷史之片影（民友社發兌）相變らず面白く作られたり何遍讀んでも面白く書かれたり玉の如き文字もて面白く譯されたり（都新聞）◎直に文學に關したるはアルフォンス、ドオデーの略傳逸事幷びに寫實派の文學家ゾラの傳などなれどもスタロッヂの事を記したる幷びに世界の末日といふ題にて或科學者が物したる想像的世界最終日の記事の如き多少文學に密接なる關係もありて其の他尚八條の記事ありこれまた消夏旅中の好伴侶（早稻田文學）◎此世紀に名を轟かしたる政治家商業家文學者抔の傳あり面白さうなるものを集めて冊子となしたるものなり（時事新報）◎塵雲講都を蔽ふて炎熱やくが如きの時友なし千鳥の形却てゆかしく片破れ月の影却て幽なるを覺ては一腕の澁茶に滿窓の風を包みて靜かに歷史の片影を眺むる時には避暑三昧の樂にまさるものある可し（青山評論）

國民新聞紙上既に世の喝采を博したるもの。今や其の粹を抜き、且つ新たに材料を得て增加するもの殆んど過半、以て斯の冊子と爲す、

◎早稻田文學の評に曰く『最暗黑之東京』　此面白げなる名稱の而して讀みて實に面白き一書は今春長らく『國民新聞』紙上に現れて江湖の喝采を博せしもの今度更に增加して出版せるなり著者乾坤一布衣實の名は松原吉五郎氏嘗て身を一貧兒に寞し彼等と伍する事五百有餘日業を改むる事三十日仔細に細民の狀態を觀察し下層社會の內情を探りてこれを直筆せしなり勞働社會の種類、等級、交際、合詞、生計、住處、家屋、家具、食物等より飲食店、居酒屋の內幕、糶市、朝市、夜店、古物買の實情、無宿坊、蓄妻者、獨身者の境涯に至る總て三十五項悉く實地の觀察より來れるが故に讀み去り讀み來たれば宛然實況を見るが如き思あり最下層の情況を知らんとするものゝ好參考、かゝる新方面に新精神の眼を注がんもの今の新聞記者中『國民新聞』記者を除いて殆ど稀なり或はいふ乾坤一布衣は二十三階堂主人也と

德富健次郎纂譯
○グラツドストン
（肖像入）定價貳拾錢 郵稅四錢

德富健次郎纂譯
○武雷土
（肖像入）定價拾五錢 郵稅四錢

德富健次郎纂譯
○格武電
（肖像入）定價貳拾錢 郵稅四錢

竹越與三郎纂譯
○格朗宏
（肖像入）定價貳拾錢 郵稅四錢

○伊太利建國三傑　平田久著　（肖像入）　定價貳拾錢　郵税四

○幕府衰亡論　福地源一郎著　定價三拾五錢　郵税六

○新日本史　上　竹越與三郎著　定價四拾錢　郵税六

○新日本史　下　竹越與三郎著　定價三拾錢　郵税六

○新日本之青年　德富猪一郎著　定價貳拾錢　郵税四

○國民叢書　人物管見　德富猪一郎著　定價貳拾五錢　郵税貳

○國民叢書　青年と教育　定價拾五錢　郵税四

○今世名家文鈔　德富猪一郎編纂、久保田米僊畫　定價貳拾錢　郵税四

○誕生日　人心の明鏡處世の秘寶　定價五錢　郵税貳

○一語千金　高橋五郎著　定價貳拾錢　郵税貳

○排僞哲學論　梶原保人著　定價貳拾五錢　郵税四

○政黨論　ゼームスブライス著、人見一太郎譯　全貳冊二千九百冊頁餘　當分の內は特別を以て二圓五十錢に減價　正價四圓　運賃貳拾錢

○平民政治　湖處子宮崎八百吉著　定價拾五錢　郵税四

○歸省

ヴ井クトル、ユーゴー著森田思軒譯
○懷舊　定價四拾錢　郵税四拾錢

文學博士元良勇次郎著
○佛國不換紙幣發行始末并信用論　定價拾貳錢　郵税貳錢

佛國プーミー原著　深井英五譯
○英米佛比較憲法論　定價貳拾四錢　郵税貳拾錢

人見一太郎著
○第二之維新　定價貳拾錢　郵税貳拾錢

法學博士本野一郎述
○多數撰擧之弊付矯正策　定價拾貳錢　郵税貳拾錢

國民之友自第一號至第八號社說及特別寄書
○國民之友第一集　定價貳拾五錢　郵税貳拾五錢

國民之友自第十五號至第廿四號社說
○國民之友第三集　定價貳拾四錢　郵税四拾五錢

國民之友自第廿五號至第卅六號社說
○國民之友第四集　定價拾八錢　郵税四拾錢

自第十四號至第廿四號十一冊合本
○國民之友第二卷　定價四拾錢

自第卅七號至第五十四號十八冊合本
○國民之友第四卷　定價五拾五錢

自第五十五號至第六十八號十三冊合本
○國民之友第五卷　定價五拾錢

自第六十九號至第八十六號十八冊合本
○國民之友第六卷　定價六拾錢

自第八十七號至第百四號十八冊合本
○國民之友第七卷　定價六拾錢

自第百五號至第百二十二號十八冊合本
○國民之友第八卷　定價七拾錢

自第百二十三號至第百四十號十八冊合本
○國民之友第九卷　定價七拾錢

自第百四十一號至第百五十八號十八冊合本
○國民之友第十卷　定價七拾錢

自第百五十九號至第百七十六號十八冊合本
○國民之友第十一卷　定價七拾錢

自第百七十七號至第百九十四號十八冊合本
○國民之友第十二卷　定價七拾錢

自第百九十五號至第二百十二號十八冊合本
○國民之友第十三卷　定價七拾錢

自第十三號至第二十號八冊合本
○家庭雜誌第二卷　定價四拾錢

國民新聞

健全なる思想を有するものは健全なる生長をなし、進歩の主義を執るものはまた自ら進歩す、國民新聞は傲然たる獨立大新聞也、彼は金の爲めに動かず、人の爲めに動かず、只た其の抱持せる健全なる平民主義の爲めに動き不平あるものを避け、弱きものを扶け、正を蹈んで恐るゝなきを期す。國民新聞は進歩の友なり、革新の急先鋒なり、進歩する眼孔を以て活動する社會を看、進歩する手腕を以て進歩する大勢を描き出す。日の出來事を知らんと欲する者、一ケ月の傾向を知らんと欲するもの、年月の大勢を知らんと欲するものは皆な國民新聞を讀め。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

定價一枚　代金一錢五厘
一ケ月　前金三拾五錢
三ケ月　全金一圓
市外郵税　一ケ月金拾三錢

國民之友

國民之友は既に雜誌界の巨人として認識せられたり、彼の『社説』は眼と手と共に到つて大勢を揣摩し、事に先つて事を論じ、靜かにしては人生の問題より、激しては時勢問題、社

毎月三回三の半ヶ年前金一圓二錢　定價一冊金六錢
日發兌　市外郵税五厘　宛

會問題の骨髄に衝き入る、彼の『寄書』は天下の名士か特に考へ特に草したる卓論を集めたるもの、名家慘憺の經營に成りたる名篇を集めたる『藻鹽草』と双璧の觀をなす『史論』の痛快明透なる見識は以て『雜錄』の艶麗瀟洒なる題目筆力と對すべく、『批評』の模嚴は『時事』の深酷に對すべく『當今の問題』あり『海外思潮』あり『經濟時事』あり、時に『大勢一斑』を掲けて大勢の推移を論す

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

毎月二回定價金五十錢
十日廿五半ケ年(十二冊)前金五十錢
日發兌一ケ年(廿四冊)仝一圓
郵稅一冊ニ付五厘宛

家庭雜誌

家庭雜誌は社會の地盤を改革し、和樂光明なる新家庭を作らしめんと欲するものなり、其論評は平直、其觀察は警拔、史談あり今古東西烈女偉人を清秀なる筆もて寫し、科學あり最も愉快なる方法を以て物質的文明を說き、文藝には高妙なる小說詩歌音樂繪畫批評詩話文話あり、家政には家事經濟育兒法衞生談看病術調理法社交一斑日用品物價裁縫編物婦人の職業案內家內の取締奴婢の使ひ方及ひ衣食住に關する諸事あり、雜錄あり、時事一斑あり、寄書投書あり、普通雜誌外別に一種の生面を開けり。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

680